国道202号今宿道路関係
埋蔵文化財調査報告書
Ⅰ

糸島市埋蔵文化財発掘調査報告書

第 20 集

東真方古墳群Ｃ群第２次調査

奈良尾遺跡第２次調査

多久口木古墳群第２次調査

2019

糸島市教育委員会

東真方古墳群Ｃ群第２次調査区　空中写真
（東から、写真左の道路部分と樹木が茂っている部分が第１次調査区北端）

奈良尾遺跡第２次調査区　空中写真
（西から、写真右の道路部分と竹林部分が第１次調査Ｉ区北端）

巻頭図版 2

多久口木３号墳　空中写真
（東から、写真左の道路部分が第１次調査区。左中央が西九州自動車道前原料金所）

多久口木３号墳　空中写真
（南東から、写真手前が後円部、右奥が前方部、表土除去後撮影）

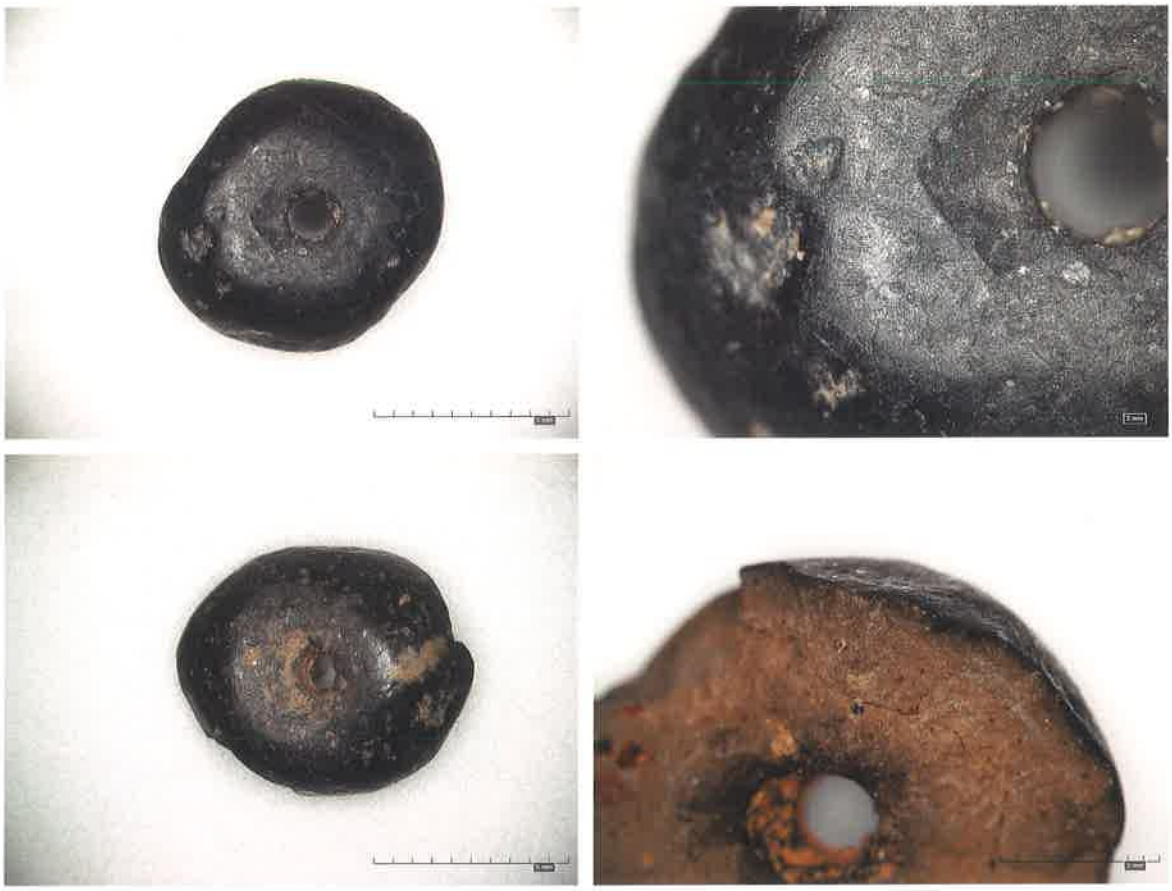
多久口木３号墳　石室検出状況（東から）

多久口木３号墳　墳丘土層断面（左：南から東西土層断面、右：西から南北土層断面）

多久口木３号墳　石室床面装身具類出土状況
（左：南から33－１、右：南から33－２、耳環の周囲に土製丸玉が散らばっている）

巻頭図版 4

多久口木３号墳　石室床面出土耳環（左：33－1、右：33－2）



多久口木３号墳　石室床面出土土製丸玉
（左上：34－25、右上：34－25拡大、左下：35－48、右下：35－48の裏面の割れ口拡大）

多久口木３号墳　石室出土鉄器および布付着状況（左：□内が布の付着している部分、右：布の拡大）

序

ここに国道202号今宿道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書の１冊目を刊行します。

本書には糸島市東・多久地区で実施されている国道202号今宿道路の拡幅工事に伴い平成28・29年度に発掘調査を行った東真方古墳群と奈良尾遺跡、多久口木古墳群の成果を掲載しています。

本市がある糸島半島には、数多くの遺跡が埋蔵されており、旧石器時代から現在に至るまでの当地の歴史や人々の暮らしのようすをうかがい知ることができる重要な資料となっています。

この地にあって、東真方古墳群では古墳時代前期の石棺墓が、奈良尾遺跡では弥生時代の包含層と中世の墓地が、多久口木古墳群では前方後円墳が発見されており、かつてこれらの遺跡の周辺に人々の営みがあったことがわかりました。

本書が、当該遺跡の内容を将来にわたって伝えていく資料としてだけでなく、周辺地域はもとより北部九州全体の歴史を紐解く上での鍵となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたってご理解とご協力を頂きました福岡国道事務所様、勝善院様と周辺住民の皆様、科学分析にご協力を頂きました福岡市埋蔵文化財センター様、金属器の保存処理にご協力を頂きました株式会社葵文化様、そして、暑さと寒さをいとわず調査に参加された発掘調査作業員の皆様に心から感謝を申し上げます。

平成31年3月14日

糸島市教育委員会
教育長　家宇治 正幸

例　言

1．本書は糸島市の東・多久地区にて、国道202号今宿道路拡幅工事に伴い実施した文化財調査の報告書である。
2．発掘調査および報告書作成等は国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所からの委託事業である。
3．東真方古墳群C群では昭和63～平成元年、奈良尾遺跡では平成元年、多久口木古墳群では昭和62年にそれぞれ発掘調査が実施されている。ついては、これら過去のものを第１次調査と捉え、今回の調査を第２次調査とし、区別することとした。
4．現場における遺構実測と地形測量は、瓜生秀文、秋田雄也、江野道和、生田弘毅、池田幸介、市丸千賀子、市丸正喜、久間美佐子、黒柳政信、仲西和豊、西村民子、濱田涼子、藤木和子、藤森啓子、堀正三、松隈耕二、三宅浩一、宮崎哲雄、吉原明美、和多治子が行った。
5．Ⅲ．科学分析については福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏、松園菜穂氏から玉稿をいただいた。
6．多久口木３号墳から出土した金属器のＸ線写真撮影と玉類等の分析については、福岡市埋蔵文化財センターの比佐氏、松園氏にご協力をいただいた。
7．巻頭図版４の多久口木3号墳石室床面出土土製丸玉、多久口木3号墳石室出土鉄器布付着状況の布の拡大、図版11の多久口木3号墳出土鉄器Ｘ線写真は福岡市埋蔵文化財センターから写真データを提供いただいた。
8．現場における写真および出土遺物の撮影は瓜生、江野が行った。
9．現場における空中写真撮影は有限会社空中写真企画に委託した。
10．本書に掲載した全体図等の座標は世界測地系（測地成果2000、2011）を用いている。
11．遺物の復元、実測、製図は主に、山崎嵩雄、藤野さゆり、稲冨聡、田尻裕泰、秋田、江野が作成した。
12．本書の挿図中の遺物番号は写真図版の番号と統一している。
13．多久口木３号墳の横穴式石室の名称は奥壁を向いて左右側壁としている。
14．本書の編集とⅠ・Ⅱの執筆は江野が行った。

本文目次

Ⅰ．はじめに …… 1
1．調査に至る経過 …… 1
2．調査の組織 …… 1
3．調査の工程 …… 1
4．過去の調査 …… 2
5．位置と環境 …… 5
（1）地理的環境 …… 5
（2）歴史的環境 …… 5

Ⅱ．調査の記録 …… 7
1．東真方古墳群Ｃ群の調査 …… 7
（1）第１次調査の概要 …… 7
（2）第２次調査の概要 …… 7
（3）遺　　構 …… 11
（4）出土遺物 …… 11
2．奈良尾遺跡の調査 …… 14
（1）第１次調査の概要 …… 14
（2）第２次調査の概要 …… 14
（3）遺構および出土遺物 …… 14
3．多久口木３号墳の調査 …… 26
（1）第１次調査の概要 …… 26
（2）第２次調査の概要 …… 26
（3）遺　　構 …… 28
（4）出土遺物 …… 34
4．小　　結 …… 55

Ⅲ．科学分析
1．多久口木３号墳出土資料の保存科学的調査（比佐・松園） …… 57

挿図目次

第１図　国道202号今宿道路および今宿バイパス関係埋蔵文化財発掘調査地点図（１/30000）……4
第２図　東真方古墳群・奈良尾遺跡・多久口木古墳群の位置と周辺の遺跡図（１/30000）……6
第３図　東真方古墳群の位置と周辺の地形図（１/2500）……8
第４図　東真方古墳群C群第２次調査区　遺構全体実測図（１/200）……9
第５図　東真方古墳群C群第１次調査区 １号墳および第２次調査区遺構実測図（１/100）……10
第６図　東真方古墳群C群第２次調査区　石棺墓実測図（１/20）……12
第７図　東真方古墳群C群第２次調査区　溝状遺構土器出土状況実測図（１/20）……13
第８図　東真方古墳群C群第２次調査区　溝状遺構出土土器実測図（１/３）……13
第９図　東真方古墳群C群第２次調査区　溝状遺構土層断面実測図（１/40）……13
第10図　東真方古墳群C群第２次調査区　表土出土土器実測図（１/３）……13
第11図　奈良尾遺跡の位置と周辺の地形図（１/2500）……15
第12図　奈良尾遺跡第２次調査区　遺構全体実測図（１/400）……16
第13図　奈良尾遺跡第２次調査区　甕棺墓実測図（１/20）……17
第14図　奈良尾遺跡第２次調査区　出土甕棺実測図（１/12）……17
第15図　奈良尾遺跡第２次調査区　火葬土坑実測図（１/20）……18
第16図　奈良尾遺跡第２次調査区　土坑墓実測図１（１/40）……19
第17図　奈良尾遺跡第２次調査区　土坑墓実測図２（１/40）……21
第18図　奈良尾遺跡第２次調査区　土坑墓実測図３（１/40）……22
第19図　奈良尾遺跡第２次調査区　土坑墓実測図４（１/40）……23
第20図　奈良尾遺跡第２次調査区　土坑墓実測図５（１/40）……24
第21図　奈良尾遺跡第２次調査区　24号土坑墓出土土器実測図（１/３）……25
第22図　奈良尾遺跡第２次調査区　試掘調査出土土器実測図（１/３）……25
第23図　多久口木古墳群の位置と周辺の地形図（１/2500）……27
第24図　多久口木古墳群の調査区配置図（１/800）……28
第25図　多久口木３号墳　調査前現況測量図（１/200）……29
第26図　多久口木３号墳　墳丘遺存状況測量図（１/200）……30
第27図　多久口木３号墳　後円部墳丘地山整形状況測量図（１/200）……31
第28図　多久口木３号墳　墳丘土層断面実測図１（１/80）……32
第29図　多久口木３号墳　墳丘土層断面実測図２（１/80）……33
第30図　多久口木３号墳　石室実測図（１/40）……35
第31図　多久口木３号墳　石室敷石実測図（１/40）……36
第32図　多久口木３号墳　石室遺物出土状況実測図（１/20）……37
第33図　多久口木３号墳　石室出土耳環実測図（２/３）……37
第34図　多久口木３号墳　石室出土玉類実測図１（１/１）……38
第35図　多久口木３号墳　石室出土玉類実測図２（１/１）……39
第36図　多久口木３号墳　石室出土鉄器実測図１（１/２、１/３）……41
第37図　多久口木３号墳　石室出土鉄器実測図２（１/２、１/３、１/４）……42
第38図　多久口木３号墳　石室出土鉄器実測図３（１/２）……43

第39図　多久口木３号墳　墳丘土器出土状況実測図１（１/20）……44
第40図　多久口木３号墳　墳丘土器出土状況実測図２（１/20）……44
第41図　多久口木３号墳　墳丘出土土器実測図１（１/３）……45
第42図　多久口木３号墳　墳丘出土土器実測図２（１/３）……47
第43図　多久口木３号墳　墳丘出土土器実測図３（１/３）……49
第44図　多久口木３号墳　墳丘出土土器実測図４（１/３）……50
第45図　多久口木３号墳　墳丘出土土器実測図５（１/３）……51
第46図　多久口木３号墳　墳丘出土土器実測図６（１/３）……52
第47図　多久口木３号墳　墳丘出土石器実測図（１/３）……52
第48図　墳丘推定復元図（１/200、１/400）……56
（本文中写真）
写真１　耳環のデジタルマイクロスコープ画像……59
写真２　ガラス小玉のデジタルマイクロスコープ画像……60

付図目次

第１図　奈良尾遺跡第２次調査区　遺構全体実測図（１/200）

図版目次

巻頭図版１　東真方古墳群C群第２次調査区　空中写真（東から）
奈良尾遺跡第２次調査区　空中写真（西から）
巻頭図版２　多久口木３号墳　空中写真（東から）
多久口木３号墳　空中写真（南東から）
巻頭図版３　多久口木３号墳　石室検出状況（東から）
多久口木３号墳　墳丘土層断面（南から　西から）
多久口木３号墳　石室床面装身具類出土状況（南から）
巻頭図版４　多久口木３号墳　石室床面出土耳環
多久口木３号墳　石室床面出土土製丸玉
多久口木３号墳　石室出土鉄器および布付着状況

図版１－１　東真方古墳群C群第２次調査区　空中写真（南から）
図版１－２　東真方古墳群C群第２次調査区　空中写真（南から）
図版２－１　東真方古墳群C群第２次調査区　１号石棺墓検出状況（北から）および蓋石除去状況（北から）
図版２－２　東真方古墳群C群第２次調査区　１号石棺墓東側壁検出状況（北西から）および蓋石除去状況（東から）
図版２－３　東真方古墳群C群第２次調査区　１号石棺墓石枕出土状況（北から）および石材除去後完掘状況（北から）
図版３－１　東真方古墳群C群第２次調査区　丘陵東側斜面（東から）
図版３－２　東真方古墳群C群第２次調査区　２号溝土層（東から）

図版３－３　東真方古墳群C群第２次調査区　３号溝土層(東から)および土師器埦出土状況(北から)
図版３－４　東真方古墳群C群第２次調査区　出土遺物
図版４－１　奈良尾遺跡第２次調査区　空中写真(南から)
図版４－２　奈良尾遺跡第２次調査区から第１次調査Ｉ区を望む(北から)
図版５－１　奈良尾遺跡第２次調査区　土坑墓出土状況(東から)(北から)
図版５－２　奈良尾遺跡第２次調査区　土坑墓出土状況(北から)(北から)
図版５－３　奈良尾遺跡第２次調査区　土坑墓出土状況(東から)(南から)
図版６－１　奈良尾遺跡第２次調査区　甕棺墓および土坑墓出土状況(南から)、甕棺墓近景(西から)
図版６－２　奈良尾遺跡第２次調査区　火葬土坑(南から)
図版６－３　奈良尾遺跡第２次調査区　出土遺物
図版７－１　多久口木３号墳　空中写真(南東から)
図版７－２　多久口木３号墳　石室攪乱状況(西から)
図版７－３　多久口木３号墳　石室検出状況(東から)
図版７－４　多久口木３号墳　石室検出状況(南から、西から、北から)
図版７－５　多久口木３号墳　腰石配置状況および腰石配置溝(南東から、南から、東から)
図版８－１　多久口木３号墳　石室床面遺物出土状況(東から)
図版８－２　多久口木３号墳　石室床面遺物出土状況(東から、北から、南から、北から)
図版８－３　多久口木３号墳　石室床面第２面検出状況(東から)
図版８－４　多久口木３号墳　墳丘土器出土状況(南から)
図版９－１　多久口木３号墳　出土鉄器１
図版10－１　多久口木３号墳　出土鉄器２
図版11－１　多久口木３号墳　出土鉄器X線写真
図版12－１　多久口木３号墳　石室出土ガラス製小玉
図版12－２　多久口木３号墳　石室出土土製丸玉
図版12－３　多久口木３号墳　墳丘出土土器１
図版13－１　多久口木３号墳　墳丘出土土器２
図版14－１　多久口木３号墳　墳丘出土土器３

表目次

表１　旧今宿バイパスおよび国道202号今宿道路関係埋蔵文化財発掘調査地点一覧表 …… 3
表２　多久口木３号墳出土　弥生土器一覧表……53
表３　多久口木３号墳出土　玉類一覧表……54
表４　耳環の計測値……59
表５　ガラス玉の調査結果……59

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経過

本書で報告する東真方古墳群、奈良尾遺跡、多久口木古墳群の３遺跡の調査は国道202号今宿道路の改良工事に伴い実施されたものである。今宿道路は西九州自動車道の一部であり、福岡市西区拾六町から糸島市二丈福井を結ぶ道路で、国道202号はこの高架下を通る一般道路である。福岡市と他都市との連携強化、高速性、定住の確保、周辺地域の交通緩和が期待されている。調査前、一般道路部分は福岡市西区の青果市場入り口～糸島市の有田中央、同市真方～二丈福井の区間において供用されていたが、この両区間に挟まれた有田中央～真方間が残された状態であった。この区間について平成30年度の供用開始を目指し※、事業主体である国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所では用地内に所在する包蔵地について福岡県教育委員会教育長宛の通知文書を提出。それを元に糸島市教育委員会では試掘調査または踏査を実施し、冒頭の３遺跡について遺構を確認した。改良工事は遺跡の存在する尾根をカットする計画であり、遺構の保存が困難であったため、平成28、29年度の２か年に分けて本調査を実施することとした。

※本書作成中の平成31年１月27日（日）に開通した。

2．調査の組織

今回の発掘調査および報告書作成に係る組織は以下の通りである。

調査主体者　糸島市教育委員会

総括　教 育 長　家宇治正幸

　　教育部長　泊　早苗

　　文化課長　岡部裕俊

（前任　課長）　角　浩行

　　文化課長補佐兼文化・図書館係長　古川秀幸

　　文化課長補佐兼文化財係長　村上　敦

　　（前任　文化財係長）　林　覚

庶務　文化課文化図書館係　主査　大園高弘

　　主事　岸根麗華

　　（前任）　主査　山口　香

調査　　同　文化財係　　主幹　瓜生秀文

　　主幹　江野道和

3. 調査の工程

改良工事の工程に合わせ工区西側から順に調査を実施することとした。平成28年度はまず東真方古墳群から調査を開始し、終了後直ちに奈良尾遺跡の調査に着手した。続く平成29年度に

は工区内で最も東寄りの多久口木古墳群の調査を実施した。それぞれの遺跡の調査期間と調査面積については次の通りである。東真方古墳群は平成28年８月22日～同年10月13日までで400㎡、奈良尾遺跡は平成28年10月14日～平成29年１月10日までで600㎡、多久口木古墳群は平成29年11月６日～平成30年３月16日で251.74㎡である。

３遺跡の調査成果をまとめた報告書の作成と多久口木古墳群の出土金属器の保存処理については平成30年度に行った。

4. 過去の調査

今回報告した３遺跡の隣接地では、過去に今宿バイパスの西九州自動車道と側道部分の建設工事に伴い発掘調査が行われている。この今宿バイパスは海岸線を通る国道202号の交通量増加に対応して建設されたもので、工事区間内は昭和44年から福岡県教育委員会によって発掘調査が実施されている。昭和62年以降は未施工部分について旧前原町が発掘調査を執り行うこととなり、当該年には15地点（表１）について調査が行われ、翌昭和63年には21～26地点と18地点の試掘調査と本調査が実施されている。平成元年度には14－２・３地点の発掘調査、12－２、13－１～３地点と前原インター建設用地の試掘調査が行われた。このうち13地点の一部とインター用地については福岡県教育委員会の職員が実施し、インター用地の発掘調査は引き続き県教育委員会が担当した。

上記地点のうち、本書に掲載した３遺跡の工事区間内に存在するのは26・25・15地点とインター用地である。調査区の呼称については混乱を避けるため、25・15の両地点と前原インター用地において昭和62年～平成元年にかけて実施された調査を第１次調査とし、平成28・29年度に実施した本報告書掲載の調査については第２次調査とする。

最も西側の26地点では尾根上から前方後円墳である東真方古墳群Ａ群１号墳が検出され、西側の低地にある東真方遺跡からは中世の木棺墓や炉跡等が発見された。１号墳は全長約20ｍと小型で、主体部の横穴式石室からは鉄鏃や刀子、耳環が出土しており、６世紀前半～中ごろの築造と考えられている。木棺墓は150×80cmほどの大きさで、青磁や土師皿が副葬されていた。炉跡は鉄滓が出土しており、製鉄炉である可能性が高いと考えられている。

25地点は本書で取り上げる東真方古墳群第２次調査地点の南東側隣接地で、円墳２基が発掘調査されている。詳細については「Ⅱ－1. 東真方古墳群Ｃ群の調査」で述べる。

15地点は多久口木古墳群第２次調査地点の南側隣接地である。第１次調査では円墳２基が発掘調査されたが、今回の第２次調査の対象となった３号墳の存在についても一緒に確認されており、続き番号が振られている。内容の詳細については「Ⅱ－3. 多久口木３号墳の調査」で述べる。

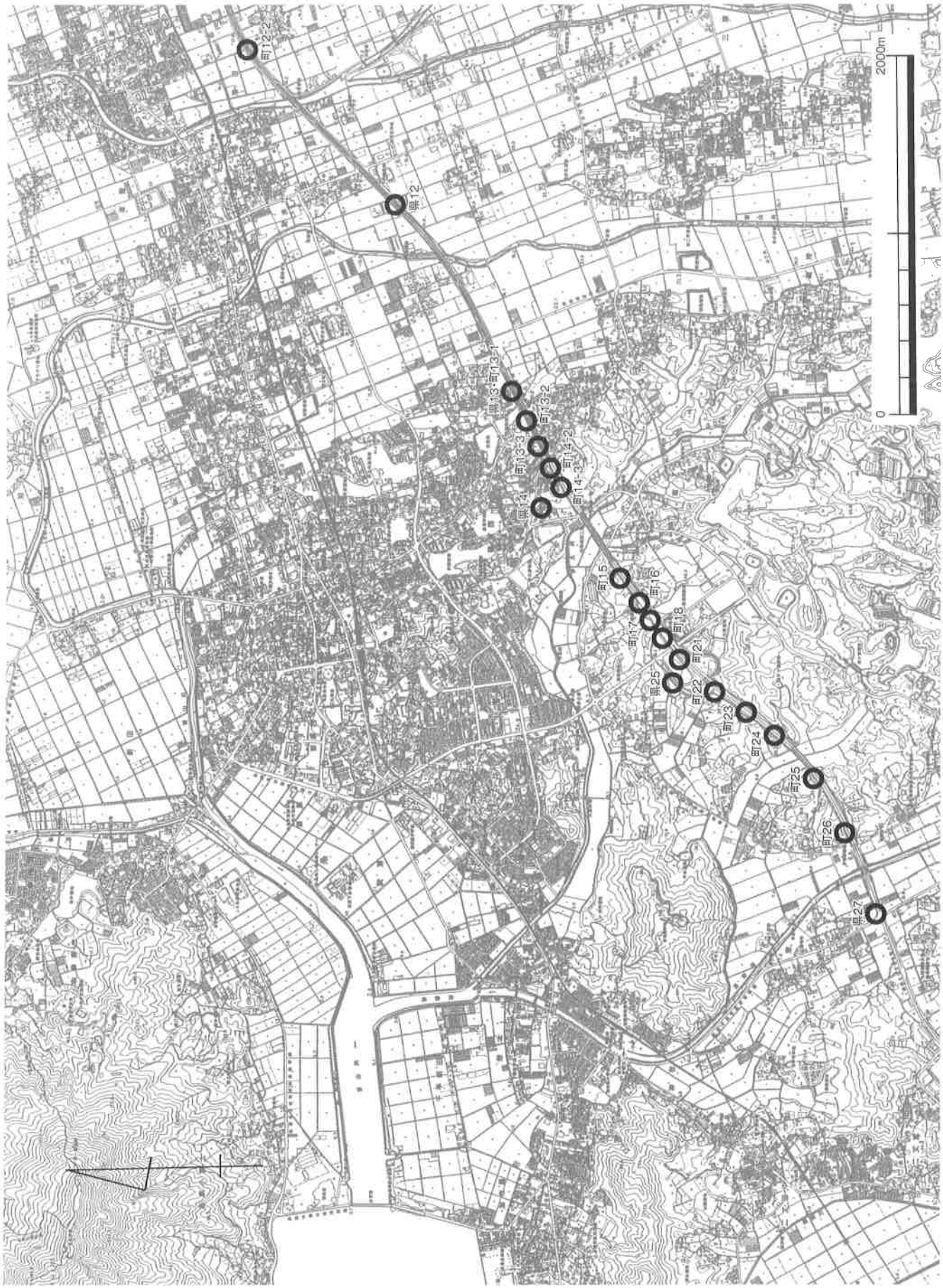
前原インター用地については奈良尾遺跡第２次調査地点の南東側隣接地にあたる。詳細については「Ⅱ－2. 奈良尾遺跡の調査」で述べる。

表１　旧今宿バイパスおよび国道202号今宿道路関係埋蔵文化財発掘調査地点一覧表

地点番号（福岡県）	地点番号（旧前原町）	遺跡名	次数	所在地	調査面積（㎡）	調査主体	調査年度（年度）	内　容	出典	備　考
12		波多江遺跡		糸島市波多江	3,496	福岡県	昭和46・53	中世の環濠居館、溝、掘立柱建物等を検出。土師器、瓦質土器、石製品等が出土。	2	出典内の一覧表には「条里遺跡」で掲載
	12-2	池田東遺跡		糸島市池田	18,000	旧前原町	平成2	縄文時代晩期～弥生時代初頭の流路、古墳時代・中世の包含層を検出。縄文土器、弥生土器、石器、土師器、陶磁器、木器等が出土。	4	
13		古野遺跡		糸島市有田・篠原	482	福岡県	昭和46	近世の溝を検出。表土から弥生土器片等が出土。	1	
	13-1	有田古野遺跡		糸島市有田・篠原	4,050	旧前原町	平成2	古墳時代後期の住居、中世の環濠居館等を検出。弥生土器、陶磁器、木器等が出土。	4	
	13-2	原口遺跡	3次	糸島市有田	4,950	旧前原町	平成2	古墳時代の住居、掘立柱建物、中世の土坑等を検出。土師器、須恵器、瓦器等が出土。	4	
	13-3	原口遺跡	2次	糸島市有田	5,400	旧前原町	平成2	古墳時代後期の住居、掘立柱建物、土坑墓等を検出。土師器、須恵器、陶磁器等が出土。	4	
14		上鐘子遺跡		糸島市有田		福岡県	昭和46～47	弥生時代の竪穴住居、掘立柱建物、方形溝、溝状遺構、土坑墓を検出。弥生時代中～後期の土器が出土。	1	
	14-2	上鐘子南遺跡		糸島市有田	800	旧前原町	平成元	土坑、溝、ピットを検出。弥生時代後期初頭の甕棺の破片、須恵器、土師器等が出土。	4	
	14-3	上鐘子遺跡		糸島市有田	300	旧前原町	平成元	古墳時代後期の住居、溝を検出。須恵器、土師器等が出土。	4	
	15	多久口木古墳群	1次	糸島市多久	1,800	旧前原町	昭和62	6世紀代の円墳2基を調査。須恵器、土師器、鉄製武器類、装身具類、馬具類が出土。その他、弥生土器、石器、黒色土器が出土。	5	
			2次	糸島市多久	251.74	糸島市	平成29	5世紀後葉～6世紀前半の前方後円墳1基を調査。須恵器、土師器、鉄製武器類、装身具類が出土。その他、弥生土器、石器が出土。	8	
	16			糸島市多久		旧前原町			4	試掘のみ、遺構なし
	17			糸島市多久		旧前原町			4	試掘のみ、遺構なし
	18			糸島市多久		旧前原町			4	試掘のみ、遺構なし
	21			糸島市多久		旧前原町			4	試掘のみ、遺構なし
	22			糸島市多久		旧前原町			4	試掘のみ、遺構なし
	23			糸島市東		旧前原町			4	試掘のみ、遺構なし
	24			糸島市東		旧前原町			4	試掘のみ、遺構なし
	25	東真方古墳群C群	1次	糸島市東	1,800	旧前原町	平成元～2	古墳2基を調査。銅鏡、土師器、鉄器、装身具類が出土。	7	2ヶ年度に渡り継続調査
			2次	糸島市東	400	糸島市	平成28	石棺墓、溝、ピットを検出。土師器の椀と手捏土器が出土。	8	
	26	東真方古墳群Ａ群		糸島市東	1,150	旧前原町	昭和63	6世紀代の前方後円墳1基を調査。須恵器、武器類、装身具類が出土。	6	
		東真方遺跡			550	旧前原町	昭和63	中世の木棺墓、製鉄炉、溝、ピットを検出。木棺墓からは青磁碗、土師皿、鉄釘が、炉跡からは鉄滓、炉体が出土。	6	
25		奈良尾遺跡	1次	糸島市東	11,000	福岡県		弥生時代の甕棺墓、古代の鍛冶関係遺構、中世の火葬土坑、中・近世の土坑墓を検出。弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、銅銭などが出土。	3	
			2次	糸島市東	600	糸島市	平成28	弥生時代の甕棺墓、中世の火葬土坑、土坑墓、ピットを検出。土坑墓からは土師皿片、骨片が出土。	8	
27		東・太田遺跡		糸島市東	2,700	福岡県	昭和58	古墳時代の竪穴住居、平安時代の掘立柱建物と土坑を検出。石器、磁器、黒色土器、土師器、石鍋等が出土。	9	

（出典）

1．福岡県教育委員会 1977『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第５集
2．福岡県教育委員会 1982『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第６集
3．福岡県教育委員会 1991『奈良尾遺跡』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 13 集
4．前原町教育委員会 1991『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査概報』前原町文化財調査報告書第 37 集
5．前原町教育委員会 1992『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ』前原町文化財調査報告書第 39 集
6．前原町教育委員会 1992『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ』前原町文化財調査報告書第 42 集
7．前原町教育委員会 1993『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ』前原町文化財調査報告書第 48 集
8．糸島市教育委員会 2019『国道 202 号今宿道路関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』糸島市文化財調査報告書第 20 集
9．福岡県教育委員会 1985『東・太田遺跡』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第 12 集



第１図　国道202号今宿道路および今宿バイパス関係埋蔵文化財発掘調査地点図（1/30000）
（県…福岡県調査地点、町…旧前原町調査地点、番号は表１と一致）

5．位置と環境

（1）地理的環境

本報告書に掲載した３遺跡は糸島市のほぼ中央部に位置する。遺跡周辺は背振山系から北側に派生する花崗閃緑岩を基盤とした丘陵の先端部付近にあたる。丘陵の西には長野川、東から北にかけては多久川が流れ、両河川によって開析された平野が加布里湾に向かって続いている。丘陵の先端部は大まかに４つの尾根に分枝しており、東真方古墳群は最も西側の尾根上、奈良尾遺跡は西から３つ目の尾根上、多久口木古墳群は最も東側の尾根上にある。それぞれの尾根の間には両河川の支流が流れ、狭隘な谷底平野が入り込み、複雑な地形を成している。本市の東側には雷山川、瑞梅寺川と支流の川原川等によって形作られた広範な怡土平野があるが、上述の長野川と多久川流域は両岸近くに丘陵が迫る狭長な平野部となっており、対照的な風景を呈している。

（2）歴史的環境

３遺跡の位置する丘陵上とその周辺には弥生時代～中世・近現代の遺跡が多く分布しており、それぞれの時代において集落や古墳、その他の墓がつくられたと考えられる。

集落跡としては多久口木古墳群と同じ尾根の北端に市道拡幅工事に関連して調査された多久柿原遺跡がある。いわゆる松菊里型住居が検出され、弥生時代中期初頭の土器の他、土器片を再利用した紡錘車などが出土している。また、墓地としては同一尾根の南西側に産業団地の造成工事に先立ち調査された多久遺跡群Ｄ地点がある。奈良時代の３基の火葬墓が検出され、内１基は小石室を備え、中に４つの骨蔵器が納められていた。奈良尾遺跡の北側、丘陵の端部には県営圃場整備に伴い調査が行われた多久元多久遺跡がある。弥生時代の土器が多く混入する包含層と、古墳時代～中世までの溝状遺構、井戸、火葬土坑、ピットが検出された。火葬土坑は長さ125cm、幅54cm、深さ22cmで、床面には棺台と考えられる石が２個あり、土坑の壁面は焼けた状態であった。奈良尾遺跡でも類似する遺構が発見されており、中世期においては当該丘陵上に墓域が点在していた可能性がある。

古墳としては多久・長野両河川の流域に多数の古墳が存在する。まず、多久川流域についてみていくと多久丘陵の北側対岸に位置する荻浦丘陵上には４～７世紀にかけて築造された計16基の古墳が確認されている。このうち全長約30ｍで４世紀の前方後円墳である立石１号墳からは方格Ｔ字鏡が出土し、全長24ｍで６世紀の前方後円墳である砂魚塚古墳からは馬具や大刀などの武器類、玉や耳環などの装身具類が出土している。また、12.4×11ｍの６世紀の方墳である石川１号墳からは皮袋形土器が出土している。この荻浦丘陵は８世紀以降になると火葬土坑や骨蔵器が納められた土坑が造られる。荻浦丘陵から多久川を遡ると右岸に坂元古墳群、香力古墳群などが分布する。もう一方の長野川流域については河口から上流に向かって順に、右岸に直径56ｍの大型円墳である釜塚古墳、少し上流の左岸には全長103ｍで糸島最大の前方後円墳である一貴山銚子塚古墳、さらに遡ると、左岸丘陵上に全長45ｍの前方後円墳である東二塚古墳、右岸丘陵上に前方後円墳である林崎古墳と日明古墳群、さらに上流には前方後円墳を含む長嶽山古墳群がある。このように長野川流域の両岸には首長墓系列に連なる重要な古墳が分布していることがわかる。

1. 東真方古墳群Ｃ群　2. 奈良尾遺跡　3. 多久口木古墳群　4. 東真方古墳群Ａ群・東真方遺跡　5. 東真方古墳群Ｂ群　6. 多久柿原遺跡
7. 多久遺跡群Ｄ地点　8. 多久元多久遺跡　9. 立石古墳群　10. 砂魚塚古墳群　11. 石川古墳群　12. 坂ノ下古墳群　13. 井ノ浦古墳
14. 辻ノ田古墳群　15. 坂元古墳群　16.有田塞ノ本古墳群　17. 香力古墳群　18. 釜塚古墳　19. 神在横畠古墳　20. 一貫山銚子塚古墳
21. 東二塚古墳　22. 林崎古墳　23. 日明古墳群　24. 荒毛１号墳　25. 長嶽山古墳群　26. 篠原東遺跡群
（●は古墳　⬭は古墳群　○は集落または墓　⬭は遺跡群）

第２図　東真方古墳群・奈良尾遺跡・多久口木古墳群の位置と周辺の遺跡図（1/30000）

Ⅱ．調査の記録

1．東真方古墳群C群の調査

（1）第1次調査の概要

東真方古墳群C群は今宿バイパス（西九州自動車道と側道部分）の建設工事に先立ち旧前原町教育委員会によって昭和63～平成元年度にかけて第1次調査が行われた。道路が丘陵を分断したため、景観は大きく変わっているが、かつては標高約32ｍを頂上とする丘陵であり、南北方向と東西方向に尾根を伸ばしていた。

第1次調査の報告ではこの尾根上に計6基の古墳が確認されている。丘陵頂上部に1号墳、南西方向の尾根上に2号墳、南北方向に名称未定の4基がある。このうち、第1次調査では工事区域内にあった1・2号墳が調査の対象となった。以下、調査の結果について概要をみていく。

1号墳は直径7.5ｍの円形を呈し、周囲の3／4程度に溝を巡らせており、北側には陸橋部があるとされる。古墳の中央には主体部となる箱式石棺が位置する。石棺周囲の墓坑は長さ2.55m、幅1.80mの長方形で、2段に掘り込み、石棺を据えている。石棺の大きさは内法で長さ1.75m、幅0.40m深さ0.25mで、蓋石は5枚残っており、両側壁は3枚ずつ、両小口壁は1枚ずつ石を立て、小口を両側壁で挟み込むように組み合わせている。石棺内部東側には枕石と考えられる板石が据えられ、南側からは面径9.2cmの方格規矩鏡1枚が発見されている。また、埋土からは刀子片1点とガラス玉1点が出土している。棺内には赤色顔料が塗られていた可能性があり、赤みを帯びた状態であった。古墳の時期は4世紀後半頃と考えられている。

2号墳は7.4×6.7mの楕円形を呈していた。南西側に前方部状のテラスが認められたものの後世の削平によるものと考えられている。古墳の中央には主体部となる小型の竪穴式石室が位置する。石室の周囲には長さ1.86m、幅1.15m、深さ0.20mの楕円形の墓坑が掘られている。石室の大きさは内法で長さ1.10m、幅0.33～0.22m、深さ0.30mである。石室上部は破壊されており、蓋石は残っておらず、壁面の石積は1～2段のみが残存していた。1号墳と同様、石室内には赤色顔料が塗られた可能性があるが、石室内からの出土遺物は確認されていない。古墳の時期は4世紀末～5世紀初頭と報告されている。

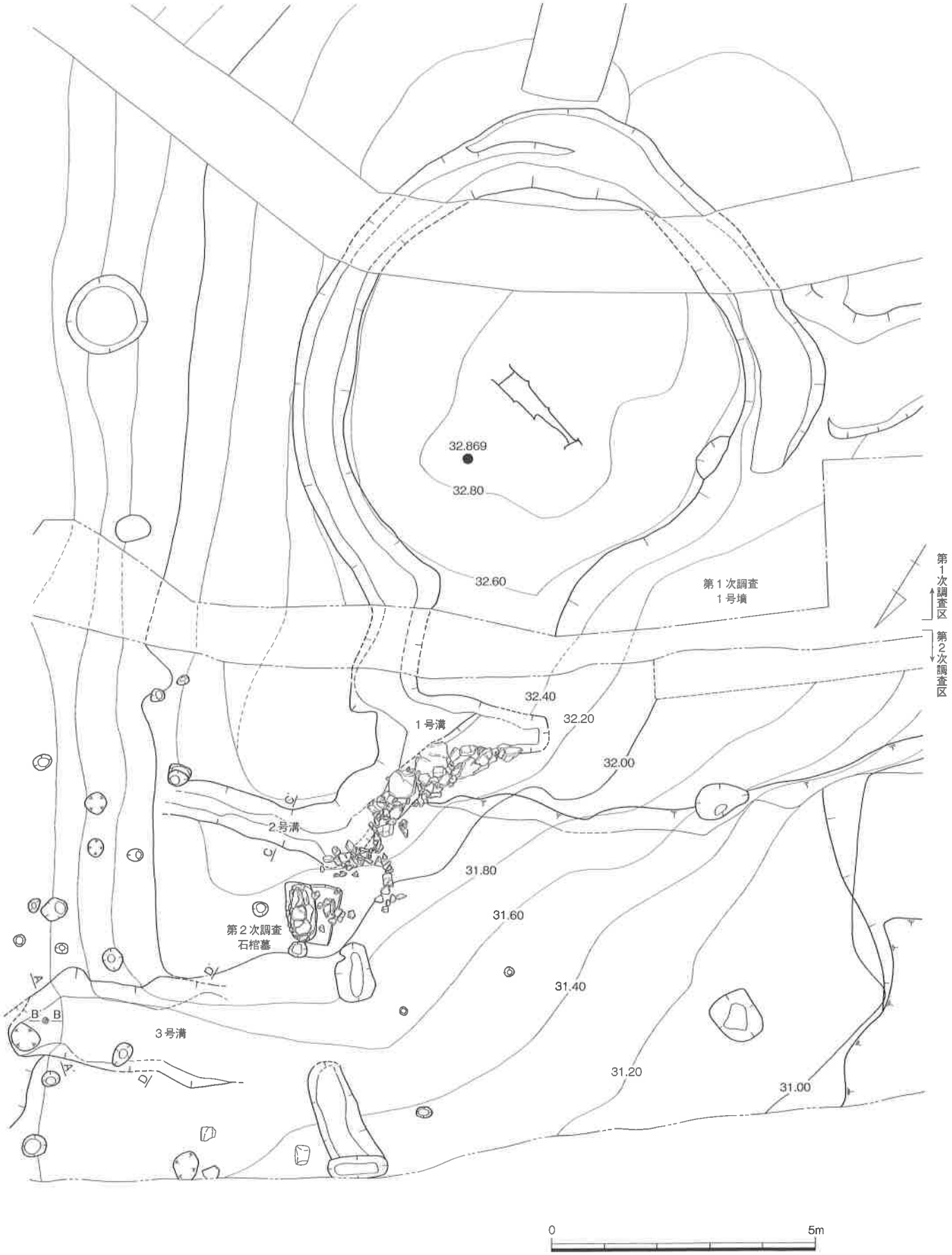
両古墳の他、第1次調査では溝、土坑、ピットが検出されている。

（2）第2次調査の概要（第4図）

平成28年度に提示された工事計画においては第1次調査時に区域外で確認していた4基の古墳の内の最も南側の1基が工事対象地区に入ることが想定された。そこで、人力による試掘調査を実施したところ、腐葉土等からなる表土のすぐ下から石棺墓が1基検出されたため、本調査を行うこととなった。調査前、第2次調査区は杉林に孟宗竹や破竹、雑木が侵入している状態であり、地形は3段に造成されていた。本調査にあたっては試掘調査時に確認した石棺墓のある丘陵最上段部分に長さ約48m、幅約10mの細長い調査区を設定した。

第３図　東真方古墳群の位置と周辺の地形図（1/2500）

第４図　東真方古墳群Ｃ群第２次調査区　遺構全体実測図（1/200）



第５図　東真方古墳群Ｃ群第１次調査区１号墳および第２次調査区遺構実測図（1/100）

（3）遺構

調査区からは先述の石棺墓の他に溝状遺構、ピット等が検出された。このうち、ピットは並ぶものがないため、その多くが根の痕跡である可能性が考えられる。これは、第１次調査時と同じ状況である。

①石棺墓（第６図）

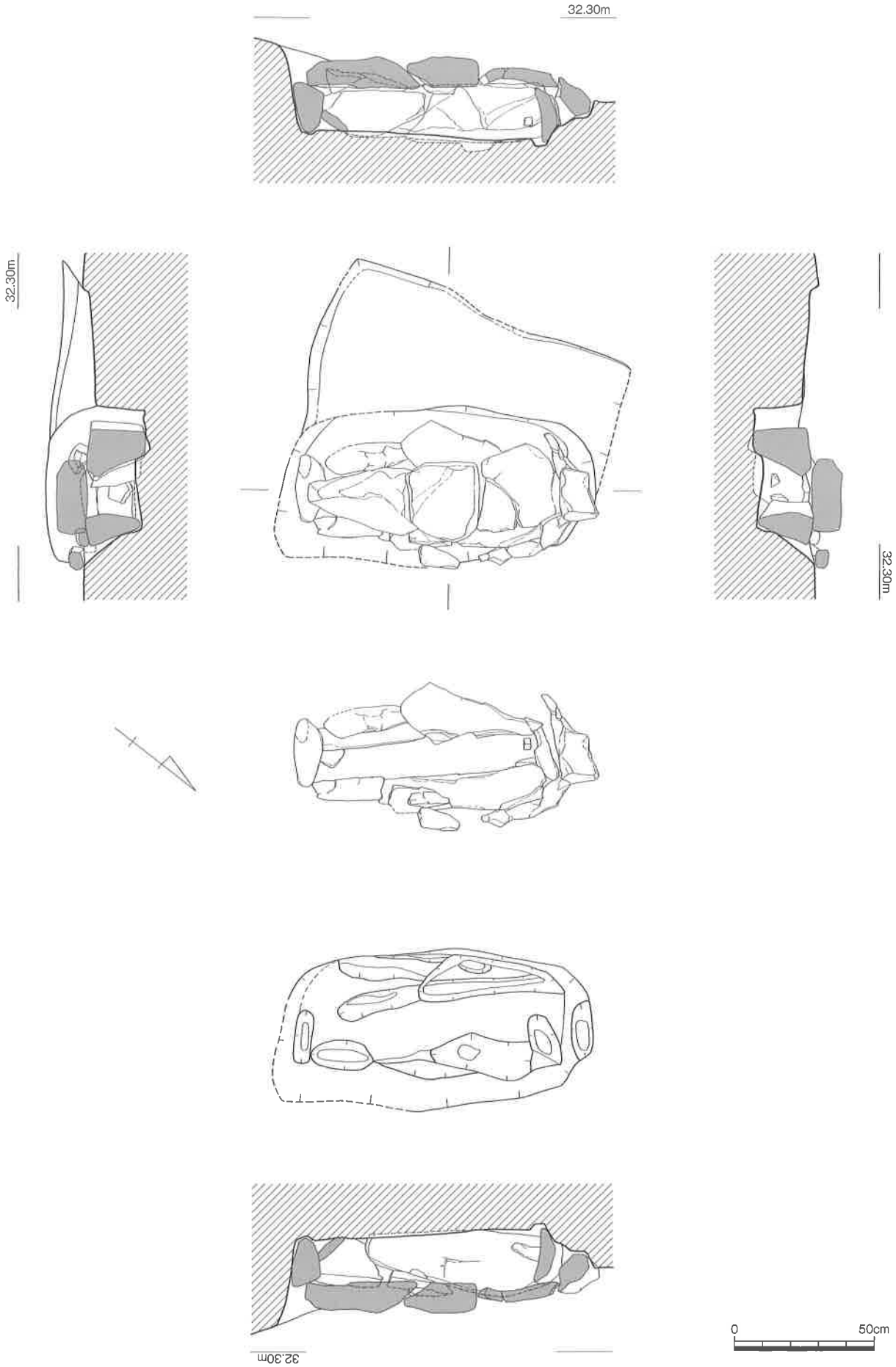
石棺墓は丘陵の鞍部、標高32m付近で検出された。上述したように、石棺の蓋石が表土直下で確認されていることと墓坑の残りが悪いこと等から大きく削平されていると考えられる。墓坑は２段となっており、平面形態については上段は方形、下段は隅円長方形に掘り込み、花崗岩の石棺材を据えている。なお、墓坑の上段の約半分にあたる北東側は削平と根の攪乱により失われていた。石棺の蓋は３枚の石が使われており、最も南東側の１枚が平面三角形、中央と北西側の２枚が方形である。南東と中央の２枚は厚みがあり、北西の１枚は薄く内面が反った形状となっている。石棺の本体の規模は内法で長さ75cm、幅13cm、深さ20cmである。基本的に側壁は２枚、小口石は１枚で構成されるが、側壁の一部は高さを合わせるために２段に積まれ、北西小口石は背面外側にもう１枚の石を配置している。石棺床面の南東側には板石が置かれており、石枕として使用された可能性があり、１号墳と共通する。棺内からは副葬品等の遺物の出土はなく、第１次調査時に確認されたような赤色顔料等の付着も認められなかった。

②溝状遺構（第５・７・９図）

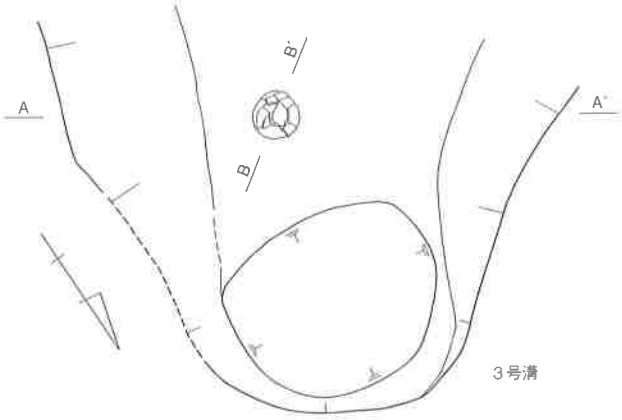
第２次調査区では３本の溝を検出した。１号溝は調査区中央南端付近で発見されたもので、L字形に折れ曲がっている。東西の直線部における規模は長さ3.80m、幅1.30m、深さ0.36ｍである。過去の地形測量図および等高線等を頼りに第１次調査区と第２次調査区の主要部を合成すると１号溝は１号墳の陸橋部東側の溝に繋がる可能性が高いことがわかった（第５図）。この溝で北側を区画された１号墳陸橋部の形態をみると溝の内側は前方部となる可能性があるが、長さが短くなるため帆立貝式の前方後円墳であったと考えられる。２号溝は丘陵尾根を横断する方向に掘られており西端で南側に折れ曲がる。直線部の長さ3.50m、幅0.80m、深さ0.13ｍで遺物の出土はない。３号溝は丘陵尾根を横断する方向に掘られており、２号溝とほぼ平行になる。西側は削平のため消滅している。残存部で長さ4.50m、幅2.00m、深さ0.50ｍであり東側で土師器の埦が１点（第８図１）出土している。２・３号の２本の溝は石棺墓を挟むように位置していることから墓域を区画する溝と考えることもできるが、石棺墓に墳丘等が残っておらず、両溝と有機的に結びつける材料もないことから確定はできない。

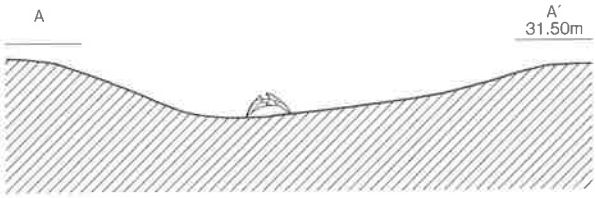
（4）出土遺物（第８・10図）

第２次調査区における出土遺物は少ない。第８図１は上述の３号溝からの出土品である。土師器の埦で溝の底面から上下さかさまの状態で出土した。割れているため数片に分かれるがほぼ完形である。口縁部径11.0cm、高さ5.3cmで、器壁は薄い。底部は丸く、口縁部は摘まんで仕上げる。この他に表土から第10図１の手捏土器が出土している。口縁部の一部が欠けるがほぼ完形である。口縁部径5.4cm、高さ7.7cmで、底部の器壁が厚い。底部はやや尖り気味の丸底で、口縁部は薄く摘まみ出しており、全体に指頭痕が残っている。

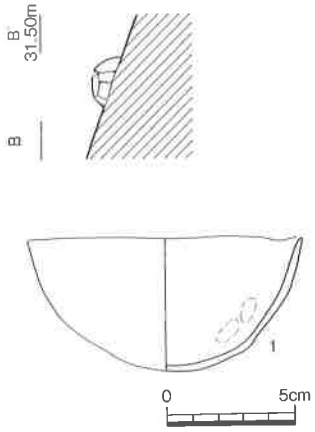


第６図　東真方古墳群Ｃ群第２次調査区　石棺墓実測図（1/20）

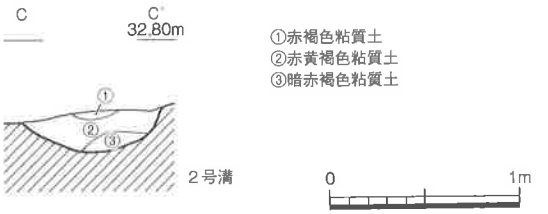


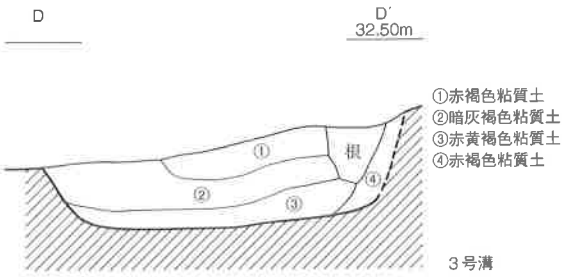


第７図　東真方古墳群Ｃ群第２次調査区
溝状遺構土器出土状況実測図（1/20）

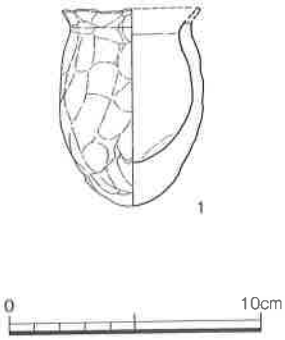


第８図　東真方古墳群Ｃ群第２次調査区
溝状遺構出土土器実測図（1/3）





第９図　東真方古墳群Ｃ群第２次調査区
溝状遺構土層断面実測図（1/40）



第10図　東真方古墳群Ｃ群第２次調査区
表土出土土器実測図（1/3）

2．奈良尾遺跡の調査

（1）第１次調査の概要

奈良尾遺跡の第１次調査は前原インターの建設工事に先立ち福岡県教育委員会によって平成元年に実施されている。調査前は雑木林であったが、近世～現代にかけては墓地として使用されていた形跡があり、江戸時代の紀年銘が入った墓石が放置された状態であった。尾根上から西側斜面にかけてⅠ区、東側斜面にⅡ区の２箇所を調査区に設定して本調査が行われた。合計した調査面積は11000㎡である。今回報告する第２次調査地点は第１次調査Ⅰ・Ⅱ区と同一尾根上の北側斜面に当たるとともにⅠ区の調査区北端とほぼ接する位置にある。

第１次調査では主に弥生時代～古墳時代、古代、中近世の遺構と遺物が確認されている。以下、時代別にみていく。

弥生時代～古墳時代の遺構はⅠ区で検出されている。弥生時代中期中頃の合口式の成人甕棺２基と小児用甕棺２基が出土し、弥生時代～古墳時代までの包含層が確認されている。

古代の遺構としてはⅡ区で鍛冶関係の遺構が検出されている。２基の鍛冶炉に加えて焼土坑、炭焼土坑、鍛造剥片、掘立柱建物２棟が確認されており、鍛冶に関わる工房跡であったと考えられている。

中近世の遺構としては火葬土坑と土坑墓がある。火葬土坑は概ね長さ１ｍ前後、幅70cm程度の長方形で底面に１～６個の石を据えている。Ⅰ区の北端では２基が検出され、Ⅱ区では13基が分散して発見されている。木製の数珠玉、青磁碗、青磁皿、土師器坏、土師皿、朝鮮系陶磁器、鉄釘が出土しており、時期は15世紀後半～16世紀前半と考えられている。一方の土坑墓は両区にあるが、Ⅰ区で検出されたものは近世墓と推測されるものの出土遺物が無く正確な時期決定ができない状態である。Ⅱ区では12基の土坑墓が検出され、土師器坏、土師皿、陶器皿、染付碗と蓋、銅銭などが出土しており、15世紀後半～18世紀初頭まで営まれたものと考えられる。

以上、第１次調査地点は弥生時代は甕棺墓、奈良時代には鍛冶工房、中世～近現代には墓地として利用されていたことが判明している。

（2）第２次調査の概要（第11・12図）

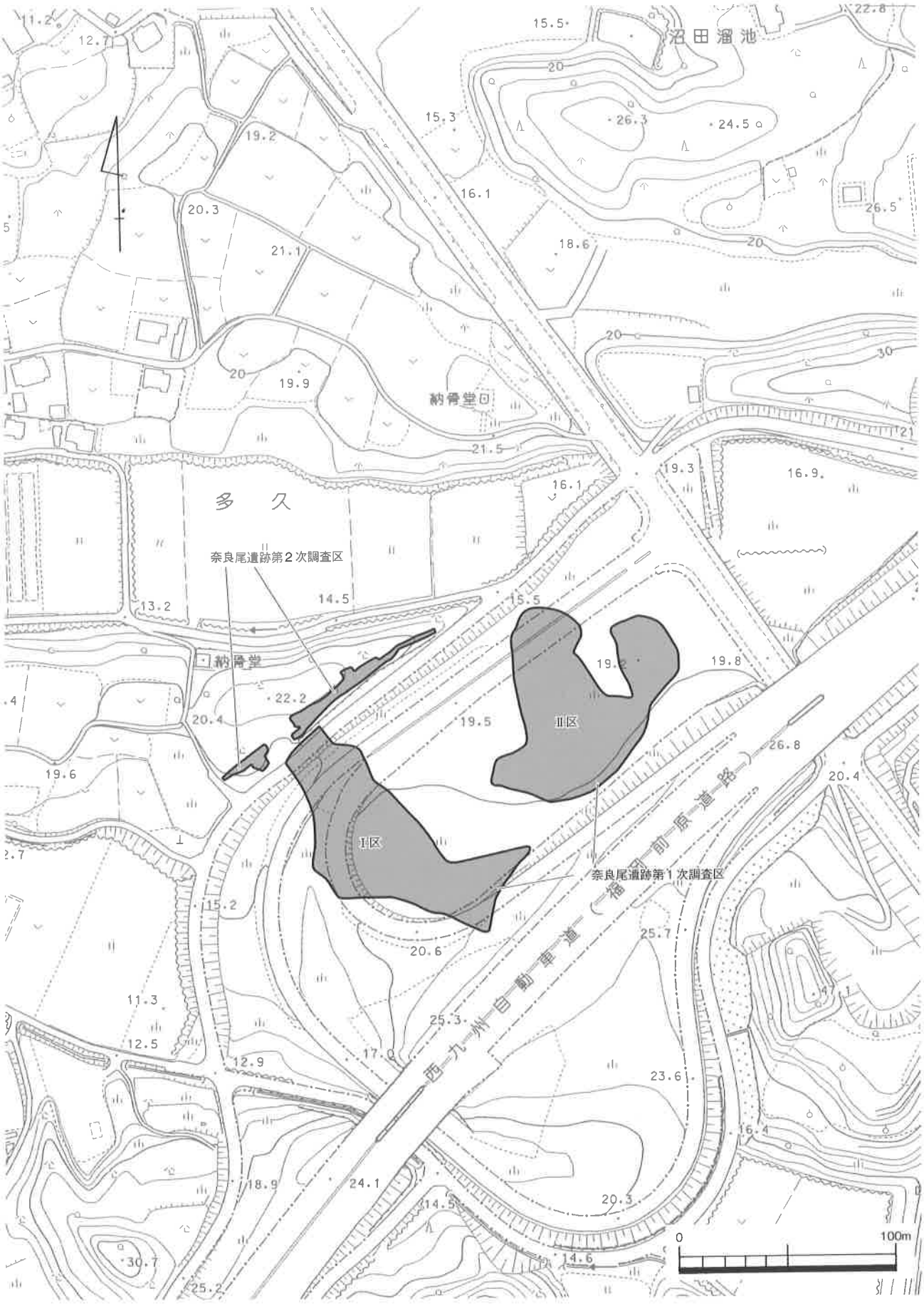
本報告の第２次調査区は上述のとおり第１次調査Ⅰ区の隣接地であり、類似する遺構が検出されている。調査区の中央部付近では単棺の甕棺墓１基が検出され、西側では火葬土坑１基、調査区の中央部から西側にかけては土坑墓30基が確認された。

このうち、火葬土坑と土坑墓では後者の１基を除き、遺物が全く出土しておらず、時期を決定することは困難である。ただ、両遺構は第１次調査で類似の遺構が発見されているため、一連の墓群として捉えることが可能であると考えられ、営まれた時期も近いことが推測できる。

（3）遺構および出土遺物

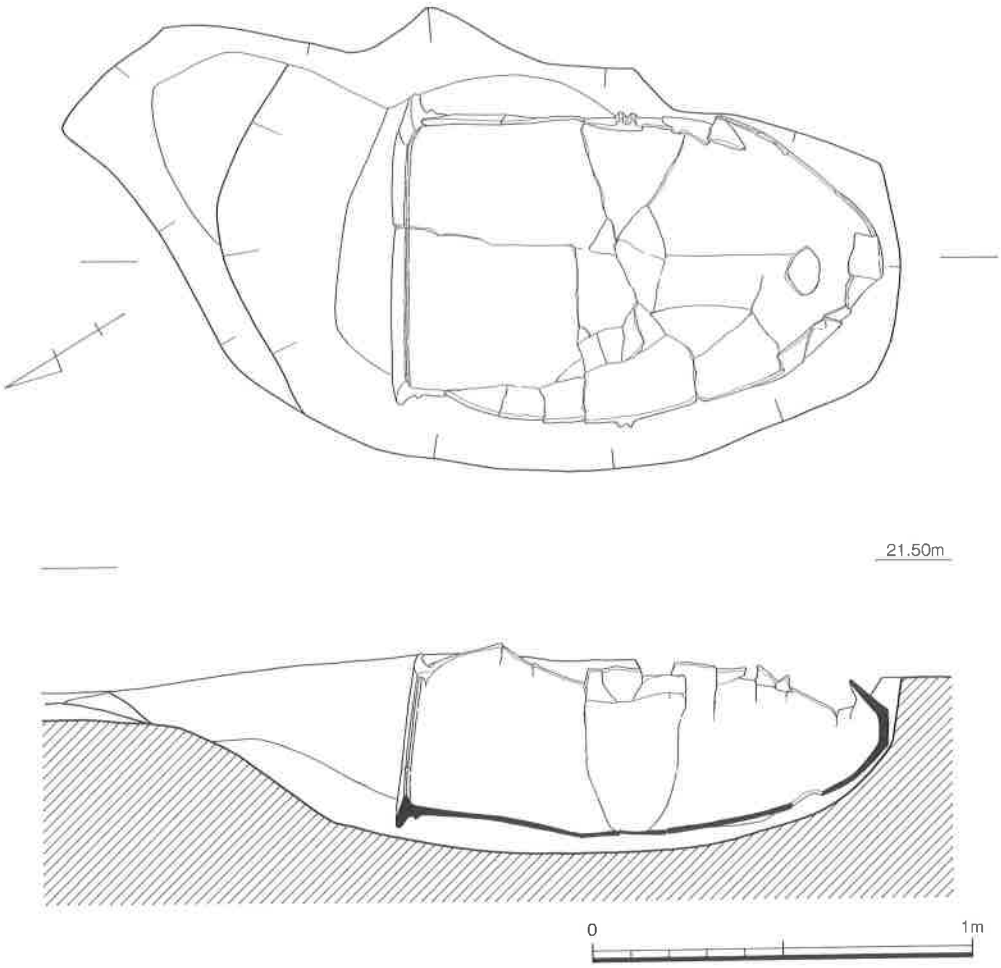
①甕棺墓（第13・14図）

甕棺墓は丘陵尾根上の東寄りの部分、標高約21m付近で検出された。甕棺墓周囲の地山には重機のものと考えられるキャタピラーの跡が縦横に残っており、この周辺が機械により削平を受



第11図　奈良尾遺跡の位置と周辺の地形図（1/2500）

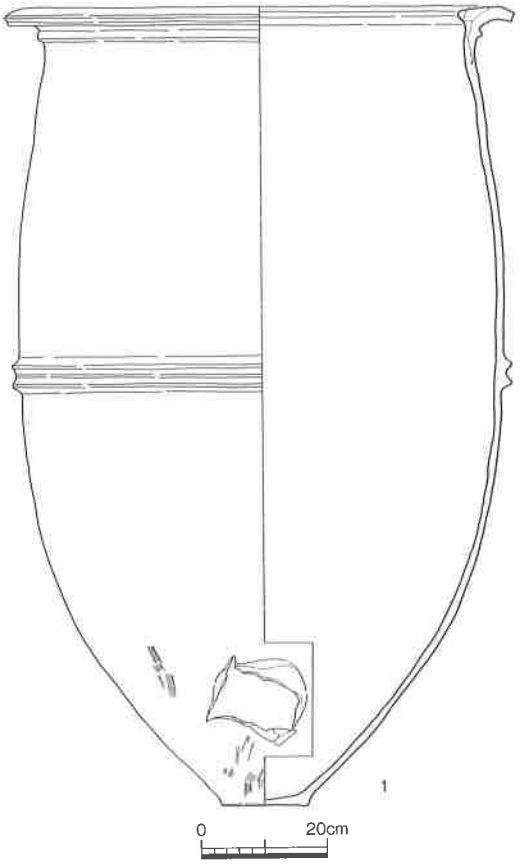
第12図　奈良尾遺跡第２次調査区　遺構全体実測図（1/400）



第13図　奈良尾遺跡第２次調査区　甕棺墓実測図（1/20）

けたことが伺え、甕棺本体も上面の約半分が失われていた。単棺であり、棺内外からの副葬品等の出土はなかった。

甕棺は口縁部復元径80cm、高さ125.6cmで大型である。口縁部は発達しておりやや外傾する。口縁部の下には断面三角形の突帯を１条巡らせ、胴部中位にM字状突帯を巡らせる。胴部は若干の膨らみをもち、突帯付近が最大径となる。器面調整はナデ仕上げであるが、胴下部から底部付近にかけての外面にハケ目が残る。また、胴下部に内面からの穿孔が行われている。



第14図　奈良尾遺跡第２次調査区
出土甕棺実測図（1/12）

②火葬土坑（第15図）

火葬土坑は調査区西側で検出された。付近は丘陵の南側斜面部の標高約20mの位置にあたる。平面形態は隅円長方形で底面は平坦である。平面規模は70×90cmで、削平を受けているようで深さは15～30cm程度しか残っていなかった。検出時、土坑内には炭化物を多く含んだ灰色粘質土が詰まっており、北西角の壁面周辺は赤く焼けた状態が確認できた。底面には棺台と考えられる４個の石を配置している。土坑内からの出土遺物はない。

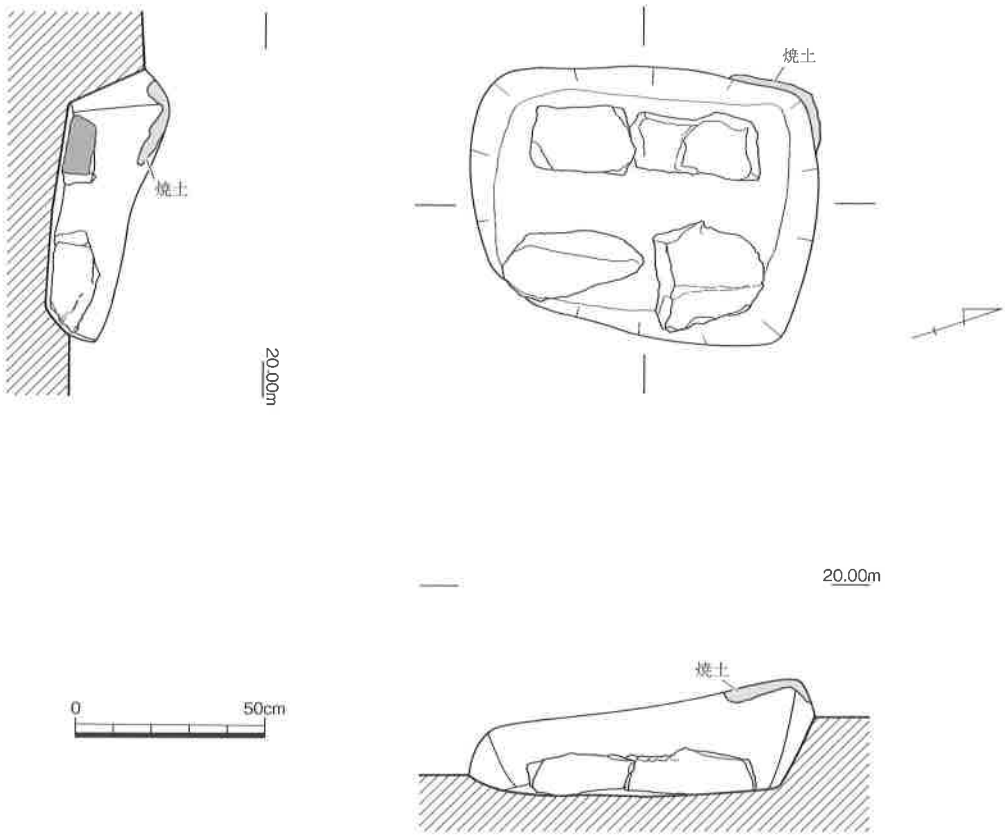
③土坑墓（第16～20図）

土坑墓は調査区の東側斜面部と西側の一部を除いた大部分で検出されている。分布の中心は尾根筋にあたる調査区中央部で、今回の調査対象地区外となる北側へ墓域が広がっている可能性が高い。以下、個別の土坑墓についてみていく。

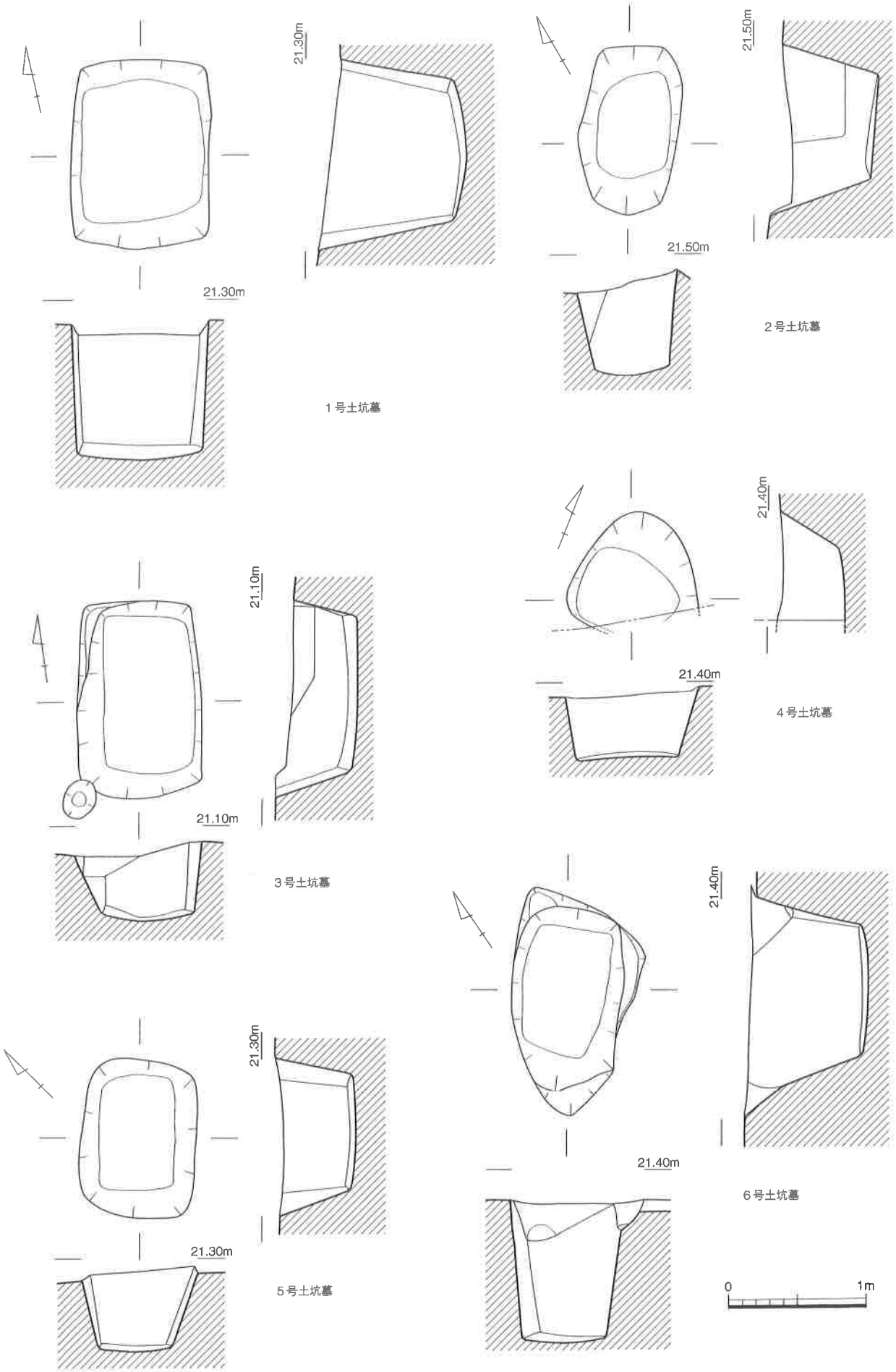
１号土坑墓は平面形態が長方形で、壁面は垂直に近い角度で掘り下げられており、底面は平坦に近い。規模は長さ1.36m、幅1.00m、深さ0.99mである。

２号土坑墓は平面形態が楕円形に近い隅円長方形で底面は平坦に近いがやや北側に向かって傾斜する。規模は長さ1.22m、幅0.72ｍ、深さ0.68mである。

３号土坑墓は平面形態が長方形で、北西隅に段がある。壁面はやや斜めに掘り込まれ、床面は平坦だが、西側で少し浅くなる。規模は長さ1.43m、幅0.91m、深さ0.52mである。



第15図　奈良尾遺跡第２次調査区　火葬土坑実測図（1/20）



第16図　奈良尾遺跡第２次調査区　土坑墓実測図１（1/40）

４号土坑墓は調査区外へ掛かっているため全体が検出できていないが、平面形態は楕円形であると考えられる。壁面は斜めに掘り込まれ、床面は平坦に近い。規模は幅0.95m、深さ0.47mである。

５号土坑墓は平面形態が隅円長方形で、壁面はやや斜めに掘り込まれ、床面は平坦である。規模は長さ1.13m、幅0.83m、深さ0.60mである。

６号土坑墓は平面形態が不整隅円長方形で、北側隅から東側側面にかけて段がある。壁面は南側がやや斜めに掘り込まれるが、他の３面は急角度となっている。床面は平坦である。規模は長さ1.58m、幅0.92m、深さ1.02mである。

７号土坑墓は南側隅が調査区外へ掛かっているため全体は検出できなかったが、平面形態は長方形と考えられる。壁面はやや斜めに掘り込まれ、床面は平坦に近く、北側隅部付近に直径が９㎝以下の２つのピットがある。規模は長さ1.31m、幅0.89m、深さ0.53mである。

８号土坑墓は南西側が他の遺構と切り合うため形態が崩れているが、平面は隅円長方形となる。南北の壁面はやや斜めに掘り込まれ、東西の壁面は急である。床面は平坦となる。規模は長さ1.38m、幅0.77m、深さ0.76mである。

９号土坑墓は平面形態が長方形である。壁面は北西側が垂直に近く、他の面はやや斜めになっている。床面は平坦となる。規模は長さ1.03m、幅0.69m、深さ0.61mである。

10号土坑墓は南東側の多くが調査区外へ掛かっているため全体がわからないが、平面形態は隅円長方形となると推測される。壁面は急で、床面は平坦となる。規模は長さ、深さともに0.88mである。

11号土坑墓は平面形態が長方形で、壁面はほぼ垂直に掘り込まれ、床面は平坦である。規模は長さ1.13m、幅0.68m、深さ0.70mである。

12号と13号土坑墓は切り合っており、12号が古く、13号が新しい。12号は平面形態が不整長方形となっており、東側に段がある。壁面はやや斜めだが、東側のみ急である。床面は平坦となる。規模は長さ1.33m、幅0.89m、深さ0.76mである。13号は狭長な隅円長方形で、北側に段を持つ。壁面は斜めとなり、床面には丸みがある。規模は長さ1.16m、幅0.43m、深さ0.53mである。

14号土坑墓は平面形態が隅円長方形で、北側以外の３面については壁面の上位で傾斜が変換し、下位の底面近くには段が入る。壁面は南側がやや斜めだが、他は急である。床面は平坦となる。規模は長さ1.15m、幅0.78m、深さ0.73mである。

15号土坑墓は平面形態が不整長方形で、壁面は南北側がやや斜めに掘り込まれ、東西側は急となる。床面は平坦である。規模は長さ1.03m、幅0.63m、深さ0.71mである。出土遺物はない。

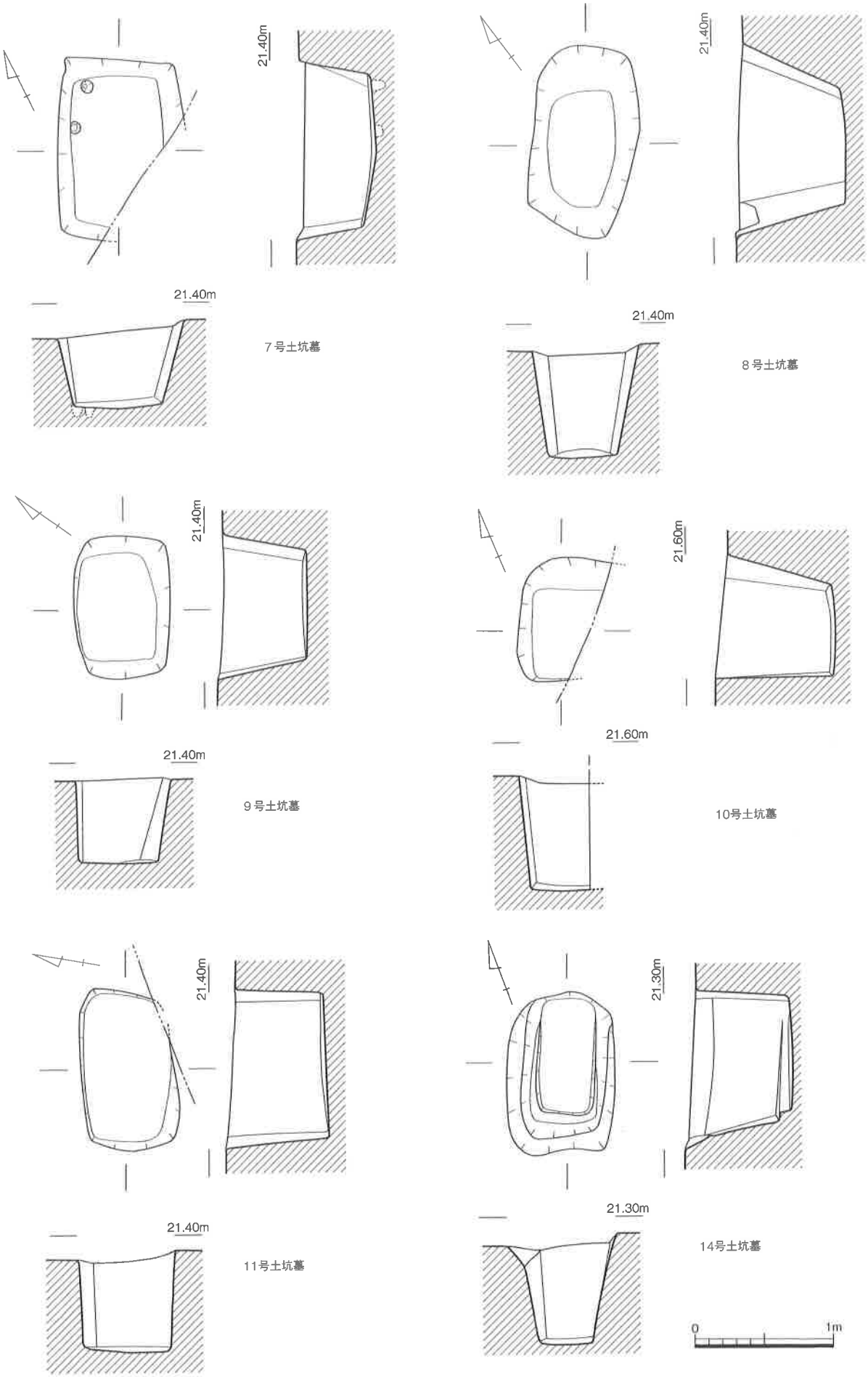
16号土坑墓は平面形態が楕円形で、壁面はやや斜めに掘り込まれ、床面は平坦に近い。規模は長さ0.89m、幅0.46m、深さ0.38mで小型である。

17号土坑墓は平面形態が不整隅円長方形で、北側に段を持つ。壁面はやや斜めで、床面には丸みがある。規模は長さ1.73m、幅0.57m、深さ0.61mである。

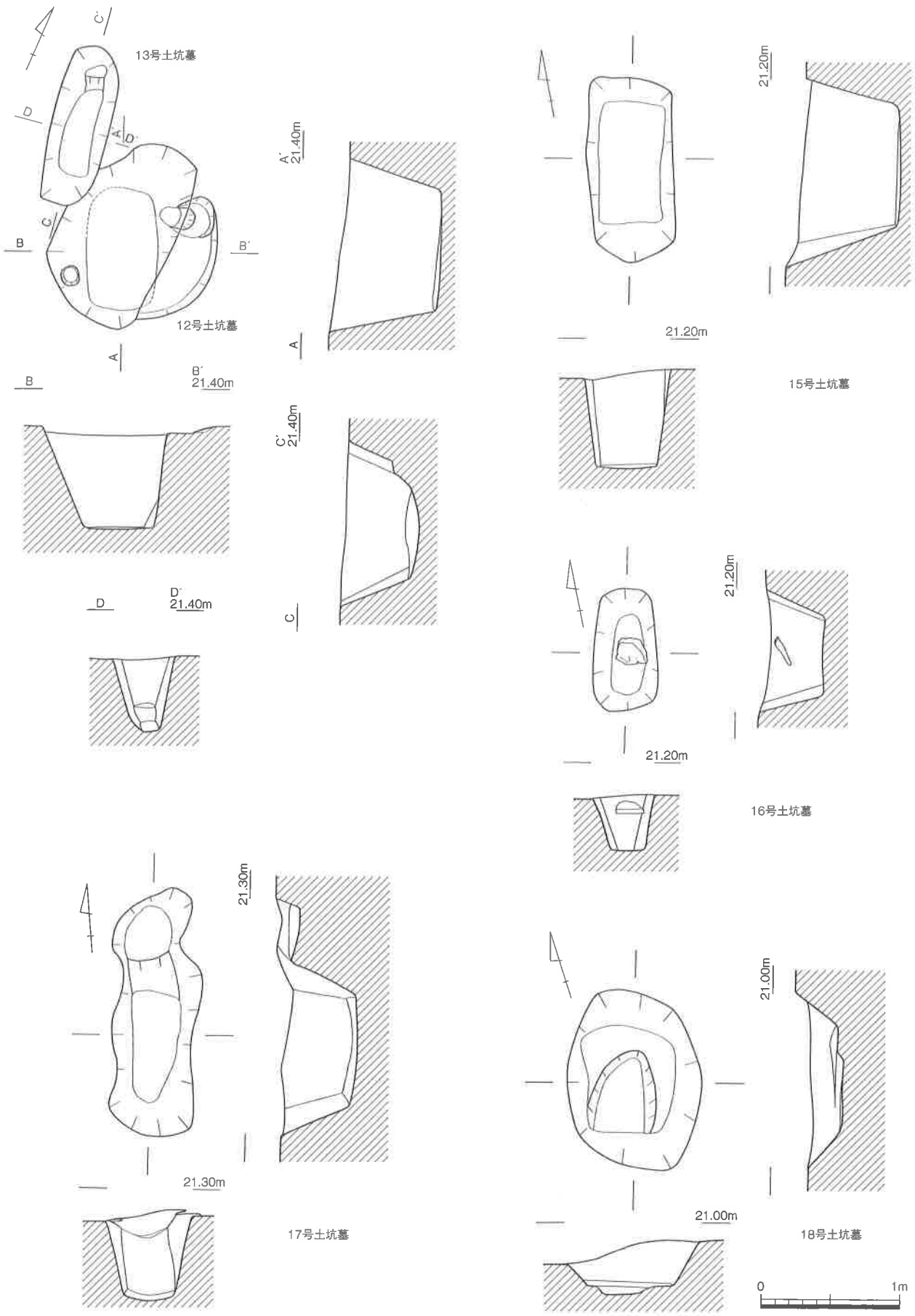
18号土坑墓は平面形態が不整楕円形で、底面が２段となる。壁面の傾斜が緩やかである。規模は長さ1.25m、幅0.98m、深さ0.36mである。

19号土坑墓は平面形態が不整長楕円形で、南北側の２か所に段を持つ。壁面はやや急で、床面には丸味がある。規模は長さ1.35m、幅0.51m、深さ0.50mである。

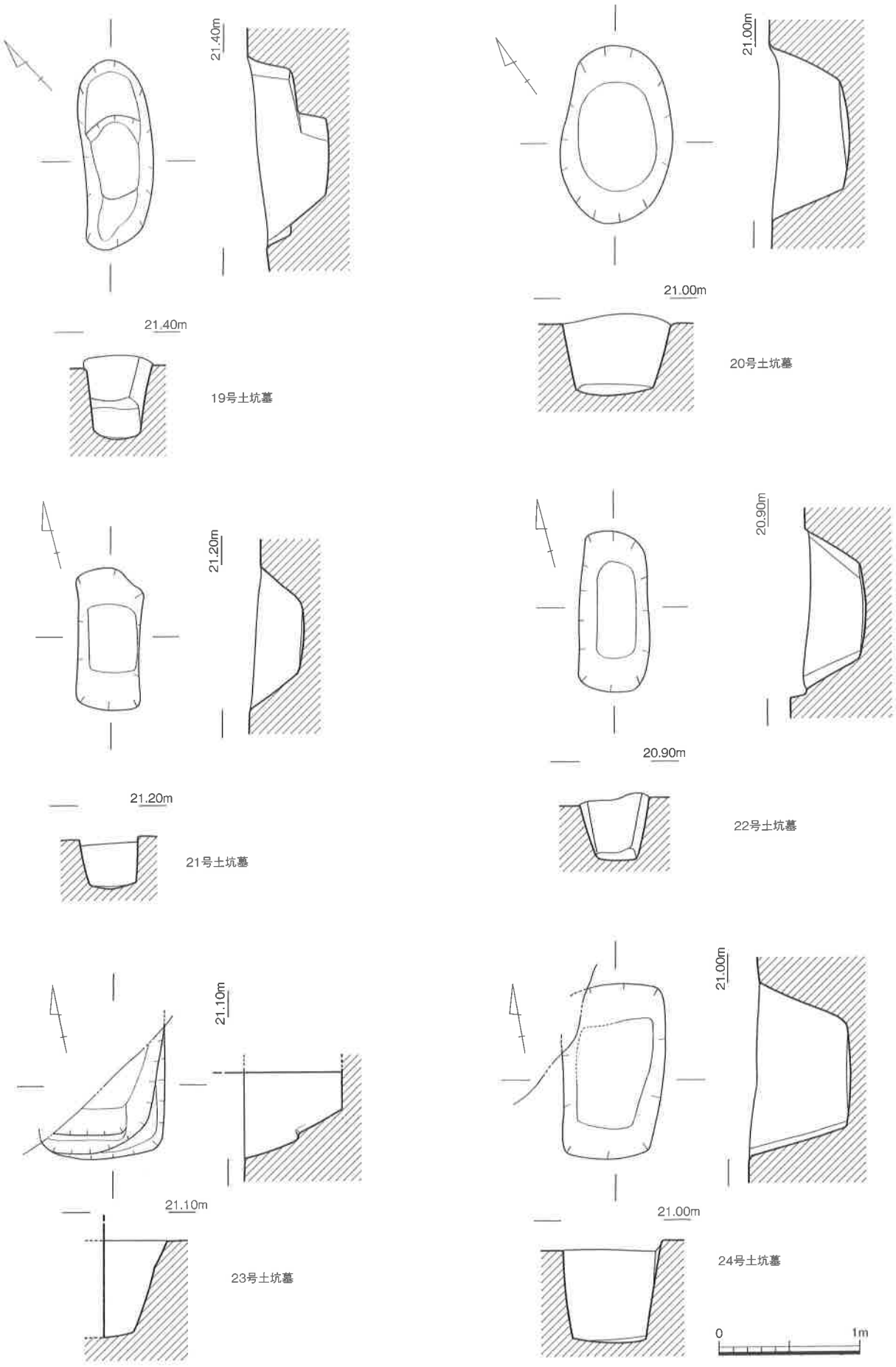
20号土坑墓は平面形態が楕円形で、壁面はやや斜めとなり、床面は丸みを持つ。規模は長さ1.28m、幅0.79m、深さ0.53mである。



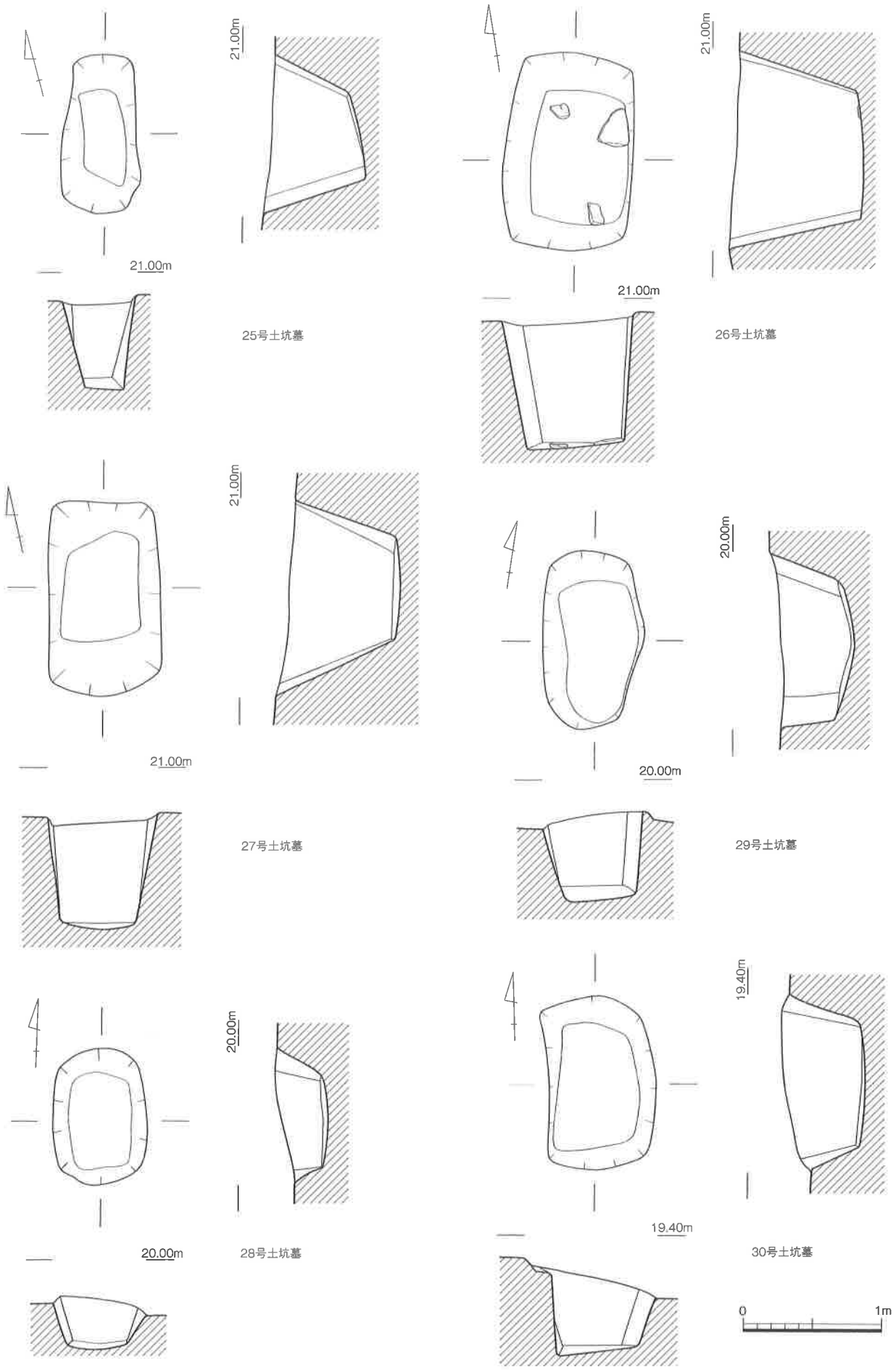
第17図　奈良尾遺跡第２次調査区　土坑墓実測図２（1/40）



第18図　奈良尾遺跡第２次調査区　土坑墓実測図３（1/40）



第19図　奈良尾遺跡第２次調査区　土坑墓実測図４（1/40）



第20図　奈良尾遺跡第２次調査区　土坑墓実測図５（1/40）

21号土坑墓は平面形態が不整長方形で、南北側の傾斜はやや緩やかだが、東西側は急である。床面は丸みを持つ。規模は長さ1.02m、幅0.45m、深さ0.35mで小型といえる。

22号土坑墓は平面形態が隅円長方形で、南北側の傾斜はやや緩やかだが、東西側は急である。床面は平坦に近い。規模は長さ1.15m、幅0.48m、深さ0.41mで小型といえる。

23号土坑墓は大部分が調査区外となっているため正確な形態はわからないが、長方形になると推定される。壁面の上位で傾斜が変換し、南側の中位には幅の狭い段が入る。壁面は南側がやや斜めだが、東側はやや急である。床面は平坦となる。規模は長さと幅は不明で、深さは0.70mである。

24号土坑墓は平面形態が長方形で、南北の２面がやや緩やかに傾斜し、東西は急となる。床面は平坦である。規模は長さ1.23m、幅0.72m、深さ0.67mである。

25号土坑墓は平面形態が不整隅円長方形で、壁面はやや斜めとなり、床面は南側が下がる。規模は長さ1.15m、幅0.53m、深さ0.71mで小型といえる。

26号土坑墓は平面形態が長方形で、壁面の傾斜は急である。床面は平坦で、３個の石が置かれている。規模は長さ1.44m、幅0.93m、深さ0.91mである。

27号土坑墓は平面形態が長方形で、南北の２面はやや斜めで、東西の２面は急である。床面は平坦となる。規模は長さ1.40m、幅0.81m、深さ0.82mである。

28号土坑墓は平面形態が隅円長方形で、壁面は斜めとなり、床面はやや丸みを持つ。規模は長さ0.98m、幅0.67m、深さ0.36mで小型といえる。

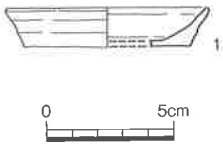
29号土坑墓は南東部が溝と切り合っているため形が崩れているが、平面形態が隅円長方形となる。北側の１面については傾斜が緩やかで、他の３面は急である。床面は中央部が窪む。規模は長さ1.28m、幅0.74m、深さ0.55mである。

30号土坑墓は攪乱のため平面形態が一部崩れるが隅円長方形である。西側の壁面は急で、他の３面は斜めに掘り下げられている。床面は平坦となる。規模は長さ1.25m、幅0.78m、深さ0.60mである。

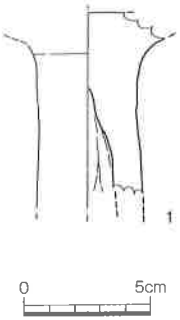
④土坑墓およびその他出土遺物（第21・22図）

土坑墓からの出土遺物としては24号土坑墓から出土した土師皿片がある（第21図１）。残存率は１／３程度で復元径は7.8cm、高さは1.5cmである。体部は直線状に口縁部に向かって開き、底部は糸切となる。この他、18号土坑墓では人骨と考えられる小片が出土しており、これら土坑が墓である証左といえる。

土坑墓以外からの出土遺物としては弥生土器の高坏片がある（第22図１）。試掘調査時に出土したものであり、直接遺構には関連していないが、当該調査区で出土した甕棺墓以外にも弥生時代の遺構があった可能性を示す資料といえる。



第21図　奈良尾遺跡第２次調査区
24号土坑墓出土土器実測図
(1/3)



第22図　奈良尾遺跡第２次調査区
試掘調査出土土器実測図（1/3）

３．多久口木３号墳の調査

（１）第１次調査の概要

多久口木古墳群の第１次調査は福岡県土地開発公社からの委託事業として今宿バイパス（西九州自動車道と側道部分）の建設工事に先立ち旧前原町教育委員会によって昭和62年度に行われている。古墳群のあった場所は道路が丘陵を東西に断ち切ったため、景観は大きく変わっているが、かつて標高約42mの丘陵であり、南東から北西方向へ尾根が伸びていた。

第１次調査の時点ではこの尾根上に合計３基の古墳を確認している。南側丘陵頂上付近の円墳を２号墳、そこから北西へ一段下った位置の円墳を１号墳、さらに北西へ行った所の前方後円墳を３号墳としている。調査前、１号墳は一見して古墳とわかるほど良好な状態であったが、２号墳は破壊が著しく、墳丘の高まりがわずかに確認可能な状態であった。残る３号墳は比較的良好な状態で、前方部が確認でき、規模がわかる状態であったようである。第１次調査では上記古墳のうち、工事区域内に入った１・２号墳が本調査の対象となり、区域外であった３号墳については調査は行われず現状保存された。当時の調査結果は以下のとおりである。

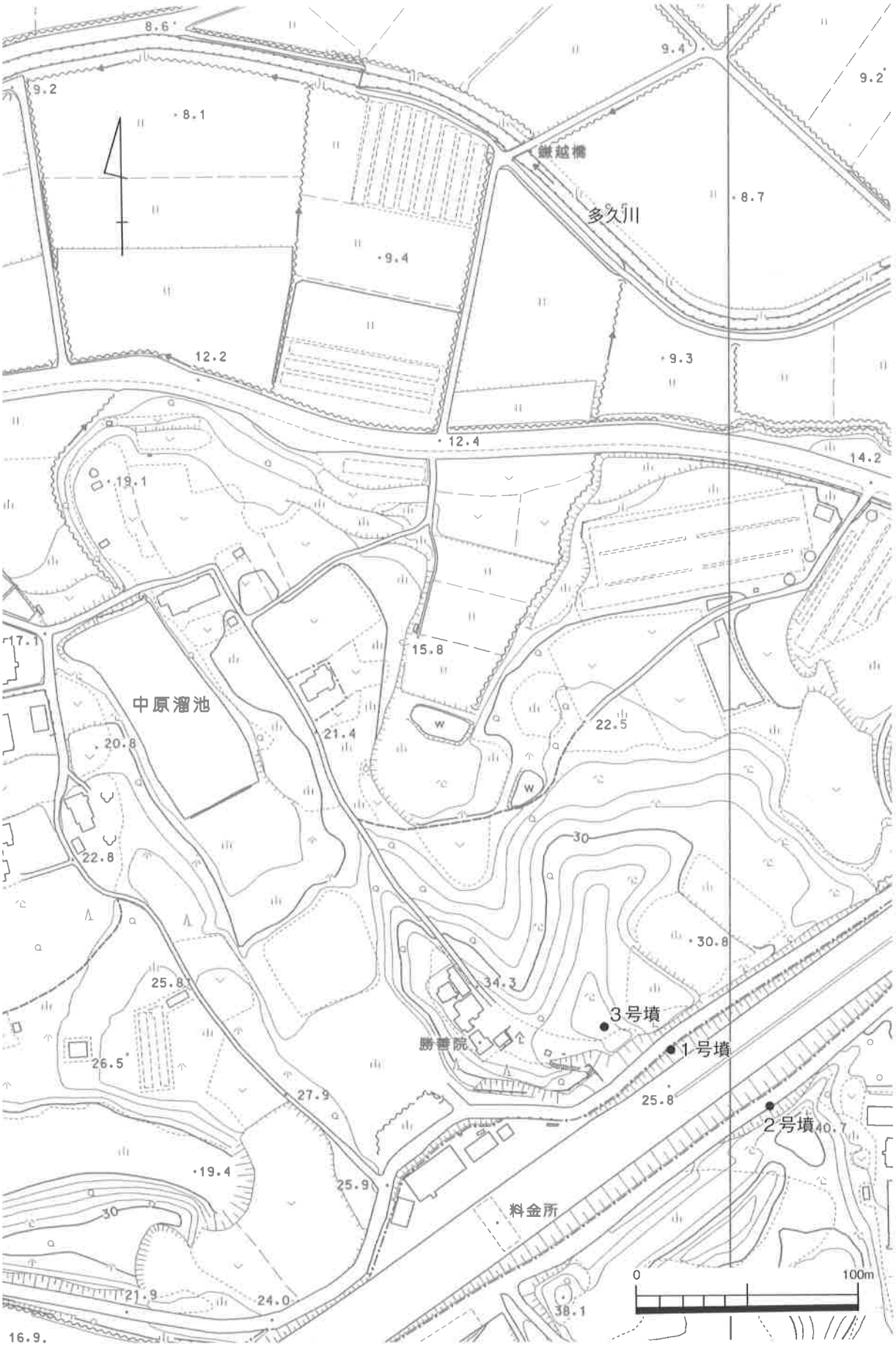
１号墳は直径15ｍ、高さ1.5mの円墳である。主体部は横穴式石室で、南西方向に開口する。玄室は平面形態が長方形で、広さは2.6×2.3m、床面には拳大の敷石がある。側壁については破壊を受けており、奥壁が３段、右側壁が２段、左側壁は３段が残った状態であった。左側壁から奥壁にかけての床面には腰石を据えるための溝状の掘り込みがあり、所々に根固め石が配置されていた。玄室内は盗掘されていたため遺物は少なく、耳環、玉類などが出土したのみである。羨道部については広さが4.2×1.5mで、側壁は２～３段が残っており、開口部は閉塞されていた。羨道の左側壁には広さ0.9×0.6mの前室状の施設が設けられており、須恵器、土師器、武器類、馬具類、装身具類等が出土している。また、墳丘の表土からは須恵器の蓋坏と大甕等が出土している。古墳の時期については６世紀後半築造で、６世紀末まで追葬が行われたと報告されている。

２号墳は直径約10m、高さ0.8mの円墳で、発掘前に中央部が直径約４ｍにわたって陥没した状態であった。主体部は南西方向に開口する横穴式石室と考えられるが、破壊を受け、玄室の敷石の一部が残存するのみとなっていた。古墳に関連する遺物は須恵器、武器類、馬具類、装身具類等があり、須恵器は墳丘や地山、攪乱坑内、その他は攪乱土中や攪乱坑内から出土している。６世紀前半築造で、６世紀中頃～末にかけて追葬が行われたと報告されている。

さらに周辺からは、上記２基の古墳に直接関係しない遺物として弥生土器や石器、黒色土器が出土している。弥生土器はいずれも破片で表面は風化している。

（２）第２次調査の概要

第２次調査の対象となった３号墳は尾根が南西と北とに枝分かれし、広がっている場所にある（第24図）。３号墳周辺の標高は約39mで、標高約42ｍの場所にある２号墳と比べると約３ｍ低い位置にあり、標高約39mの１号墳とほぼ同じ高さである。３基の古墳の配置は墳丘中央間の直線距離を測ると１・２号墳間が約47m、１・３号墳間が約40mで等間隔を意識した配置のようである。ただ、３基とも横穴式石室を主体部とするものの、１・２号墳が南西方向に開口するのに対し、３号墳は西南西に入口が向いており、相違点もある。



第23図　多久口木古墳群の位置と周辺の地形図（1/2500）

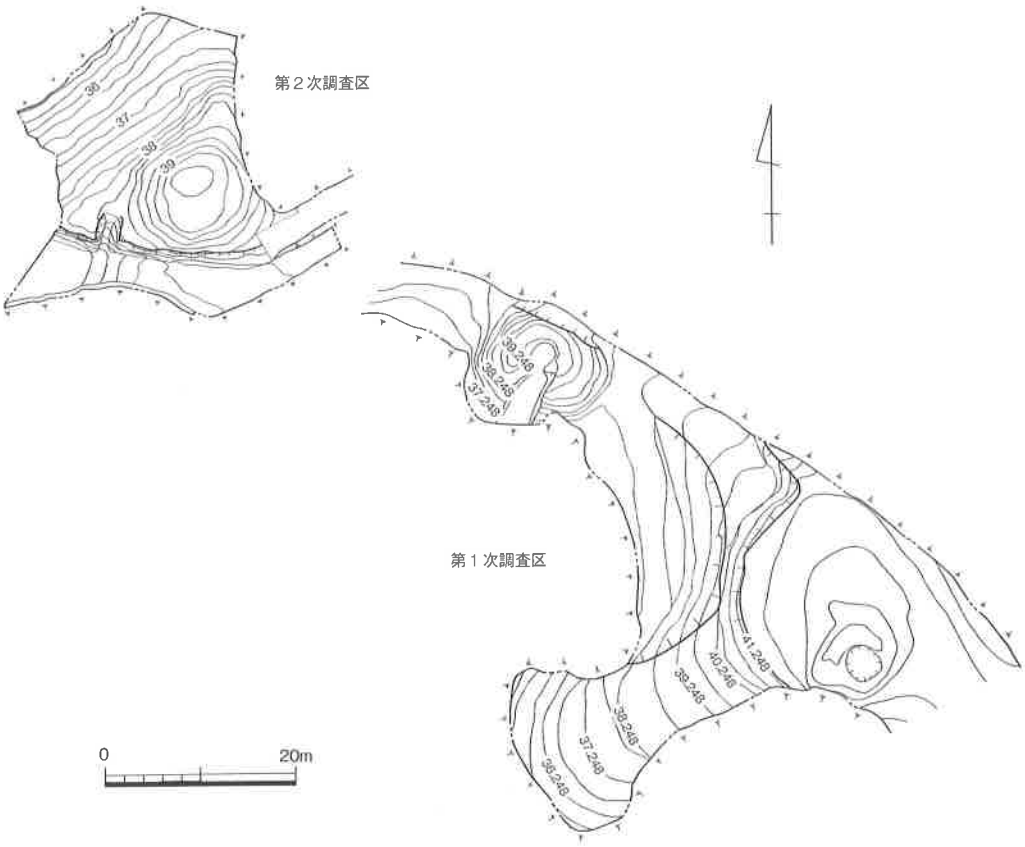
３号墳の調査にあたり、道路工事によって失われる後円部については最終段階で墳丘盛土を除去し、地山整形面まで確認したが、前方部については工事後も保存が図られることから墳丘の確認にとどめ、盛土等の除去は行っていない。

（３）遺構

①墳丘（第25・26図）

３号墳は主軸がN-11°-Eで、ほぼ北に向いた前方後円墳である。古墳の前方部は北に枝分かれした尾根を取り込んで形作っているものと考えられる。調査前、後円部の北東側墳丘裾部から前方部の東側約半分にかけてが造成により削平されており、後円部の南側の裾部についても里道により掘削された状態であった（第25図）。

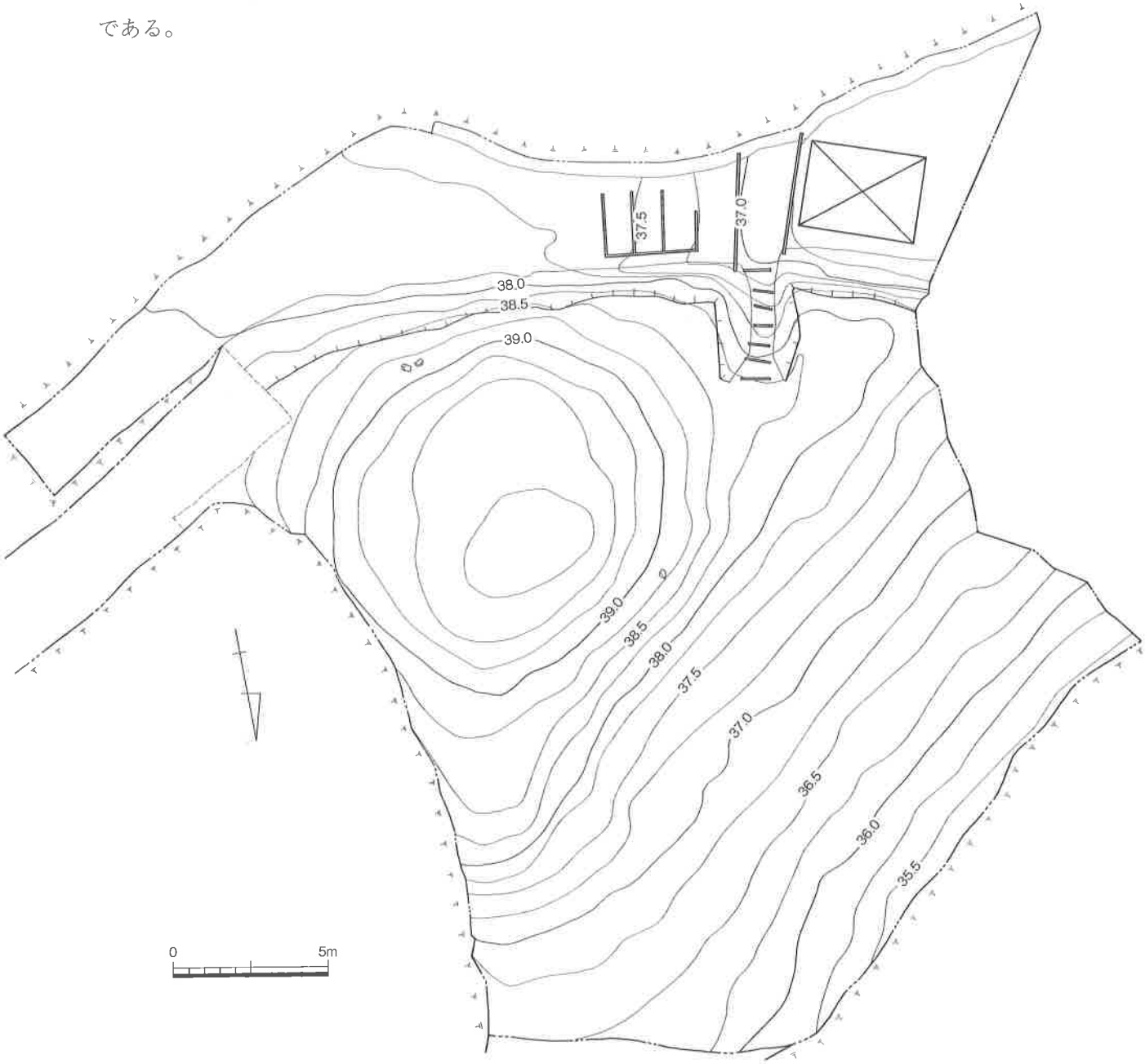
墳丘は前方部、後円部ともに段築は確認できず、表面に葺石、埴輪列等もなかった。古墳の中で比較的墳丘の姿を止めている西側部分をみると標高38.0m付近が後円部の墳裾にあたると考えられ、くびれ部から前方部の端部にかけては標高38.0mから36.5m付近が裾となると推定できる。この裾部に沿って後円部南西側（１号溝）と前方部北西側（２号溝）に幅約１mの溝が掘られている。この溝は削平を受けたためか残りが悪く、途中で徐々に浅くなり途切れている。これらから墳丘の規模を復元すると全長は約23m、後円部径約16m、前方部長さ約９m、前方部幅約12mであり、高さは現況で後円部1.8m、前方部1.7mが遺存していた。



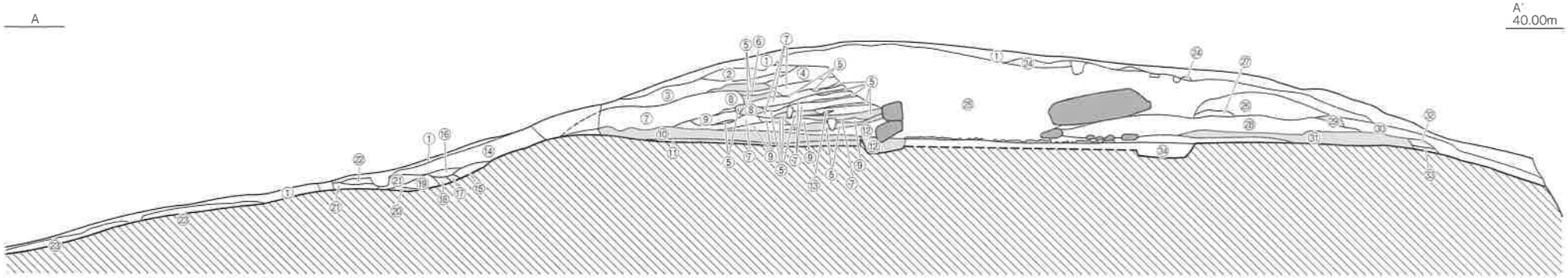
第24図　多久口木古墳群の調査区配置図（1/800）

②地山整形と墳丘盛土層（第27～29図）

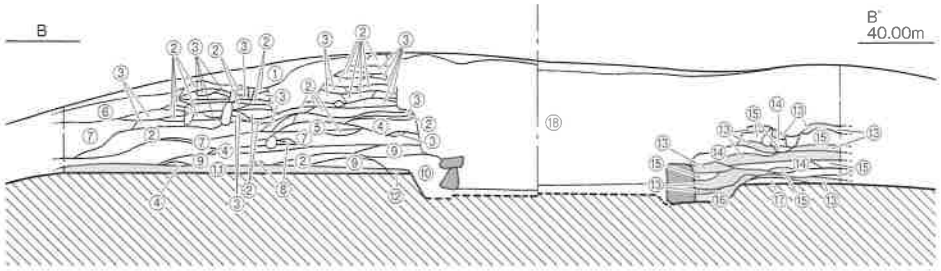
墳丘主軸とこれに直交する方向に畦を設定し、後円部ではこの畦を残して盛土部分を掘り下げ、前方部では畦に沿ってトレンチを掘削し、いずれにおいても土層を確認した。ただ、後円部南側においては大きな根株数本に阻まれ、畦とトレンチを途中までしか設定できなかった。後円部では標高38.6m付近まで地山を削り出して墳丘を成型しており、ここから上は盛土となる。盛土の質は南から北西にかけてと北西から西にかけてで違いがみられ、前者では主に黒褐色粘質土と赤茶褐色粘質土が互層状となっているが、後者では黒褐色粘質土の層は少なく、主に黄茶褐色粘質土や赤茶褐色粘質土で層を成している。この後者の粘質土には花崗岩が粒状に混入している部分があり非常に硬く堅固になっている。また、西および北側では地山上に旧地表と考えられる黒褐色粘質土層がある。盛土の構築は石室の石積みと概ね対応しており、１段目の盛土は腰石または腰石～２段目の石組まで、２段目の盛土は石組の２段目または３～４段目まで、３段目はこれ以上の石組に対応するが、これ以上の部分は攪乱により残りが悪く対応状況が把握し難い状況である。



第25図　多久口木３号墳　調査前現況測量図（1/200）



多久口木３号墳後円部東西土層断面図



多久口木３号墳後円部南北土層断面図

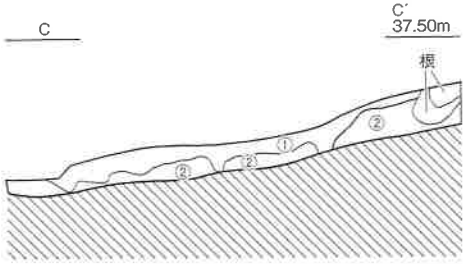
（多久口木３号墳後円部東西土層断面図）

①表土
②赤茶褐色粘質土
③赤茶褐色粘質土に褐色粘質土が少量混じる
④赤茶褐色粘質土
⑤黒褐色粘質土
⑥黒褐色粘質土に茶褐色粘質土が少量混じる
⑦赤茶褐色粘質土に黒色粘質土が少量混じる
⑧暗灰褐色粘質土
⑨暗灰褐色粘質土に茶褐色粘質土がブロック状に混じる
⑩黒褐色粘質土（旧表土）
⑪暗色粘質土（旧表土）
⑫暗色粘質土に暗灰褐色粘質土が混じる
⑬暗灰褐色粘質土（樹木の根の攪乱が多い）
⑭青灰色粘質土
⑮暗赤茶褐色粘質土
⑯暗灰褐色粘質土
⑰⑯と同質だがやや明
⑱暗灰褐色粘質土に暗赤茶褐色粘質土が混じる
⑲⑮と同質だがやや明
⑳暗赤茶褐色粘質土に暗灰褐色粘質土が混じる
㉑⑯と同質だがやや暗
㉒暗褐色粘質土
㉓黄茶褐色粘質土
㉔黄茶褐色粘質土（攪乱坑埋土）
㉕㉔と同質だがやや暗（攪乱坑埋土）
㉖暗灰褐色粘質土
㉗茶褐色粘質土
㉘暗灰色粘質土に茶褐色粘質土と黒色粘質土がブロック状に混入し、まだらとなる
㉙黒褐色粘質土
㉚茶褐色粘質土に暗灰色粘質土が混じる
㉛黒褐色粘質土（旧表土）
㉜暗灰褐色粘質土（㉛が流れたもの）
㉝暗褐色粘質土
㉞花崗岩バイラン土に礫が混じる（羨道部床面）

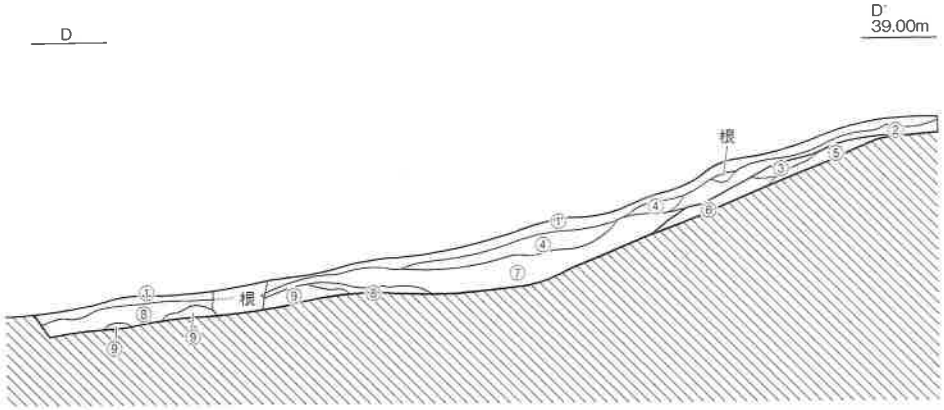
（多久口木３号墳後円部南北土層断面図）

①表土
②赤茶褐色粘質土
③赤茶褐色粘質土に花崗岩の粒子混入
④赤茶褐色粘質土に黒褐色粘質土のブロックが混入
⑤④と同質だが黒色粘質土のブロックの量が多い
⑥暗褐色粘質土（墳丘崩落土）
⑦赤茶褐色粘質土に花崗岩の小礫が少量混じる
⑧黒褐色粘質土
⑨黒褐色粘質土に赤茶褐色粘質土がブロック状に混じる
⑩⑨と同質だが赤茶褐色粘質土のブロックの量が多い
⑪黒褐色粘質土（旧表土）
⑫⑪と同質だがやや明
⑬黒褐色粘質土
⑭暗灰褐色粘質土
⑮赤茶褐色粘質土
⑯黒褐色粘質土に花崗岩の小礫が混じる
⑰茶褐色粘質土
⑱黄茶褐色粘質土（攪乱坑埋土）

第28図　多久口木３号墳　墳丘土層断面実測図１（1/80）



多久口木３号墳前方部北西側端部土層断面図



多久口木３号墳前方部西側土層断面図

（多久口木３号墳前方部北西側端部土層断面図）

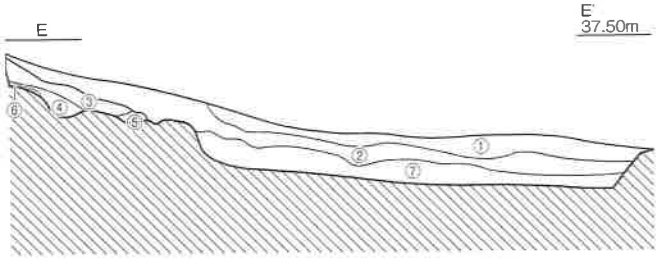
①表土
②黄褐色粘質土

（多久口木３号墳前方部北側端部土層断面図）

①腐葉土
②表土
③暗黄褐色粘質土
④暗黄茶褐色粘質土
⑤黄茶褐色粘質土
⑥黄茶褐色粘質土
⑦暗黄褐色粘質土

（多久口木３号墳前方部西側土層断面図）

①表土
②黄褐色粘質土
③黄褐色粘質土に赤茶褐色粘質土が混じる
④黄褐色粘質土に暗灰色粘質土が混じる
⑤赤茶褐色粘質土
⑥赤茶褐色粘質土に暗灰色粘質土が混じる
⑦暗灰色粘質土
⑧暗黄褐色粘質土
⑨赤茶褐色粘質土（地山）



多久口木３号墳前方部北側端部土層断面図

第29図　多久口木３号墳　墳丘土層断面実測図２（1/80）

１～４段が残る。１段目は他の壁と同様、根入れの深さ調整を行うが、最も左側の石のみは小型の石材を使っている関係上、石を２個重箱積みにして上端の高さを合わせている。２段目は中型の石１～２個を組み合わせ、３段目はやや小ぶりな中型の石２個が残る。４段目は２個の石が残るが、動いている可能性が高い。壁面の石材は花崗岩を使用している。腰石の根入れ部分については、石室構築前に地山をロの字状に掘削した溝を設けており、この中で高さを調整しながら石材を据えている（第27図）。

床面には敷石が施されており、断面の状況から３面程あると推測できたが、攪乱によって移動している石もあるため、中間の１面が認定できなかった。よって、ここでは確認できた上下２面のみ報告する。なお、上面から順に第１面、第２面としている（第31図）。第１面は標高38.62ｍ付近にあり、大型または中型の割石や転石を用いており、石材は花崗岩を使う。床面の中央部は攪乱で失われており、周辺で確認できた。第２面は標高38.50ｍ付近にあり、奥壁側と玄門部側で剥がれている。中型の転石または小型の川原石が使われており、花崗岩や片岩系の石材を用いている。奥壁側には細長い石が数個列をつくるように並んでおり、屍床を意識している可能性がある。

床面からは装身具類や鉄器類が出土した。装身具類は耳環２点、土製丸玉23点が同一地点から纏まって出土しており、ここに被葬者の頭部があったと推測できる。鉄器は上述の屍床に沿った場所に大刀が１点あり、この他、刀、刀子、鏃等が側壁近くで出土している。その他の遺物としては石室内の埋土や攪乱坑からもガラス小玉や土製丸玉、鉄器類が出土している。なお、須恵器は石室内にはなく、いずれも墳丘上や表土から出土した。

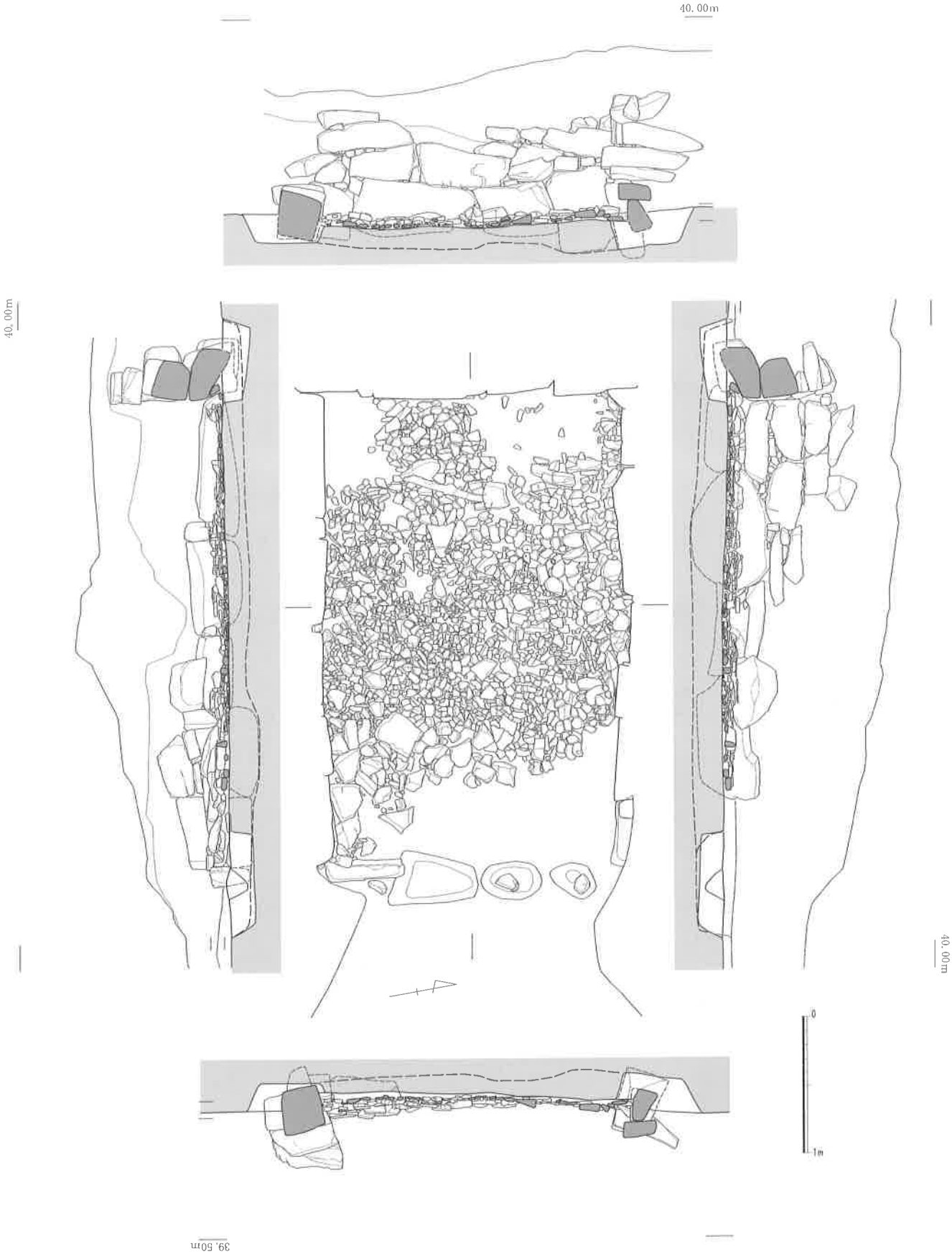
（４）出土遺物（第33～47図、表２・３）

第33図１、２は金銅製耳環である。いずれも鍍金が表面に残る。いずれも大きさ2.4×2.0×0.4cmで、断面は楕円形となる。

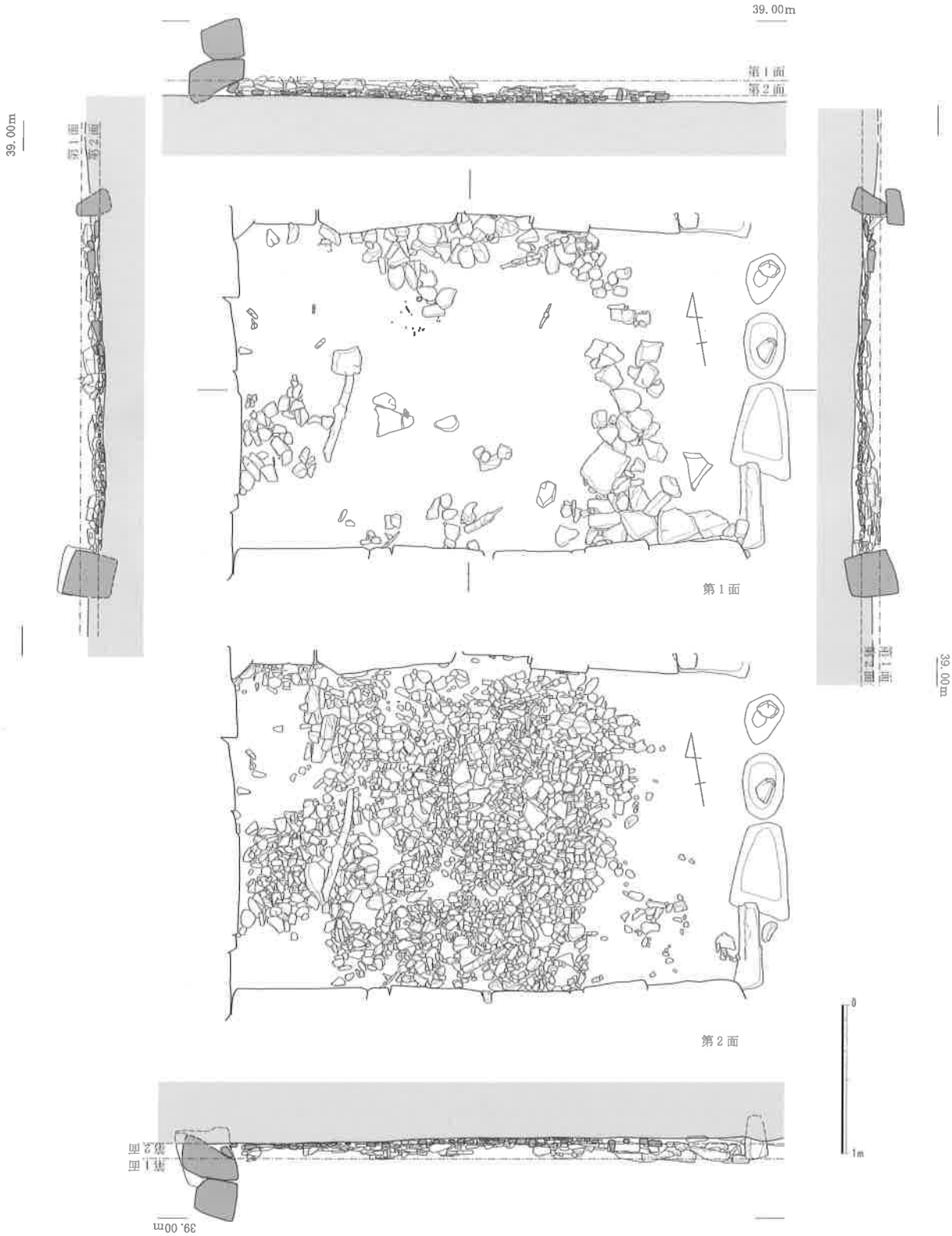
第34図１～第35図71は土製丸玉で、石室の床面や埋土からの出土である。表面を燻し、炭化物を付着させることにより黒く仕上げており、状態の良いものは光沢がある。もろく壊れやすいため小片となっているものもあり、ここでは実測可能なもののみを取り上げた（表３）。

第35図72～80はガラス小玉で、石室埋土からの出土である。いずれも青紺色である（表３）。

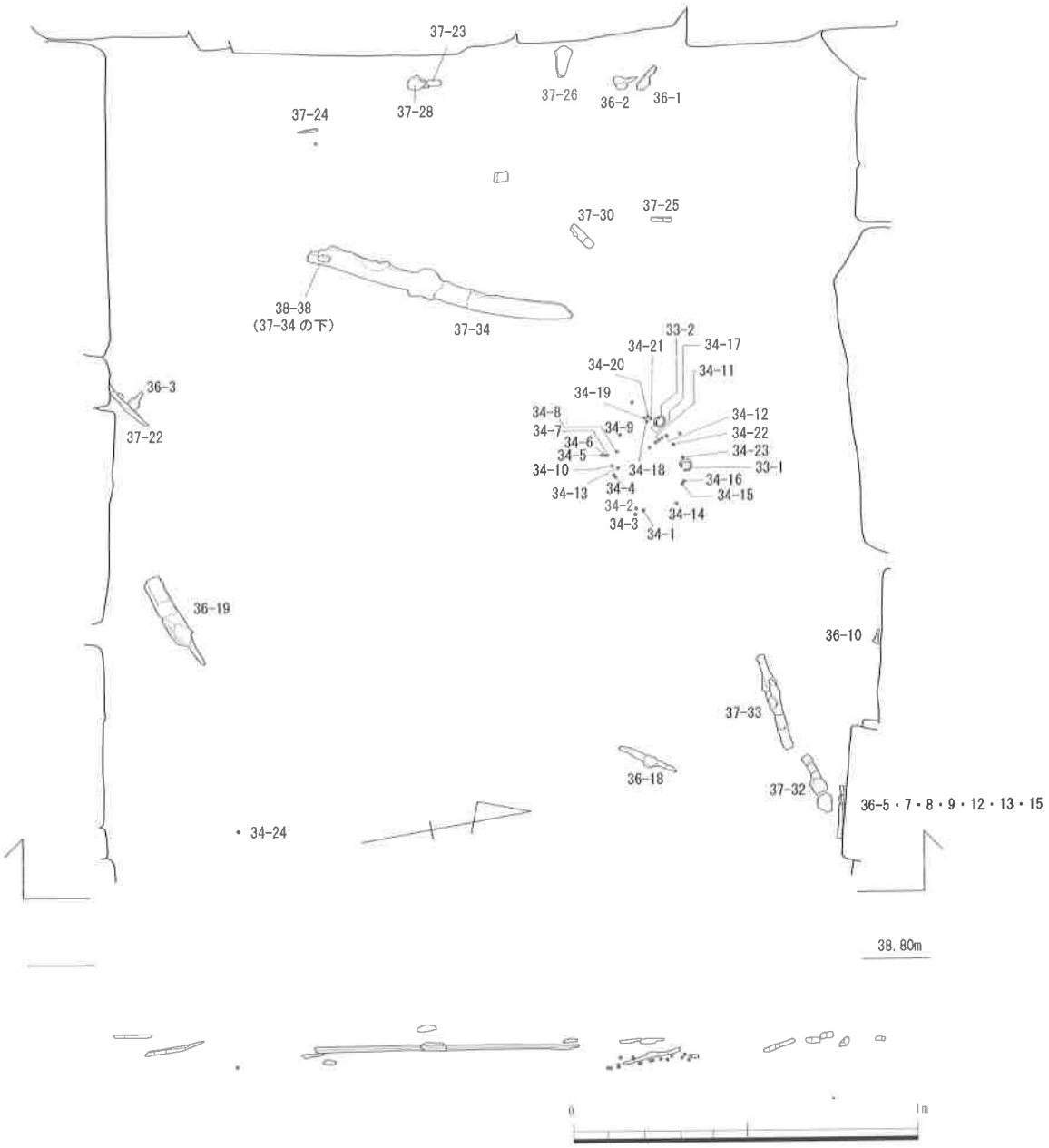
第36図１～18は鉄鏃で、１～３・５・７～９・12・13・15・17は石室床面、この他は石室床面付近の埋土から出土している。１は圭頭鏃で、大きさは8.8×3.4×0.9cm、重さは14.7gである。刃部はほぼ完形であり、茎には樹皮が巻かれた状態が確認できる。２は腸抉のある三角鏃である。先端部を欠いており、現状での大きさは8.5×3.5×0.5cm、重さは18.4gである。腸抉部は錆の付着により判断が難しいが、Ｘ線写真を元にして形を推測している。茎には木質が残っており柄の一部と考えられる。３は頭部の根元と茎付近しか残っていないため器種は断定できないが、圭頭鏃または方頭鏃になるのではないかと考えられる。現状で大きさは5.2×2.1×0.6cm、重さは14.2gである。茎に柄の木質が残っている。４～６は茎で、根元が尖る。４は横断面が方形を呈し、大きさは3.3×0.6×0.5cm、重さは1.25gで上半部に柄の木質が残っている。５は横断面が方形であり、大きさは3.0×0.6×0.4cm、重さは0.79gでほぼ全体に柄の木質が残っている。６は横断面が楕円形となり、大きさは2.3×0.5×0.7cm、重さは1.11gである。７～12・14・15・17は長頸鏃である。７は２本が錆で癒着した状態となっており、大きさは現状でそれぞれ8.4×0.7×0.6cmと3.9×0.7×0.5cm、重さは合計で14.5gである。８は頭部付近で、先端の一部が欠ける。現状で



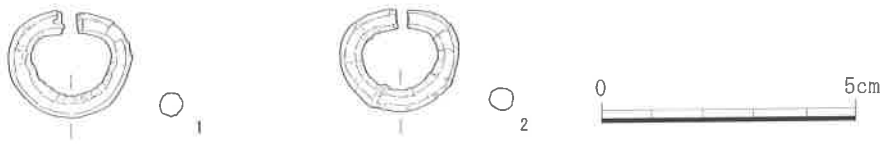
第30図　多久口木３号墳　石室実測図（1/40）



第31図　多久口木３号墳　石室敷石実測図（1/40）



第32図　多久口木３号墳　石室遺物出土状況実測図（1/20）



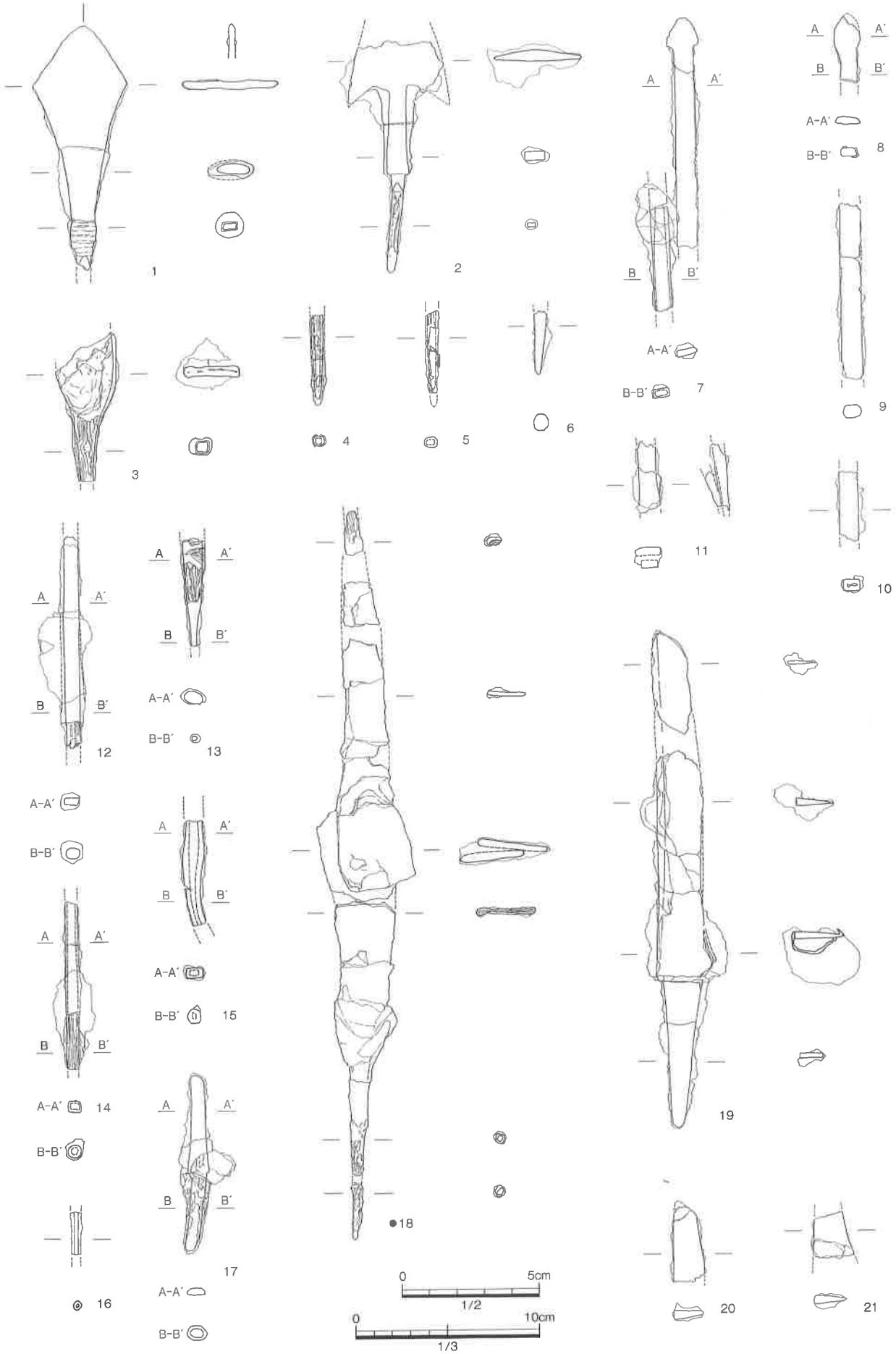
第33図　多久口木３号墳　石室出土耳環実測図（2/3）

大きさは2.4×0.9×0.4cmで、重さは0.88gである。９・10は頸部である。９の大きさは現状で6.3×0.8×0.5cm、重さは5.8g、10の大きさは2.5×0.8×0.6cm、重さは2.6gである。11は頸部片の２本が重なった状態で融着している。大きさはそれぞれ2.4×0.8×0.4cmと1.2×0.8×0.4cm、重さは合計で2.2gである。12と14は頸部から茎の破片で、茎には柄の木質が残っている。12の大きさは7.7×0.8×0.6cm、重さは13.4g、14の大きさは6.1×0.6×0.6cm、重さは7.6gである。13は茎で器種は不明である。上部に樹皮を横に巻いた状態が確認でき、中央部には柄の木質が残っている。大きさは3.8×0.9×0.6cmで横断面は楕円形となり、重さは2.5gである。15は茎で途中に亀裂が入り、曲がる。大きさは4.8×1.0×0.8cm、重さは3.4gである。16は茎の小片で、中空となっている。大きさは1.5×0.3×0.3cmで横断面はほぼ円形となり、重さは0.4gである。17は頸部の基部付近から茎にかけての破片で、柄の木質が残る。大きさは6.5×1.1×0.6cm、重さは5.8gである。18は２本の方頭鏃の頭部が互い違いに融着した状態である。大きさはそれそれ20.9×4.0×0.6cmと24.0×4.2×0.8cm、重さは合計で113.5gである。いずれも茎に柄の木質が残っている。

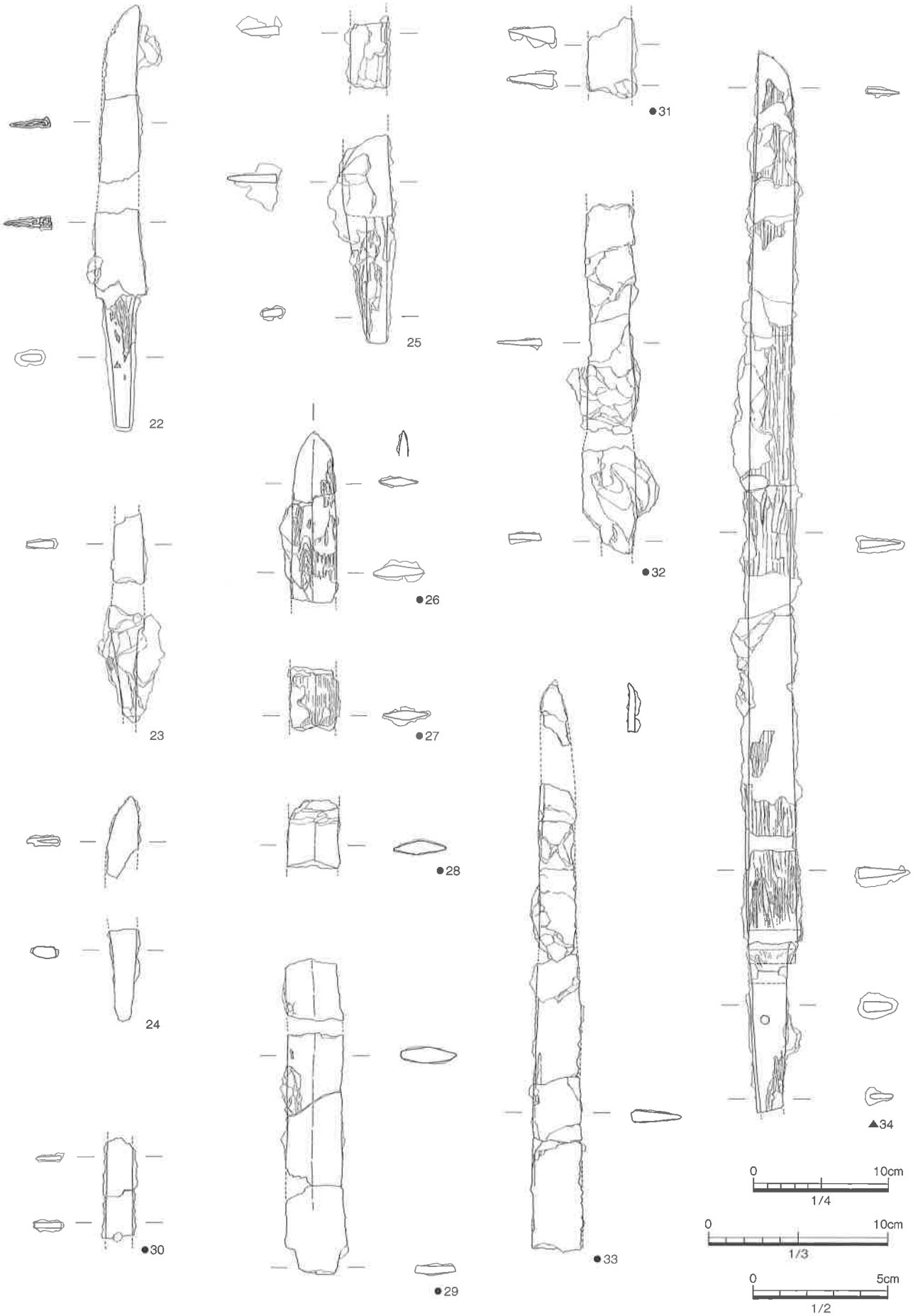
第36図19～21と第37図22～25は鉄刀子である。20・21は石室床面付近の埋土、その他は石室床面からの出土である。19は５つの破片に分かれるが、このうち鋒周辺の１片は接合しない。大きさは復元で17.8×2.2×0.3cm、重さは35.2gである。刃部側の関部が三角形に突出するが、埋蔵時の土圧によるものなのかこの部分が折れ曲がった状態になっていた。部分的に鞘と考えられる木質が付着している。20は鋒部近くの破片と考えられる。大きさは1.8×1.6×0.5cmである。21は先端部は欠けているものの関部の破片と考えられる。大きさは2.8×1.3×0.3cmである。22はほぼ全体がわかるが、刀身の中央部分が失われており接合しない。背側の関が三角形状に突出しており、この関係で刀身に反りが入っている。茎の一部に木質が残っており柄の痕跡である可能性がある。大きさは復元で15.8×1.9×0.6cm、重さは25.5gである。23は刀身から茎の破片で、２片に分かれており接合はしない。大きさは復元で7.7×1.0×0.5cmである。24は鋒と茎の破片である。途中の刀身部分が失われているため、全長を知ることは困難である。鋒と茎それそれの大きさは3.0×1.2×0.5cmと3.4×1.0×0.5cmである。25は刀身および関部から茎の破片である。両者は接合しないため、全長はわからない。それぞれの大きさは2.5×1.6×0.3cmと7.7×1.8×0.3cmである。茎部分には木質が残っており柄の痕跡と考えられる。

第37図26～29は鉄剣と考えられる。26・28は石室の床面、27は石室外の西側攪乱内、29は石室床面上部の攪乱内から出土している。26は鋒周辺の破片で、大きさは9.6×2.6×5.5cmである。部分的に鞘の痕跡と思われる木質が付着している。27と28は身部の破片である。それぞれの大きさは27が3.6×3.1×1.3cm、28が3.8×2.9×0.9cmである。27には鞘と考えられる木質が付着している。29は身部から関部にかけの破片である。４片に分かれており、このうちの１片は接合しない。大きさは17.7×3.5×1.0cmである。一部に鞘と考えられる木質が付着している。

第37図30～34は鉄刀と考えられる。30・32～34は石室床面、31は石室内の埋土から出土している。30は茎の部分で、目釘穴の中央付近で折れている。全体に柄と考えられる木質が付着している。大きさは2.6×2.0×0.7cmである。31は刀身部の破片で、大きさは4.5×2.9×0.9cmとなり厚みがある。32は刀身から関部、茎にかけての破片である。３片に分かれるが、このうちの１片は接合しない。大きさは復元で19.5×2.9×0.4cmである。33は鋒部から刀身にかけての破片で鋒は少し変形しており、鎬方向へ曲がる。９片に分かれるが、このうち鋒部の２片と刀身部の破片は接合しない。大きさは復元で31.8×2.8×0.7cmである。34は茎の根元の一部が折損し、失われているもののほぼ完形である。全体に木質が残っており、鞘および柄の名残りと考えられ



第36図　多久口木３号墳　石室出土鉄器実測図１（1/2、●は1/3）



第37図　多久口木３号墳　石室出土鉄器実測図２（1/2、●は1/3、▲は1/4）

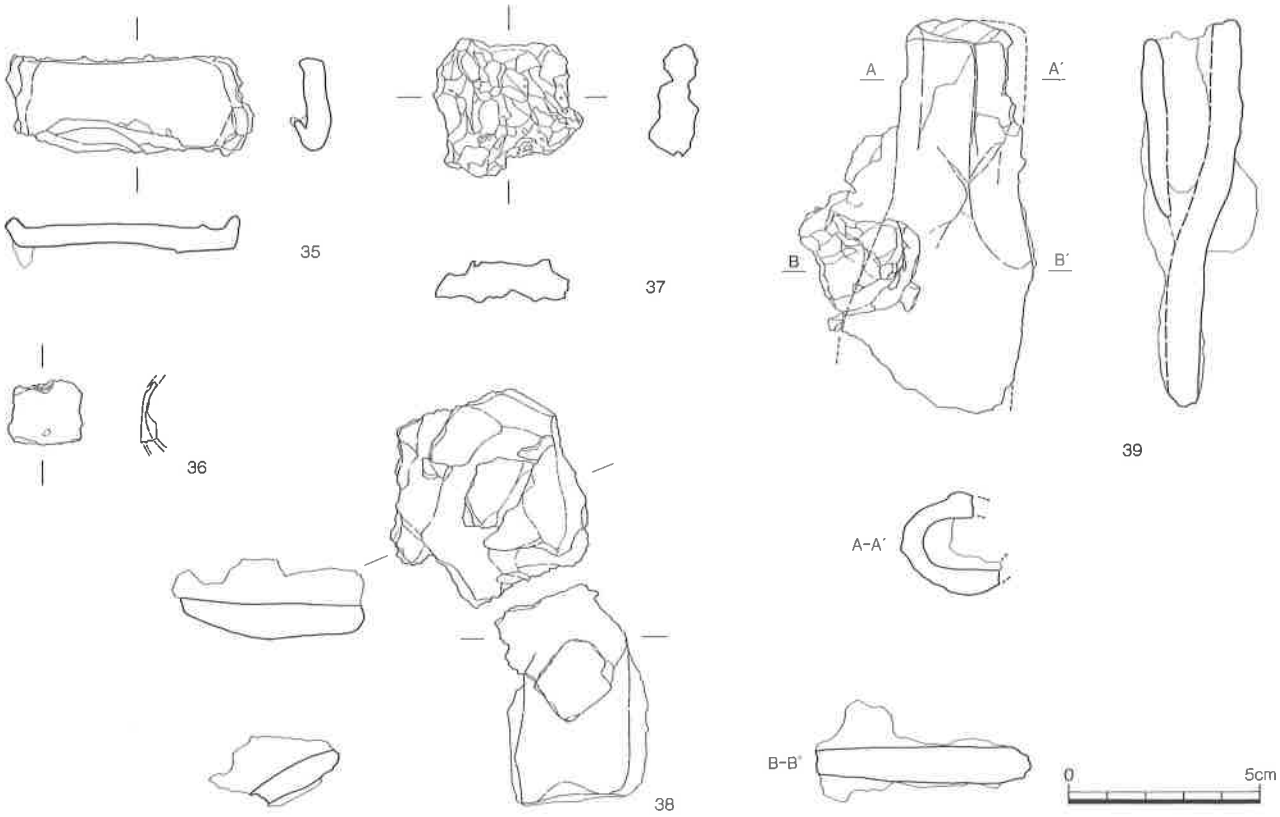
るうえ、関部付近には帯状の窪みが２ヶ所ほどみられ、鍔や鎹、鞘口金具等が嵌っていた痕跡の可能性がある。また、肉眼ではわからないが、茎に目釘穴があることをＸ線写真で確認した。残存する全長は78.6cm、刃部長は67.9cm、厚さは刃部の根元付近で0.9cm、重さは806.9gである。

第38図35は穂摘鎌と考えられ、石室内の埋土から出土した。両側面が折り返している状況を確認でき、刃部側は一部捲れ上がっている。大きさは2.6×6.6×0.6cm、重さは34.4gである。

第38図36～38は不明鉄製品で、36は石室床面付近の埋土、37は石室南側の攪乱内、38は石室の床面から出土した。36は大きさが1.9×1.7×0.4cm、重さは1.4gである。平面は方形で断面は弧を描いており、一部に布目が観察できる（巻頭図版４）。刀装具や飾金具の可能性が考えられる。37は大きさが3.6×3.6×1.2cm、重さは19.4gである。表面は熱により溶けたような状態で、気泡も入っている。38は敷石に癒着し、剥がすのが困難な状態であり、器形についても判別ができない。

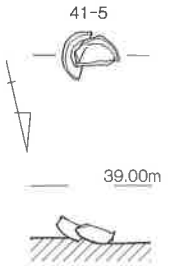
第38図39は袋状鉄斧で、石室西側攪乱内から出土した。袋部は比較的良く残るが刃部は欠損している。大きさは10.2×4.5×2.5cm、重さは160.0gである。

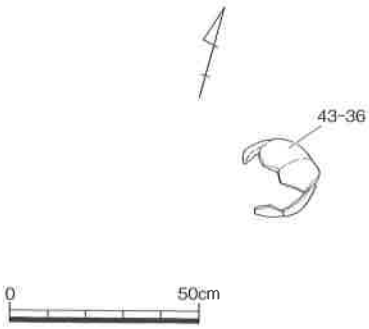
第41図１～７は須恵器の蓋である。１・２・６・７は表土から、３・４は南北トレンチ内、５は墳丘上からの出土である。１は口縁部から天井部の一部にかけての小片である。口縁部の復元径は13.0cmで小型である。口縁部はやや外反し、端部は内傾するとともに段が入る。天井部と口縁部とを分ける稜は短いが鋭意である。天井部の大部分が失われているため、形態と回転ヘラケズリの方向は不明である。２は口縁部から稜にかけての小片である。口縁部の復元径は13.0cm



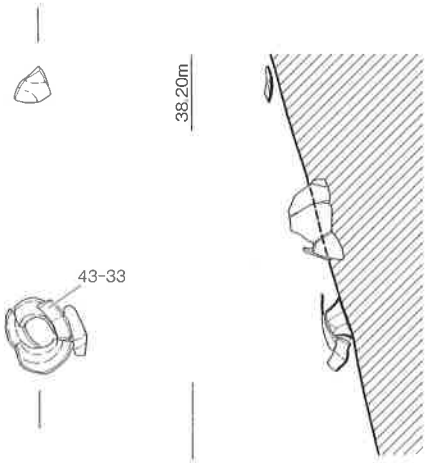
第38図　多久口木３号墳　石室出土鉄器実測図３（1/2）

で小型である。口縁端部はやや外反し、端部は内傾するとともに段が入る。天井部と口縁部を分ける稜は短いが鋭意である。天井部が失われているため、形態と回転ヘラケズリの回転方向は観察できない。１に比べて焼きはやや不良である。３は口縁部から天井部の一部にかけての破片で、残存率は１／６程度である。口縁部の復元径は12.8cmで小型である。天井部の残存部分は丸みを持ち、天井部と口縁部を分ける稜は短く鋭さに欠ける。口縁部はやや内湾し、端部は内傾し面を成す。回転ヘラケズリの方向は時計回りである。４は口縁部から天井部の一部にかけての破片で残存率は１／６程度である。口縁部の復元径は13.0cmで小型である。天井部は３よりも丸みを持ち、天井部と口縁部とを分ける稜は短く鋭さに欠ける。口縁部はやや外反気味に外へ開き、端部は内傾し面を成す。回転ヘラケズリの方向は反時計回りである。５は二つに割れ、上下逆となり、重なった状態で出土した（第39図）。口縁部の約１／３が欠けるが、ほぼ全体がわかる状態である。口縁部の径は11.8cm、器高は3.7cmで小型である。口縁部はやや内湾し、端部は内傾し面を成す。天井部と口縁部の境の稜は短く甘い。天井部は平坦で外面の約１／２にケズリを施す。回転ヘラケズリの方向は反時計回りである。６は天井部から稜にかけて残り、残存率は約２／３である。口縁部が残っていないため正確な径は出ないが、大型であると考えられる。天井部は扁平で、約１／３に回転ヘラケズリを施す。ヘラケズリの方向は時計回りである。外面の中央に内側が窪んだつまみを貼付するが、この周辺ではやや焼けひずみがみられる。天井部と口縁部を分ける稜はほとんど突出せずに甘い。天井部内面の中央部付近に同心円のタタキの痕跡が残る。７は口縁部の約１／３が失われるが、ほぼ全体がわかる状態である。口縁部の径は17.2cm、器高は6.0cmで大型である。焼けひずみがひどく、天井部のほぼ中央部が大きく窪む。また、焼成時に窯内で付着したと考えれる他の器の破片が観察できる。加えて、稜から口縁部にかけての一部分には自然釉が着く。天井部の外面に内側が窪んだつまみが付けられているが、中央ではなくやや偏った位置にある。天井部の形態は扁平で約１／３に回転ヘラケズリを施す。ヘラケズリの方向は反時計回りである。天井部と口縁部を分ける稜はほとんど突出せず甘い。口縁部はやや内湾気味に外へ開

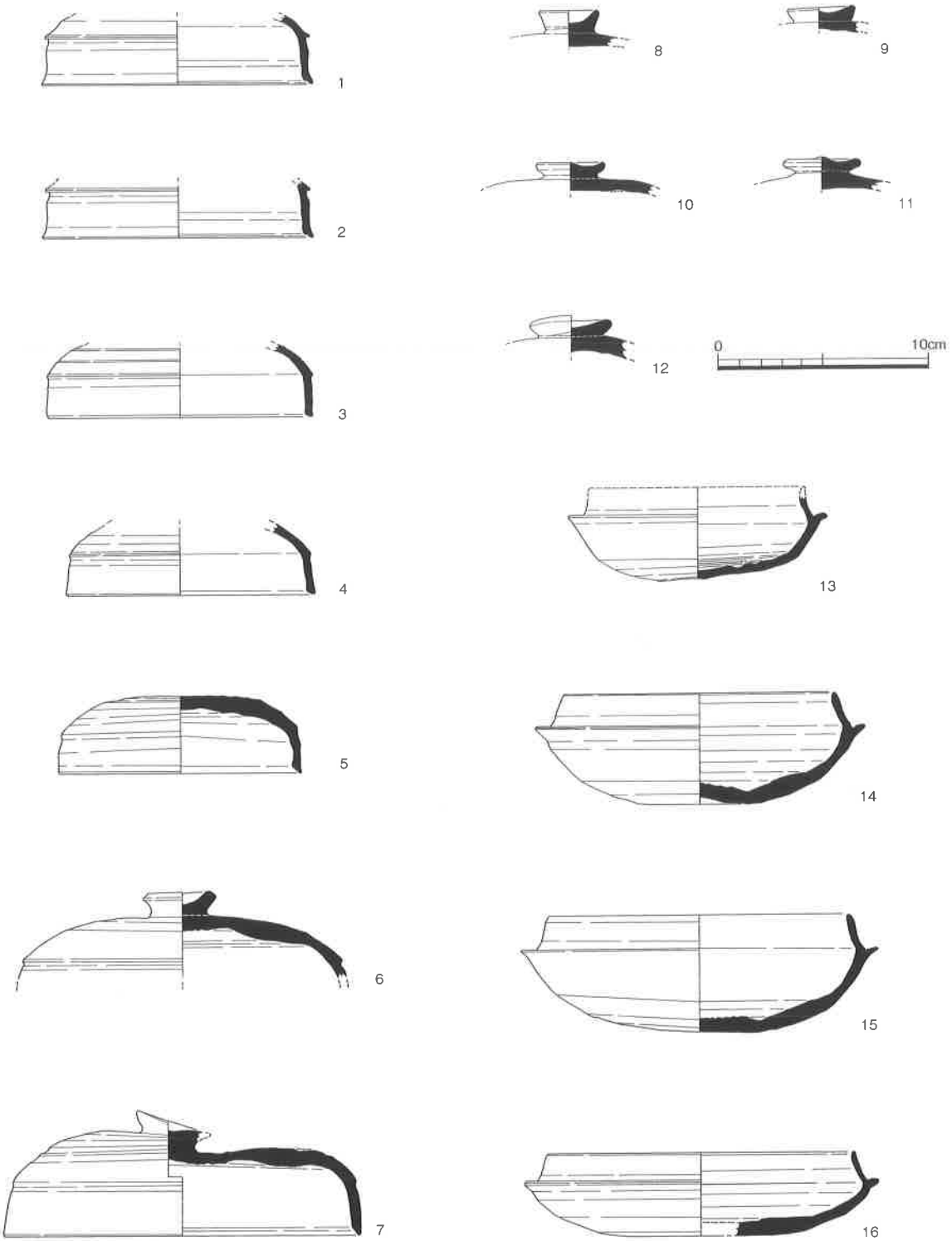




第39図　多久口木３号墳
墳丘土器出土状況実測図１（1/20）



第40図　多久口木３号墳　墳丘土器出土状況実測図２（1/20）



第41図　多久口木３号墳　墳丘出土土器実測図１（1/3）

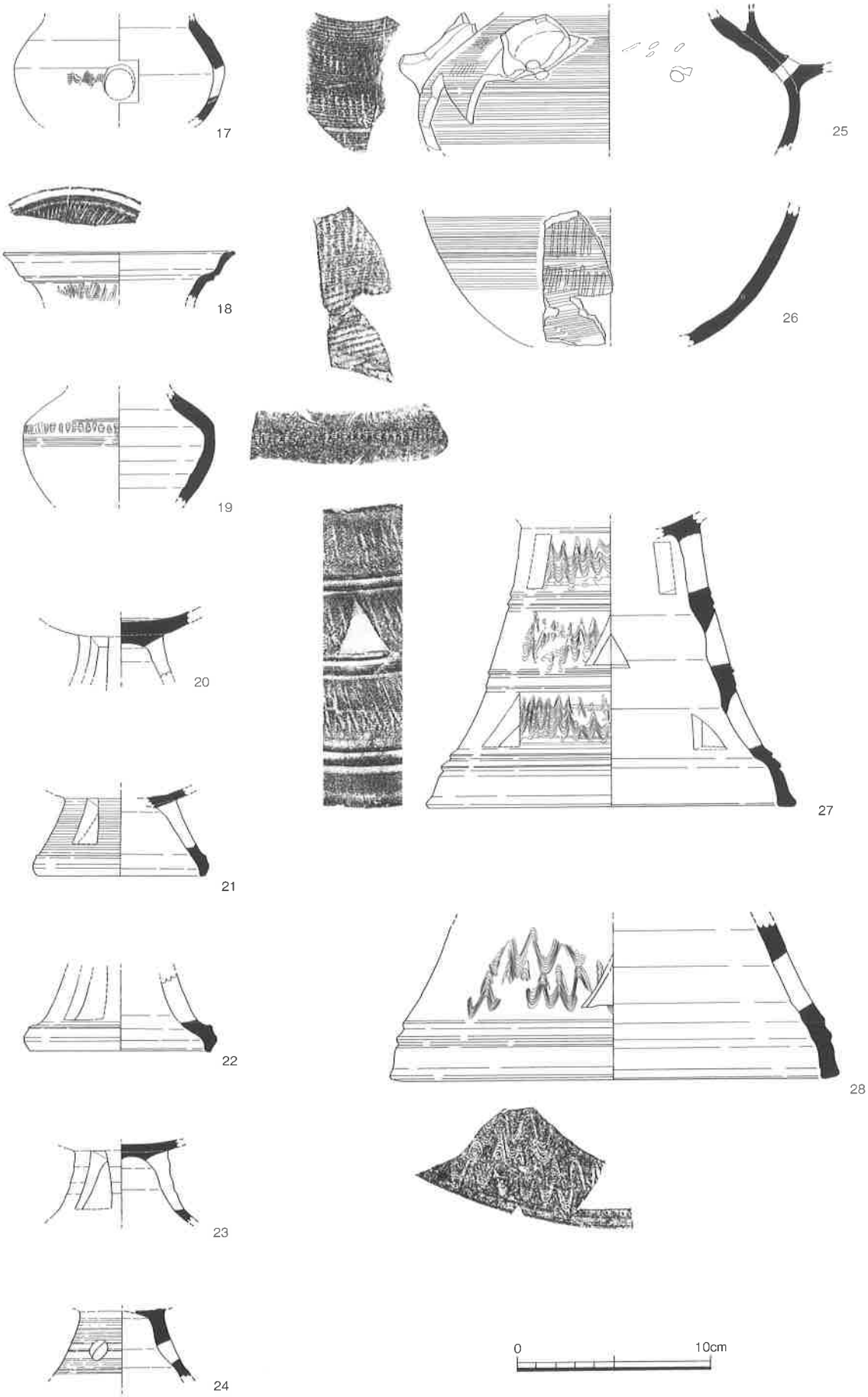
き、端部は内傾し段が入る。天井部内面の中央には同心円タタキの痕跡が残る。焼成は良くない。

第41図８～12は須恵器の蓋のつまみ部分で、いずれも表土からの出土である。８は丁寧なつくりで、つまみの根元から縁にかけては直線状に開き、内面は窪む。９はやや扁平で、内面の中央が少し高まった形状である。10は扁平で、内面の中央が高まる。11は扁平で、内面中央の高まりが縁よりも盛り上がる。12は焼けひずみが大きく部分的にひびも入る。扁平で、内面中央が窪む。

第41図13～16は須恵器の坏身である。13・14は表土から、15・16は墳丘上からの出土である。13は底部から受部にかけてはほぼ残るが、たちあがりは一部分がかろうじて残り、口縁端部は全周で失われている。口縁部の径は10.4cm、器高は4.0cm程度と想定され、小型である。たちあがりは外反しながら内傾し、受部は外上方へ伸び、たちあがりとの境界に沈線を巡らせる。底部外面の約１／３に時計回りの回転ヘラケズリが施される。胎土は粗く、器壁は全体的に薄めで、焼成は良くない。14は２／５程度が残存する。口縁部の復元径は13.0cm、器高は5.4cmで大型である。焼けひずみがみられ、底部中央が内側に窪み、他の須恵器の破片が融着している。たちあがりはほぼ直線状に内傾し、端部は丸くおさめる。受部は上方へ伸び、たちあがりとの境界には沈線を巡らせる。底部はやや丸みをもち、外面の約１／３には反時計回りの回転ヘラケズリが施される。底部内面の中央には同心円タタキの痕跡がみられる。焼成は不良である。15は一部が欠けるもののほぼ全体が残る。口縁部の径は14.5cm、器高は5.6cmで大型である。たちあがりはやや内湾気味に内傾し、端部は丸くおさめる。受部は上方へ伸び、たちあがりとの境界に沈線を巡らせる。底部の平坦面はやや広めで、外面の約１／３には反時計回りの回転ヘラケズリが施される。底部内面の中央部には同心円タタキの痕跡がのこる。焼成は不良である。16は底部中央付近が失われており、残存率は約１/10である。口縁部の復元径は14.7cm、器高は4.0cmと想定でき、大型で扁平な形態を呈する。たちあがりは直線状で内傾し、端部は丸くおさめる。受部の張り出しは小さめで水平に近くなっており、端部は丸い。たちあがりと受部の境界には甘い沈線が巡る。底部外面の平坦部付近のみ反時計回りの回転ヘラケズリが施される。

第42図17~19は須恵器の甕の破片で、17・18は表土から、19は２号溝から出土した。17は体部付近の小片で、円孔は１／２程度が残っている。肩部の稜は甘く、円孔の横に波状文を施す。18は口縁部付近の破片で、残存率は１／４程度である。口縁部は外反しながら開き、口縁端部は内傾し段が入る。頸部には波状文を施す。19は体部付近の破片で、残存率は１／３程度である。円孔部分は失われており、肩部に張りをもち、肩部の下方に刺突文を施す。

第42図20～24は須恵器の高坏の脚部の破片で、いずれも表土からの出土である。20は３方向に長方形の透かしが入る。坏底部と脚上部のみの破片であるため、高さは不明であるが、脚部の張り出し具合から短脚である可能性が高い。21は脚部のみの破片で、残存率は１／４程度である。透かし部分は１方の側面のみが残っており、正確な透かしの幅と形態はわからない状態である。外面には自然釉が付着しており、横方向のカキ目が施されている。直線状に広がり、端部に段を作り出す。短脚で、３方に台形透かしが入る。22は脚部の下部の破片で、残存率は１／３程度である。外面の透かし周辺と端部付近に自然釉が付く。台形状の透かしは３方向に空けられていると考えられるが、一方の側面が欠けており、正確な幅は判断できない。脚部は短脚で、やや外反しながら開き、端部外面には段を施し、沈線を巡らせる。23は端部を欠いた脚部の破片で、残存率は１／２程度である。下部に向かって外反しながら広がり、透かしは台形状で３方向に空けられている。短脚である可能性が高いと考えられる。24は脚上半部分の破片で、残存率は１／４



第42図　多久口木３号墳　墳丘出土土器実測図２（1/3）

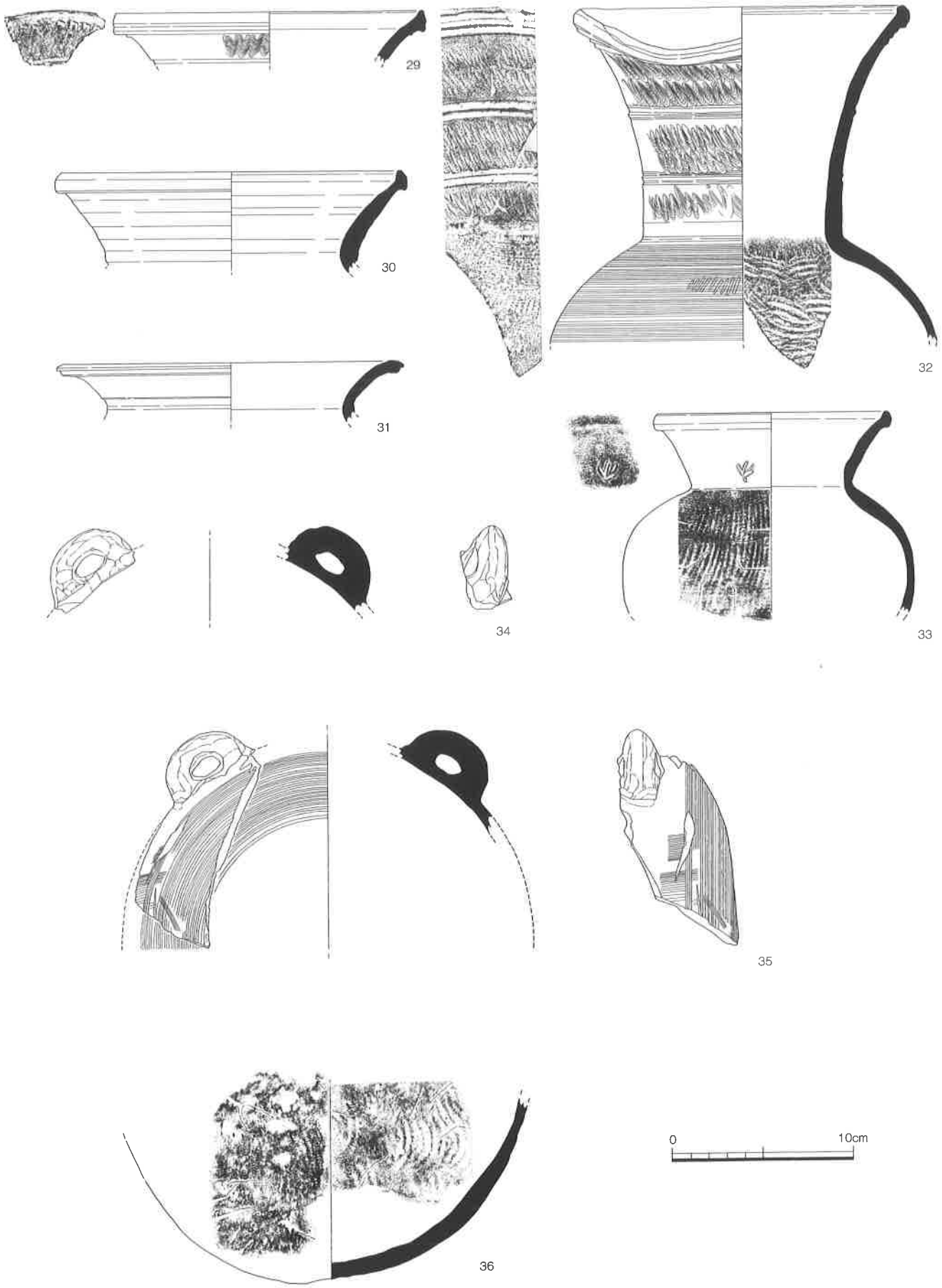
程度である。やや外反しながら広がり、外面には薄くカキ目が施され、円形の透かしが空けられている。

第42図25は表土から出土した須恵器子持壺の肩部の破片である。復元による最大径は19.9cmである。外面は平行タタキを行ったのち、横方向のカキ目で仕上げを行い、内面はタタキの痕跡をナデ消している。肩部の２か所に小型土器の底部のみが貼り付いており、この底部の内面から壺本体に向かって直径８mm程度の穿孔が施されている。残された小型土器の痕跡の間隔を参考にすると等間隔に貼付しているのであれば元は６か所に小型土器等の装飾があった可能性がある。なお、小型土器の器形は想定できない。第42図26は25の近くの表土からの出土で、器壁の厚さや焼成、角度などから25と同一個体で底部付近の破片と考えられるが、接合はしない。外面上部は平行タタキを行ったのち横方向のカキ目仕上げを施すが、下部は平行タタキで調整が終わっている。内面は25と同様、ナデによりタタキの痕跡を消している。

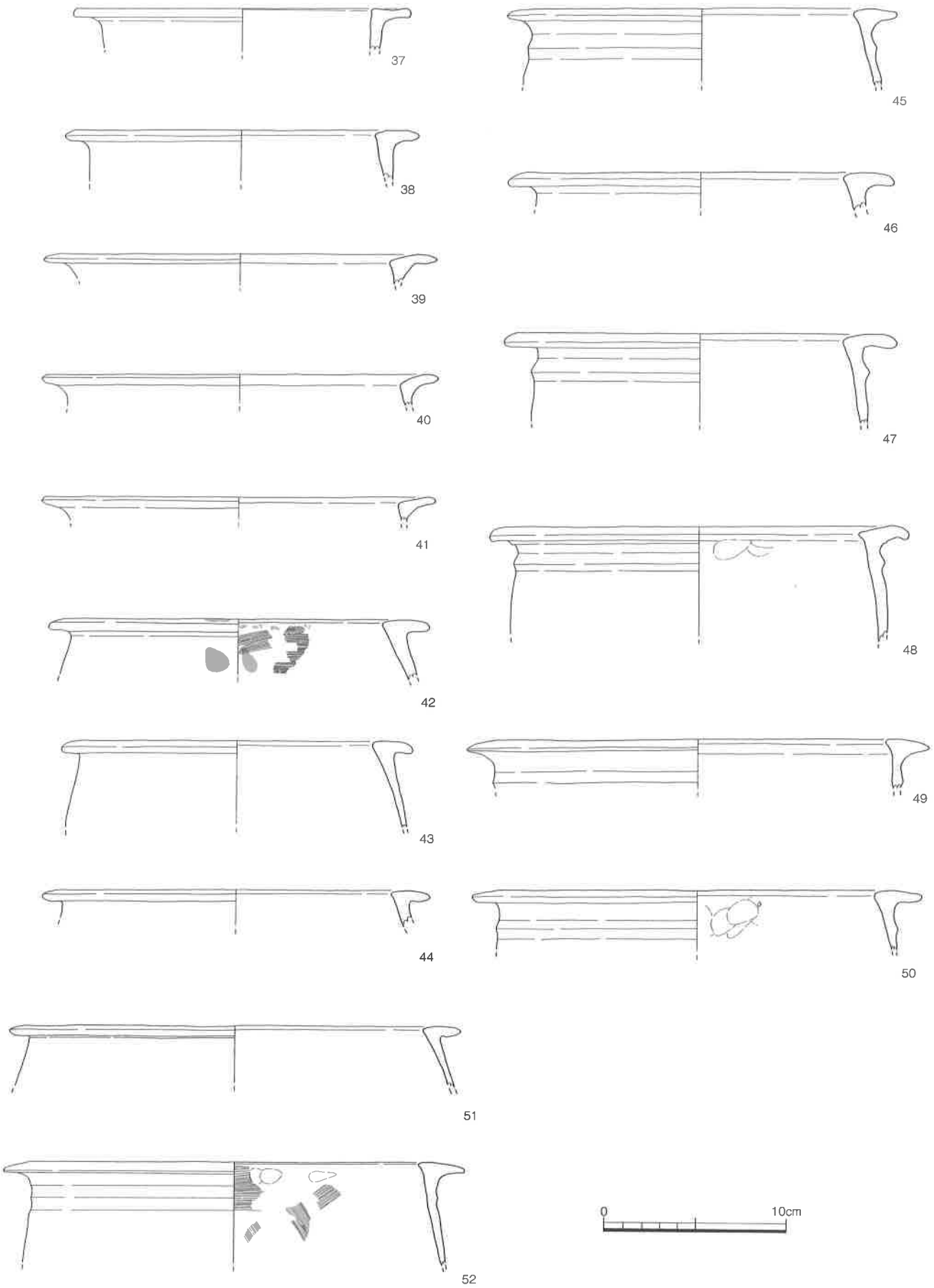
第42図27・28は須恵器大型器台の脚部の破片で、いずれも表土からの出土である。27は復元径19.3cmで、残存高は25.2cmであり、残存率は１／４程度である。３段分の２条からなる突線が残り、各区画を波状文で埋めている。下部２区画には三角形の透かしを開け、上部１区画には長方形の透かしを施し、それぞれを互い違いに配置する。28は復元径23.4cmで、残存高は8.1cmであり、残存率は１／４程度である。最下段のみ残っており、粗雑な波状文が施され、三角形の透かしが開けられる。27よりも大型となる。

第43図29～33・36は須恵器の壺または甕の破片である。29は表土から出土した破片で、復元径は17.0cm、残存率は１/10程度である。頸部はやや外反しながら口縁部に向かって開き端部は上下に伸ばし１条の沈線を巡らせる。頸部外面には波状文を施す。30は前方部の墳丘上から出土した破片で、復元径は19.7cm、残存率は１／４程度である。頸部はやや外反しながら口縁部に向かって開き、端部は上下に伸ばす。31は表土から出土した破片で、復元径は19.4cm、残存率は１／４程度である。頸部は外反しながら開き、端部外面には段を作り出す。焼成が不良である。32は前方部西トレンチから出土した口縁部から肩部までの破片で、残存率は１／２程度である。肩部の外面と口縁部上部内面に自然釉が付着する。口縁部に大きな焼けひずみがみられ、正確な口縁部の径は測り難いが、比較的変形の少ないところで計測すると、口縁部径は18.8cmになる。残存率は２／５程度である。頸部は外反しながら口縁部に向かって開き、端部は上方へ伸ばす。頸部外面には３段分の２条からなる突線が巡り、各区画を粗い波状文で埋めている。肩部外面は平行タタキを行ったのちに横方向のカキ目仕上げを行っており、口縁部から頸部内面にかけてはナデ仕上げ、肩部内面は同心円タタキ痕が残る。33と36は後円部南側墳裾からの出土である。いずれも上下逆さまの状態で発見されているため、原状を止めず、墳丘上から転落してきた可能性がある（第40図）。33は口縁部から胴部上半までの破片で、頸部から口縁部にかけてを１／４程度失っている。頸部は短く外反しながら口縁部に向かって開き、端部は上下に伸ばす。頸部付け根に「介」の字をひっくり返したようなヘラ記号が入る。肩部から下の外面は平行タタキを行ったのち薄く横方向にナデて仕上げる。内面については丁寧なナデ仕上げとなっており、タタキの痕跡等は残らない。36は底部周辺の破片で、外面には格子目タタキ、内面には同心円のタタキが施されている。火にかけられたのか、器壁が点々と剥がれ落ちており、痛みがひどい。

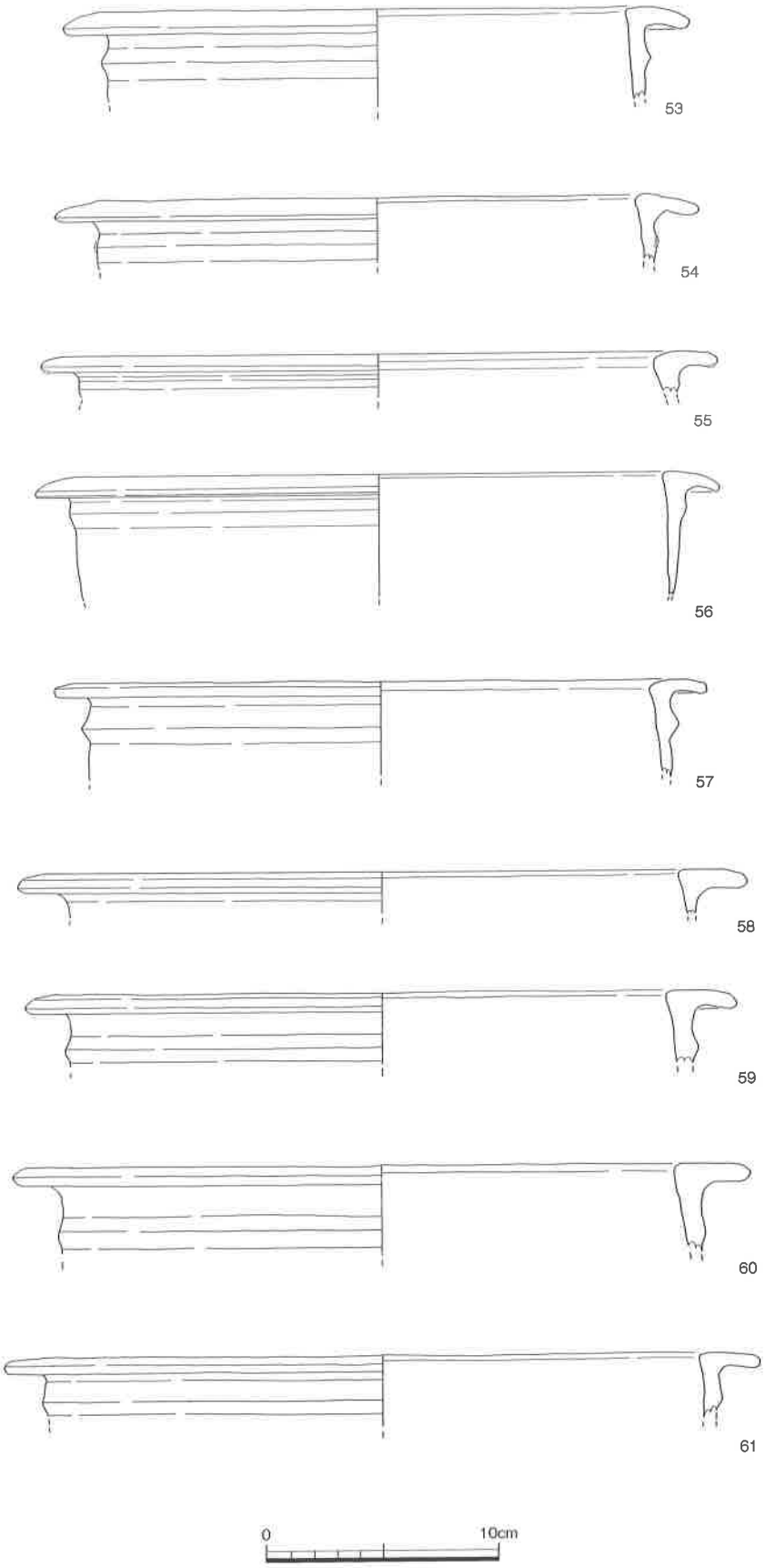
第43図34・35は提瓶の把手と把手周辺の破片である。34は前方部西トレンチ、35は表土からの出土である。35は把手から体部前面にかけてが残っており、体部には回転カキ目が施されていることがわかる。



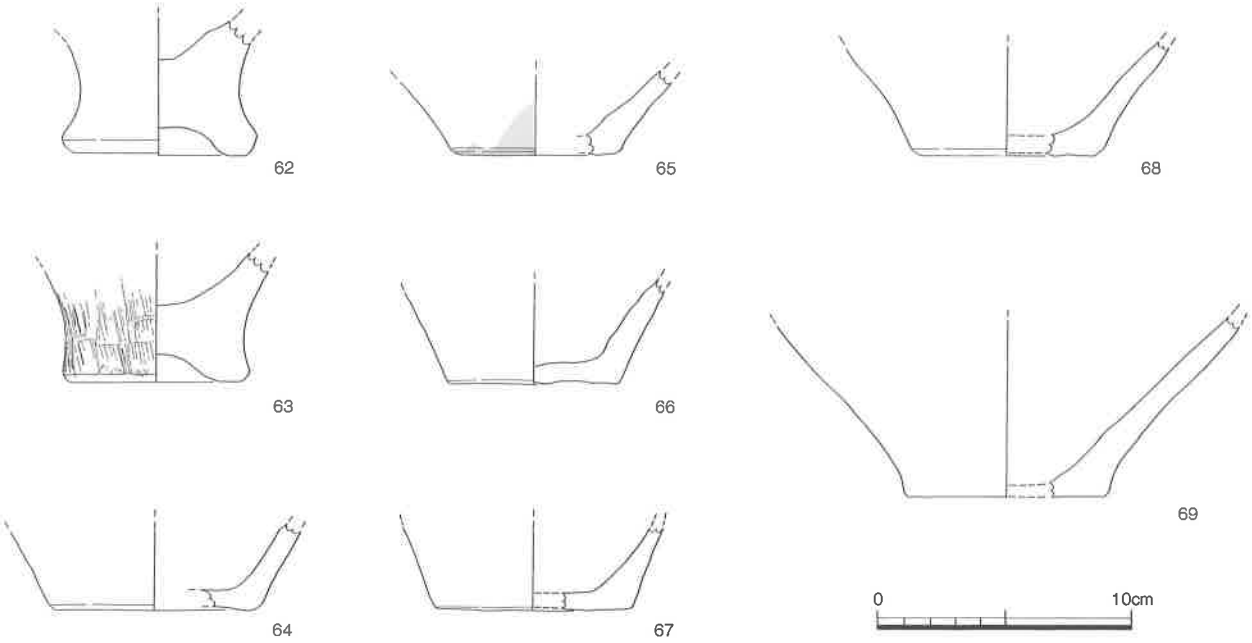
第43図　多久口木３号墳　墳丘出土土器実測図３（1/3）



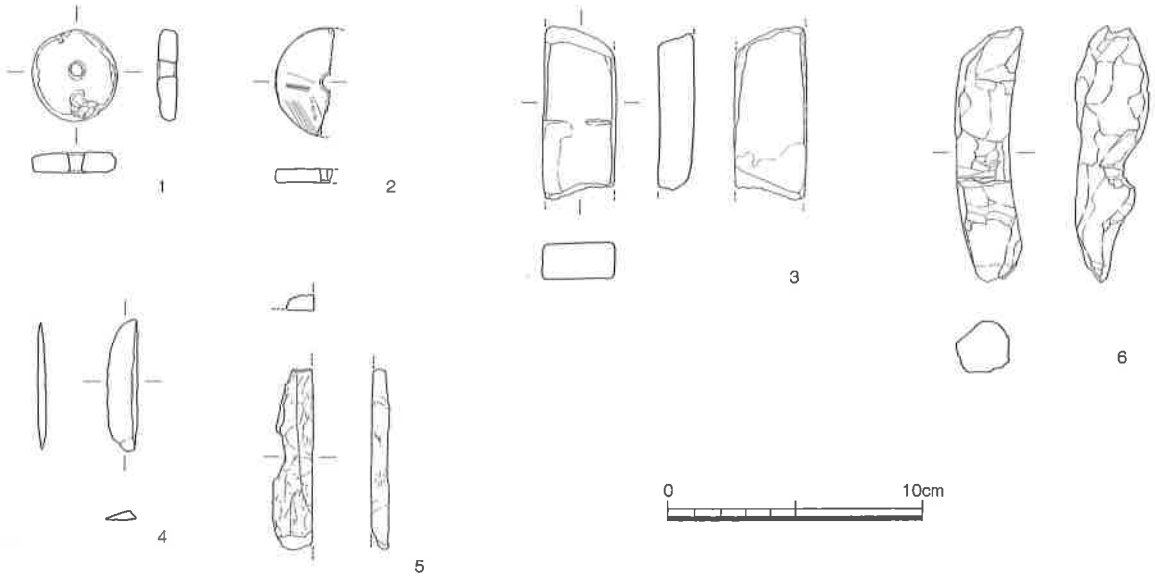
第44図　多久口木３号墳　墳丘出土土器実測図４（1/3）



第45図　多久口木３号墳　墳丘出土土器実測図５（1/3）



第46図　多久口木３号墳　墳丘出土土器実測図６（1/3）



第47図　多久口木３号墳　墳丘出土石器実測図（1/3）

第44図37～第46図69は弥生土器の破片である（表２）。墳丘の周辺や盛土内等に混入して出土しており、基本的に残りが悪い。第１次調査でも同様の弥生土器が出土しているため、この丘陵上には古墳築造以前の弥生時代中期初頭～後半に集落があった可能性がある。

第47図１・２は石製紡錘車である。１は後円部墳丘盛土の最下部、旧表土内からの出土である。大きさは3.4×3.7×0.8cmで、作りがやや粗雑で歪んだ円形となっており、周縁部の稜も甘い。穿孔は片側から空けられるが、円の中心から少しずれた位置にある。これらのことから、転用品の可能性がある。石材は片岩系を使用している。２は南北トレンチからの出土で、残存率約１／２の破片である。復元で4.2×4.4×0.5cmで、１と比べると作りは丁寧であり、正円に近く、表裏と側面は平滑で、周縁部の稜もしっかりしている。穿孔は片側から空けられる。石材は片岩系と考えられる。

第47図３～５は砥石と考えられる。３は後円部墳丘盛土内からの出土である。大きさは6.8×2.9×1.5cmで、長方形となっており、上下の端部は失われている。表面には横方向の浅いキズが入っており、裏面は少し窪む。やや粗い砂岩であり、中砥として使われたと考えられる。４は後円部南側墳裾部から出土した砥石で表面と側面が剥離した破片である。現状は5.3×1.3×0.4cmで、目の細かい砂岩を用いており、仕上げ砥として使われたと考えられる。５は後円部墳丘盛土内から出土した砥石で表面と側面が剥離した破片である。現状は7.2×1.6×0.7cmで、２つの面に縦方向の細かい研磨痕がみられる。目の細かい硬質砂岩製で、仕上げ砥として使われたと考えられる。

第47図６は不明石製品で、墳丘裾部からの出土である。大きさは10.1×2.7×2.9cmで、上部に方形の突起を削り出している。上面からみると円弧を描いており、滑石を用いていることから中世の石鍋の転用品と考えられる。

表２　多久口木３号墳出土　弥生土器一覧表

No.（図一番号）	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	底部径	色調 内	外	焼成	調整・手法 内	外	残存状態	備考
44－37	前方部端部トレンチ	甕	18.8	2.2		橙色	橙色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	1／7程度	
44－38	墳丘盛土内	甕	19.8	2.8		橙色	浅黄橙色	不良	不明瞭	不明瞭	1／10程度	風化が著しい
44－39	墳丘盛土内	甕	22.0	1.6		黄橙色	橙色	良	不明瞭	不明瞭	1／7程度	風化が著しい
44－40	墳丘盛土内	甕	22.2	1.7		黄橙色	黄橙色	不良	不明瞭	不明瞭	1／16程度	風化が著しい
44－41	墳丘盛土内	甕	22.0	1.3		褐灰色	明黄褐色	不良	ヨコナデ	ヨコナデ	1／10程度	
44－42	前方部端部トレンチ	甕	21.2	3.3		黄橙色	橙色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	1／8程度	内外に赤色顔料(丹？)が付着
44－43	墳丘盛土内	甕	19.6	4.8		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	不明瞭	不明瞭	1／7程度	風化が著しい
44－44	墳丘盛土内	甕	21.6	2.0		橙色	にぶい橙色	良	不明瞭	不明瞭	1／8程度	口縁下部にススが付着　風化が著しい
44－45	墳丘盛土内	甕	21.8	4.2		橙色	橙色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	1／8程度	
44－46	墳丘盛土内	甕	21.6	2.1		にぶい黄橙色	橙色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	1／8程度	
44－47	墳丘盛土内	甕	22.0	4.9		黄橙色	にぶい黄橙色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	1／14程度	側面・口縁下部にススが付着
44－48	墳丘盛土内	甕	23.4	6.5		褐灰色	橙色	良	ヨコナデ・指押さえ	ヨコナデ	1／12程度	口縁下部にススが付着
44－49	墳丘盛土内	甕	25.8	2.7		黄橙色	橙色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	1／8程度	
44－50	墳丘盛土内	甕	25.1	3.3		にぶい黄橙色	橙色	不良	ヨコナデ・指押さえ	ヨコナデ	1／10程度	
44－51	墳丘盛土内	甕	25.2	3.4		橙色	橙色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	1／10程度	
44－52	墳丘南側表土	甕	25.7	5.8		黄橙色	橙色	良	ナデ・指押さえ	ナデ	1／4程度	口縁下部にススが付着
45－53	墳丘盛土内	甕	27.6	4.0		にぶい橙色	にぶい黄橙色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	1／10程度	
45－54	墳丘盛土内	甕	28.4	3.0		橙色	橙色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	1／12程度	
45－55	墳丘南側表土	甕	29.5	1.8		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	不良	不明瞭	ヨコナデ	1／12程度	
45－56	前方部墳丘上	甕	30.0	5.4		にぶい黄橙色	黄橙色	不良	ヨコナデ	ヨコナデ	1／12程度	
45－57	墳丘盛土内	甕	28.6	4.3		にぶい黄橙色	にぶい橙色	不良	ナデ	ナデ	1／4程度	
45－58	墳丘南側表土	甕	32.0	1.9		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	不明瞭	不明瞭	1／12程度	風化が著しい
45－59	表土中	甕	31.2	3.2		浅黄橙色	浅黄橙色	不良	ヨコナデ	ヨコナデ	1／10程度	
45－60	墳丘盛土内	甕	32.4	3.8		橙色	橙色	良	ヨコナデ	ヨコナデ	1／12程度	
45－61	墳丘盛土内	甕	33.2	2.9		黄橙色	橙色	不良	ヨコナデ	ヨコナデ	1／12程度	
46－62	表土中	甕		5.3	7.7	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	不明瞭	不明瞭	底部完形	風化が著しい
46－63	石室敷石の下	甕		5.1	7.4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	不明瞭	タテハケ	底部完形	
46－64	表土中	甕		3.4	7.9	黄橙色	橙色	良	ナデ	ナデ	1／5程度	
46－65	墳丘盛土内	甕		3.4	6.6	明黄橙色	明黄褐色	良	ナデ	ナデ	1／5程度	側面の広範囲にススが付着
46－66	墳丘盛土内	甕		4.2	6.8	にぶい橙色	橙色	不良	ナデ・指押さえ	ナデ	1／6程度	
46－67	前方部墳丘上	甕		3.3	7.8	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	不良	不明瞭	不明瞭	1／5程度	風化が著しい
46－68	墳丘盛土内	甕		4.5	7.0	浅黄橙色	にぶい黄橙色	不良	不明瞭	不明瞭	1／4程度	風化が著しい
46－69	表土中	甕？		7.1	8.0	黄橙色	黄橙色	良	ナデ	ナデ	1／8程度	

表３　多久口木３号墳出土　玉類一覧表

No.（図一番号）	遺構	器種	材質	色調	直径(mm)	重さ(g)	残存状態	備考
34－1	床面	丸玉	土	黒色	6.9	0.24	完形	
34－2	床面	丸玉	土	褐灰色	7	0.23	1／4残存	主要な５つの破片を合計した重さ
34－3	床面	丸玉	土	黒褐色	7.3	0.28	完形	
34－4	床面	丸玉	土	黒色	8	0.55	完形	２つの玉が固着
34－5	床面	丸玉	土	明褐色	6.1	0.16	1／2残存	３つに分かれる。合計した重さ
34－6	床面	丸玉	土	黒褐色	6.9	0.22	1／3残存	３つに分かれる。合計した重さ
34－7	床面	丸玉	土	黒褐色	6.8	0.22	完形	
34－8	床面	丸玉	土	黒色	7	0.24	完形	
34－9	床面	丸玉	土	黒灰褐色	7.2	0.2	完形	
34－10	床面	丸玉	土	灰褐色	6mm以上	0.18	1／3残存	
34－11	床面	丸玉	土	黒褐色	7.3	0.27	完形	
34－12	床面	丸玉	土	黒褐色	6.2	0.19	完形	
34－13	床面	丸玉	土	灰褐色	5.4mm以上	0.12	1／2残存	
34－14	床面	丸玉	土	黒褐色	6.2	0.22	完形	
34－15	床面	丸玉	土	灰褐色	6.5	0.21	1／2残存	
34－16	床面	丸玉	土	黒褐色	7.4	0.26	完形	
34－17	床面	丸玉	土	黒色	7.2	0.25	完形	
34－18	床面	丸玉	土	黒色	6.8	0.17	7／8残存	３つに分かれる。合計した重さ
34－19	床面	丸玉	土	黒色	7.4	0.3	完形	
34－20	床面	丸玉	土	黒色	7.4	0.13	2／3残存	
34－21	床面	丸玉	土	黒色	7.1	0.23	完形	
34－22	床面	丸玉	土	黒色	6.4	0.22	完形	
34－23	床面	丸玉	土	黒色	7.9	0.34	完形	
34－24	床面	丸玉	土	黒褐色	7	0.31	完形	
34－25	石室埋土	丸玉	土	黒色	7.7	0.29	完形	
34－26	石室埋土	丸玉	土	黒色	7.7	0.31	完形	
34－27	石室埋土	丸玉	土	黒色	6.7mm以上	0.14	1／2残存	
34－28	石室埋土	丸玉	土	黒色	6mm以上	0.08	1／4残存	
34－29	石室埋土	丸玉	土	褐灰色	7.5	0.31	完形	
34－30	石室埋土	丸玉	土	にぶい橙色	6.4	0.19	完形	
34－31	石室埋土	丸玉	土	黒色	7.1	0.26	完形	
34－32	石室埋土	丸玉	土	黒褐色	7.2	0.29	完形	
34－33	石室埋土	丸玉	土	黒色	6.5	0.23	完形	
34－34	石室埋土	丸玉	土	黒色	7	0.26	完形	
34－35	石室埋土	丸玉	土	黒褐色	7.4	0.32	完形	
34－36	石室埋土	丸玉	土	黒褐色	6.6	0.23	完形	
34－37	石室埋土	丸玉	土	黒褐色	7.1	0.27	完形	
34－38	石室埋土	丸玉	土	にぶい橙色	7	0.18	完形	大きくつぶれる
34－39	石室埋土	丸玉	土	黒色	7.5	0.21	5／6残存	２つに分かれる。合計した重さ
34－40	石室埋土	丸玉	土	黒褐色	7.4	0.22	3／4残存	２つに分かれる。合計した重さ
34－41	石室埋土	丸玉	土	黒色	6.5	0.09	1／3残存	
34－42	石室埋土	丸玉	土	黒色	7.7	0.3	完形	
35－43	石室埋土	丸玉	土	黒色	6.9	0.26	完形	
35－44	石室埋土	丸玉	土	黒色	5.6	0.22	完形	
35－45	石室埋土	丸玉	土	黒色	7	0.28	完形	
35－46	石室埋土	丸玉	土	黒色	6.5	0.2	完形	
35－47	石室埋土	丸玉	土	黒色	7.4	0.23	完形	
35－48	石室埋土	丸玉	土	黒色	7.8	0.25	完形	２つに分かれる。合計した重さ
35－49	石室埋土	丸玉	土	黒色	7.5	0.23	1／2残存	
35－50	石室埋土	丸玉	土	黒色	6.8	0.23	3／4残存	
35－51	石室埋土	丸玉	土	黒色	7.2	0.21	2／3残存	２つに分かれる。合計した重さ
35－52	石室埋土	丸玉	土	褐灰色	7.1	0.24	9／10残存	２つに分かれる。合計した重さ
35－53	石室埋土	丸玉	土	黒色	7.5	0.23	完形	
35－54	石室埋土	丸玉	土	黒色	7.8	0.28	完形	
35－55	石室埋土	丸玉	土	黒色	6.6	0.26	完形	
35－56	石室埋土	丸玉	土	黒色	7.5	0.32	完形	
35－57	石室埋土	丸玉	土	黒褐色	7.3	0.29	完形	
35－58	石室埋土	丸玉	土	黒色	6.7	0.26	完形	
35－59	石室埋土	丸玉	土	黒色	6.6	0.27	完形	
35－60	石室埋土	丸玉	土	黒色	6.5	0.23	完形	
35－61	石室埋土	丸玉	土	黒褐色	6.8	0.25	完形	
35－62	石室埋土	丸玉	土	黒色	6.8	0.21	完形	
35－63	石室埋土	丸玉	土	黒褐色	6.4	0.23	完形	
35－64	石室埋土	丸玉	土	黒褐色	7.2	0.27	完形	
35－65	石室埋土	丸玉	土	黒褐色	6.4	0.23	完形	
35－66	石室埋土	丸玉	土	黒褐色	7	0.23	2／3残存	３つに分かれる。合計した重さ
35－67	石室埋土	丸玉	土	黒褐色	7	0.19	2／3残存	
35－68	石室埋土	丸玉	土	黒色	7	0.14	1／2残存	
35－69	石室埋土	丸玉	土	黒色	5.8	0.12	1／2残存	
35－70	石室埋土	丸玉	土	黒褐色	7	0.09	1／4残存	
35－71	石室埋土	丸玉	土	黒褐色	6.4	0.06	1／4残存	
35－72	石室埋土	小玉	ガラス	青紺色	3.9	0.06	完形	
35－73	石室埋土	小玉	ガラス	青紺色	3.1	0.03	完形	
35－74	石室埋土	小玉	ガラス	青紺色	3.8	0.05	完形	
35－75	石室埋土	小玉	ガラス	青紺色	4	0.05	完形	
35－76	石室埋土	小玉	ガラス	青紺色	3	0.02	完形	歪みが大きい
35－77	石室埋土	小玉	ガラス	青紺色	3.6	0.05	完形	
35－78	石室埋土	小玉	ガラス	青紺色	3	0.04	完形	中央部がへこんでいる
35－79	石室埋土	小玉	ガラス	青紺色	3.7	0.04	完形	
35－80	石室埋土	小玉	ガラス	青紺色	3	0.04	完形	２つに分かれる

4．小　結

（1）東真方古墳群C群

第２次調査では小型の石棺墓と１号墳の前方部が確認された。

石棺墓の時期については、棺内および周辺から遺物が出土していないため正確にはわからない状況である。第１次調査の報告によるとこの古墳群では丘陵の頂上にある１号墳が最も古く４世紀後半ごろ、これに続いて２号墳が４世紀末～５世紀初頭と考えられている。石棺墓は１号墳のすぐ隣に位置することと、１号墳の石棺と比べ規模が小さいことを合せて考えるとこれに続く時期になる可能性が考えられる。また、石棺墓の内法は75×13cmしかなく、到底大人が入れる寸法ではない。したがって、小児用とするのが自然であると思われる。

前方後円墳であることが確認できた１号墳については前方部の張り出しが小さいため、いわゆる帆立貝形となると考えられる。規模は全長が10.5m、後円部の直径が8.2m、前方部端部の幅が4.6m、前方部の長さが2.2m、くびれ部の幅が3.6mになると推定できる。前方部の主軸は丘陵の尾根筋を向いており、端部は丘陵を溝で切断し、造り出している。

（2）奈良尾遺跡

第２次調査では弥生時代および中・近世の遺構が検出されたが、いずれも墓に関連するものであった。弥生時代については甕棺墓１基のみが確認されている。甕棺は口縁部の下に１条突帯を貼付することや形態については口縁部下がややすぼまるものの胴部上半がほぼ直立すること、胴部のＭ字突帯は頂部を押さえコの字形になるものの未発達であること等を考え合わせると時期は橋口編年のＫⅢａにあたると考えられる。器高が125.6cmあり、稀にみる大型品である。第２次調査区では他に甕棺墓は検出されなかったが、元は深い位置に埋置されていたはずのこの大型棺が地表近くになるまで大きく削平を受けている状況を考慮するとかつては周辺にも中・小型棺があり、甕棺墓群を形成していた可能性が高いと推定される。大型棺はこの甕棺墓群において中心的な墓であったと考えられる。

火葬土坑については第１次調査で15基が報告されている。このうち、第２次調査区の火葬土坑に近い位置にある１・２号火葬土坑とは規模と形態が類似している。特に１号火葬土坑は、床面に４個の石を据えるなどの点でも第２次調査区火葬土坑と近似している。これら３基は位置関係と形態の類似点から同一の火葬土坑群であった可能性が高いといえる。時期については第２次調査では出土品がなかったため、第１次調査の結果を援用して15世紀後半～16世紀中ごろとしておきたい。

土坑墓については第２次調査で30基が検出された。これを墓坑の主軸方向や位置関係などから分類すると４つの墓群に分けられる（第12図）。便宜上それぞれの群にＡ～Ｄまでのアルファベットを振るとＡ群は１・３・24～27号土坑墓、Ｂ群は２・４～11・19・20号土坑墓、Ｃ群は12～18・21～23号土坑墓、Ｄ群は28～30号土坑墓になる。それぞれの群は一般的に考えると血縁関係や地域的なつながりがあると推定されるが、中でもＡ群は酷似した墓坑が近接し、同方向に並ぶなど配置に規則性がみられるため、近親者や家族の墓であることも推測される。土坑墓の時期については土師皿１点のみの出土であるため判断できないが、第１次調査の結果を援用

し中世後期～近世としておきたい。

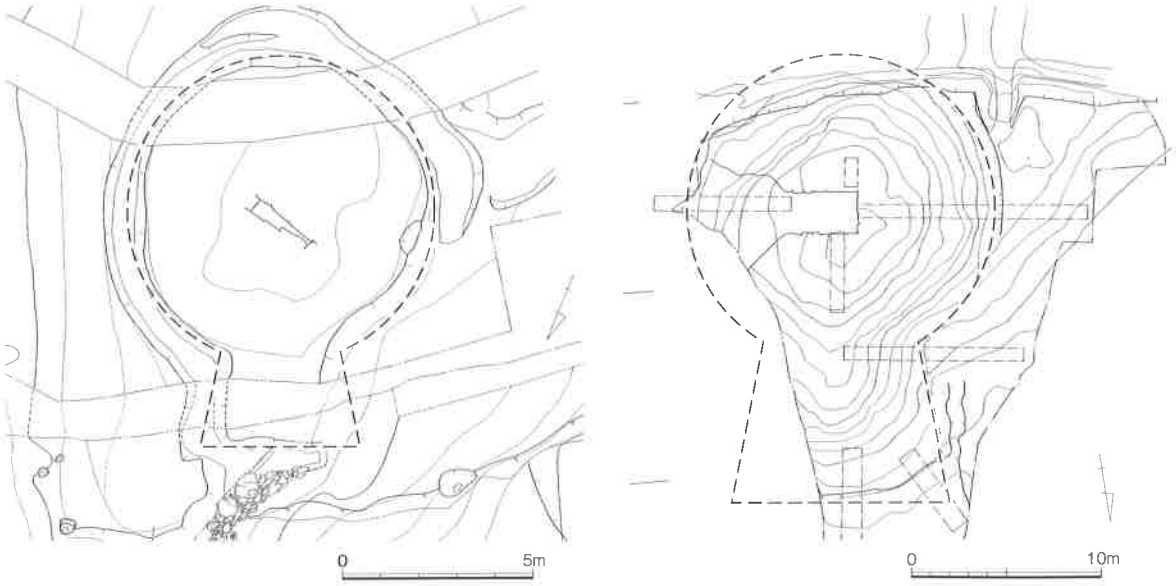
（３）多久口木３号墳

３号墳では石室内からの須恵器の出土はなく、すべて墳丘上や表土内から出土した。中には器台や子持壺などもあり、これらはかつて墳丘上に並べられていたと思われるが、原位置を止めるものはなかった。

３号墳の時期についはこの墳丘出土の須恵器を手掛かりとする。出土の割合が多い蓋と坏身を指標とすると上限にあたるのは第41図１・２で、TK47古段階、下限は第41図16で、MT15新段階に相当すると思われる。このことから３号墳は５世紀後葉～末に築造され、６世紀前葉まで追葬が行われたものと考えらえる。第１次調査の報告によると、１号墳は６世紀後半に築造された後６世紀末まで追葬が行われ、２号墳は６世紀前半に築造された後６世紀中ごろから末に追葬が行われている。このことから、古墳の新旧関係は３号墳→２号墳→１号墳の順になる。古墳の位置関係を古い順から追ってみると丘陵北部にまず３号墳が築造され、続いて丘陵頂上部に２号墳、最後に両古墳の間に１号墳が築かれている。追葬の時期を含めると１・２号墳、２・３号墳がそれぞれ併存した期間がある。

周辺の状況をみると多久川の対岸にある荻浦丘陵上には前方後円墳である砂魚塚１号墳が位置する。この古墳は全長23.8m、後円部径17.6m、前方部幅13mであり、全長23mの多久口木３号墳と同程度の規模を有する。築造されたのは６世紀第２四半期とされる。また、長野川流域に目を向けると近い時期の前方後円墳としては東真方古墳群Ａ群１号墳と東二塚古墳がある。前者は後円部径15mの小型の前方後円墳で、６世紀中ごろの築造、後者は全長45m、後円部径30mで発掘調査は実施されていないが、石室の排土から出土した須恵器により６世紀前半代の築造とみられている。いずれの前方後円墳も多久口木３号墳に続く時期にあたる。

（参考文献）
前原市教育委員会　1995　『荻浦－古墳編』前原市文化財調査報告書第58集
第２回九州前方後円墳研究会　1999　『九州における横穴式石室の導入と展開』（第Ⅰ・Ⅱ分冊）
第27回九州古墳時代研究会　2001　『糸島の古墳』



第48図　墳丘推定復元図　（左：東真方古墳群Ｃ群１号墳（１/200）、右：多久口木３号墳（１/400））

Ⅲ．科学分析

１．多久口木３号墳出土資料の保存科学的調査

比佐陽一郎・松園菜穂（福岡市埋蔵文化財センター）

（１）はじめに

多久口木３号墳から出土した資料の内、装身具である耳環、ガラス玉を対象にした保存科学的調査を行った。耳環やガラス玉といった装身具は、外形や色調といった肉眼観察で得られる情報に加え、顕微鏡や材質分析の装置といった理化学機器を援用することによって、製作技法や材質に関わる情報を得ることができる。これらは資料の来歴や流通について有益なものとなり得る。

まずガラスについていえば、近代以前のガラスは珪素を主成分とする珪酸塩ガラスであるが、近年の理化学機器を用いた調査の広まりによって、融剤や着色剤等から幾つかに分類され、それぞれの系譜や変遷が明らかにされてきている（肥塚2010）。また、ガラス製品の中でも数多く出土する小玉の類には、製作技法も複数存在することが知られている（大賀2002）。

耳環も金や銀という貴金属の色調を最終目的としながらも、そこに至るには様々な素材や技法が用いられていることが知られている。多種多様な材料や技法が用いられることの意味や、製作地は解明されていないものの、細かい情報の蓄積によって問題解決の糸口が見つかることが期待される。

（２）調査の方法

調査対象とした資料は耳環２点とガラス小玉９点である。資料の時期は古墳時代中～後期（５世紀後葉～６世紀前葉）に比定される。今回の調査は、これら資料の製作技法と材質の同定を目的としたものである。調査には福岡市埋蔵文化財センターのデジタルマイクロスコープ（HIROX社製KH-8700）と、蛍光Ｘ線分析装置（AMETEK社製Orbis）を使用した。

蛍光Ｘ線分析は、試料にＸ線を照射し、試料に含まれる元素から生じる各元素ごとに特有のエネルギー値を持つ二次Ｘ線＝蛍光Ｘ線を検出器で捉え、その元素の種類や量を調べる分析法である。埋蔵文化財を対象とする場合、埋蔵環境下での腐食や付着物の影響によって組成が変化していることが想定され、分析の結果が資料本来の組成を表すものとはならない。しかし、含まれる元素の種類が変化することは考えにくく、定性的な評価であれば有効な結果が得られる分析手法といえる。装置はエネルギー分散型の微少部用装置で、分析条件は次のとおり。

対陰極：ロジウム(Rh)／検出器：シリコンドリフト検出器／印加電圧：20kV（＝ガラス）または50kV（＝耳環）・電流値：1000μA／測定雰囲気：真空／測定範囲0.3mmφ／測定時間120～180秒

（３）結果

①耳環

２点はほぼ同型同大であり、対とみて違和感はない。いずれも金色の薄板で芯材を覆う構造であるが、薄板は所々で破損して芯材が露出している。まず材質分析で、金色の薄板部分は２点とも、金を主成分として銀、銅、鉄が検出される。また、芯材部分では、銅を主成分として、僅かに金、鉛、鉄を含む。この内、鉄は埋土に豊富に含まれる成分であり、耳環を構成する金属に含

まれるものか否かの判別は困難である。また、外表で検出される銅も芯材からの影響も想定され、薄板に本来含まれる元素かどうかは不明である。芯材に見られる金は外表薄板からの影響を考える必要があろう。なお、古代の鍍金に用いられる水銀は検出されておらず、観察の結果とも併せて、金（と銀）の薄板を、鉛を僅かに含む銅の芯に被せた構造であることが分かる。

また、開口部付近の環の内側には、環を曲げた際に付いたと見られる薄板の皺が多数認められる。特に屈曲の強い部分では大きな皺が残るとともに、連続する凹みも認められ、加工の際に付いた何らかの工具痕と推察される。この様に加工の痕跡が多く残る資料は、これまでの調査経験の中ではそれほど多くなく、耳環の作りとしては粗雑な部類に属するといえる。耳環としては出現期段階に近い時期の資料であり、作りの粗さが時期的なものを反映するか、更にやや想像を逞しくすれば、韓国の資料には皺が残るなど粗雑な作りのものが多い印象であり（西山2002）、半島製の可能性も考慮すべきかもしれない。このほか、本来であれば開口部端面に被せた薄板の端を折り込んだ痕跡が残るはずであるが、２点とも開口部端面が破損し、薄板は失われている。

②ガラス玉

調査の結果は一覧表に示すとおりである。材質分析については、今回の調査では完全非破壊分析による定性分析であり、得られた元素の種類と相対強度から判定している。なお、材質的な分類は肥塚隆保氏らによる研究（肥塚ほか2010）に従う。

９点は大きさに微妙な差異は認められるものの、いずれも小玉に区分される資料である。すべて青紺色でよく似た色調を呈する。顕微鏡観察による製作技法推定では、全点で気泡が孔の長軸方向に平行して並ぶ様子が見られることから、引伸したガラス管を細分し、加熱によって丸く仕上げる製作方法と考えられる。

また、材質分析では、すべてアルカリ珪酸塩ガラスに区分される。この内、１点（35-80）のみカリガラス、残りはソーダ石灰ガラスであった。ソーダ石灰ガラスは更に、マグネシウムの検出が少ないタイプ（35-72、75、77、78、79）と多いタイプ（35-73、74、76）の二種類に分けることができる。先行研究によればソーダ石灰ガラスの内、低アルミナのものには、酸化マグネシウムと酸化カリウムの少ないタイプと、これらを多く含むタイプがあるとされる。アルカリ原料の違いから、前者はナトロンガラス、後者は植物灰ガラスと呼称されている（肥塚ほか2010）。多久口木３号墳の資料の内、マグネシウムの多いものは、その他含有元素や色調、製作技法といった特徴が植物灰ガラスのそれに合致するものの、少ないタイプはカリウムの量やその他の特徴がナトロンガラスのものとは異なっている。田村朋美氏らによる新たな研究（Oga and Tamura2013）のGroup SIVに属する可能性があるが、定量値を算出していないこともあり、これ以上の検討は控えたい。

【参考文献】

大賀克彦2002「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　福井県清水町教育委員会

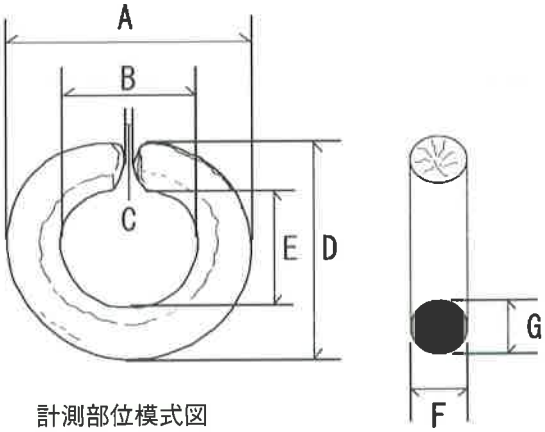
Katsuhiko Oga and Tomomi Tamura 2013「Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere: Chemical compositions, chronologies, provenances and Trade Routees of Imported Glass Beads in the Yayoi-Kofun periods (3rd Century BCE-7th Century CE)」『Journal of INDIAN OCEAN ARCHAEOLOGY』Number 9, 2013

肥塚隆保2010「古代ガラスの科学」『月刊文化財』566号　第一法規

肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦2010「材質とその変遷」『月刊文化財』566号　第一法規

西山めぐみ2002「金工技術からみた日韓交渉－古墳時代の耳環の材質・製作技法を中心に－」『人類史研究』13　人類史研究会

表４　耳環の計測値



計測部位模式図

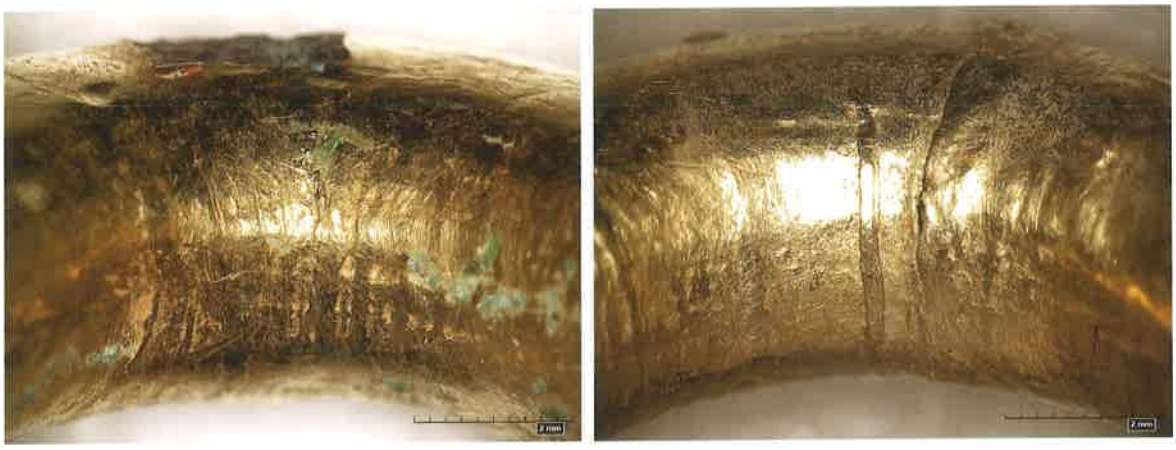
資料番号	推定される構造	計測値（A～Gはmm、重量はg）									
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	重量
33－１	銅芯ー金（銀を含む）薄板（中実）	24.00	15.15	(3.00)	20.70	12.00	4.40	4.70	4.40	4.00	5.52
33－２	銅芯ー金（銀を含む）薄板（中実）	23.80	14.90	(2.55)	20.10	11.50	4.50	4.40	4.30	4.30	6.16

（　）は破損部分の計測値

表５　ガラス玉の調査結果

資料番号		色調	観察所見	分析所見
35－72	小玉	青紺	整ったドーナツ状を呈する。気泡は孔の長軸に平行して並ぶ。→引伸ばし	◎Si／●Ca／○Al、K、Fe／△Na、Mg、Ti、Mn、Co、Cu、Pb→ソーダ石灰ガラス
35－73	小玉	青紺	他に比べ小ぶり。整った太鼓状を呈する。気泡は孔の長軸に平行して並ぶものや、引伸ばされたものが見られる。→引伸ばし	◎Si／●Na、Ca／○Mg、Al、K、Fe／△Ti、Mn、Co、Cu、Pb→ソーダ石灰ガラス
35－74	小玉	青紺	小口面が両側とも研磨したかのように平滑。気泡は孔の長軸に平行して並ぶものや、引伸ばされたものが見られる。→引伸ばし	◎Si／●Ca／○Mg、Al、K、Fe／△Na、Ti、Mn、Co、Cu、Pb→ソーダ石灰ガラス
35－75	小玉	青紺	整ったドーナツ状を呈する。気泡は独立した大型のものが多いが、概ね孔の長軸に平行して並ぶ。→引伸ばし	◎Si／●Ca／○Al、K、Fe／△Na、Mg、Ti、Mn、Co、Cu、Pb→ソーダ石灰ガラス
35－76	小玉	青紺	他に比べ小ぶり。やや斜めに歪む太鼓状を呈する。気泡は孔の長軸に平行して並ぶものや、引伸ばされたものが見られる。→引伸ばし	◎Si／●Ca／○Na、Mg、Al、K、Fe／△Ti、Mn、Co、Cu→ソーダ石灰ガラス
35－77	小玉	青紺	側面観はやや歪むが平面形は整った形状。気泡は孔の長軸に平行して並ぶ。→引伸ばし	◎Si／●Ca／○Na、Al、K、Fe／△Mg、Ti、Mn、Co、Cu、Pb→ソーダ石灰ガラス
35－78	小玉	青紺	やや歪んだドーナツ状を呈する。側面と小口面の境に介在物（石英粒）の突出が見られる。気泡は独立した大型のものが多いが、概ね孔の長軸に平行して並ぶ。→引伸ばし	◎Si／●Ca／○Na、Al、K、Fe／△Mg、Ti、Mn、Co、Cu、Pb→ソーダ石灰ガラス
35－79	小玉	青紺	整った太鼓状を呈する。気泡は孔の長軸に平行して並ぶ。→引伸ばし	◎Si／●Ca／○Na、Al、K、Fe／△Mg、Ti、Mn、Co、Cu、Pb→ソーダ石灰ガラス
35－80	小玉	青紺	（観察時、二片に分離）整った太鼓状を呈する。気泡は孔の長軸に平行して並ぶ。→引伸ばし	◎Si／●K／○Al、Ca、Fe／△Mg、Ti、Mn、Co→カリガラス

記号は検出される元素の量を示す
（◎＞●＞○＞△）

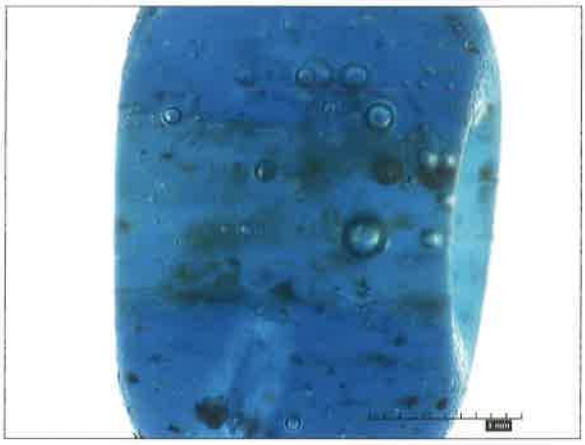


33－１　　33－２

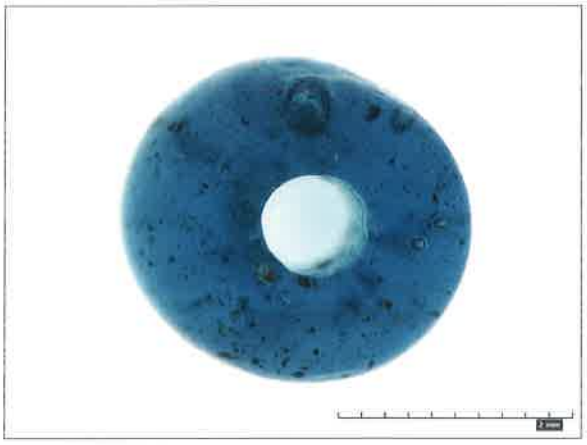
写真１　耳環のデジタルマイクロスコープ画像
（資料番号は一覧表に一致）

35－72

35－74

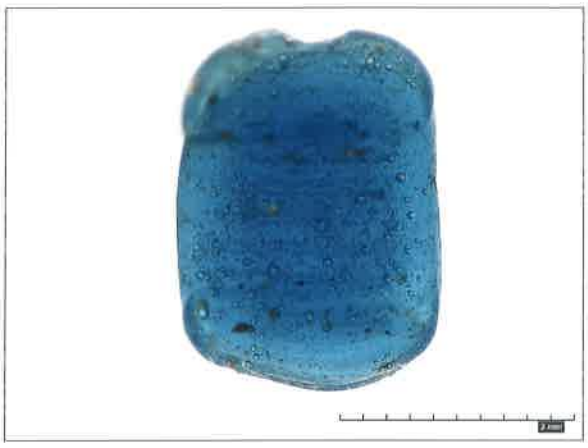


35－75



35－76

35－78



35－80

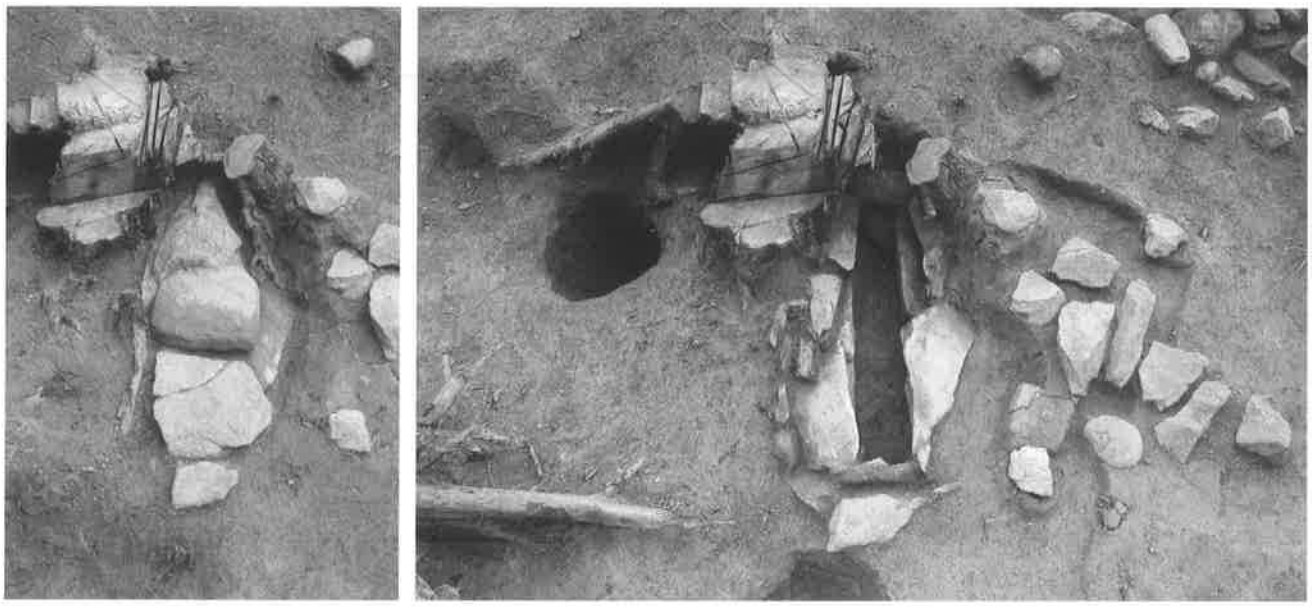
写真２　ガラス小玉のデジタルマイクロスコープ画像
（資料番号は一覧表に一致）

図　　版

１－１　東真方古墳群Ｃ群第２次調査区　空中写真
（南から、写真下方の道路部分と樹木が茂っている部分が第１次調査区南端）

１－２　東真方古墳群Ｃ群第２次調査区　空中写真（南から、主要部）

図版 2



２－１　東真方古墳群Ｃ群第２次調査区　１号石棺墓検出状況（左：北から）および蓋石除去状況（右：北から）

２－２　東真方古墳群Ｃ群第２次調査区　１号石棺墓東側壁検出状況（左：北西から）および蓋石除去状況（右：東から）

２－３　東真方古墳群Ｃ群第２次調査区　１号石棺墓石枕出土状況（左：北から）および石材除去後完掘状況（右：北から）

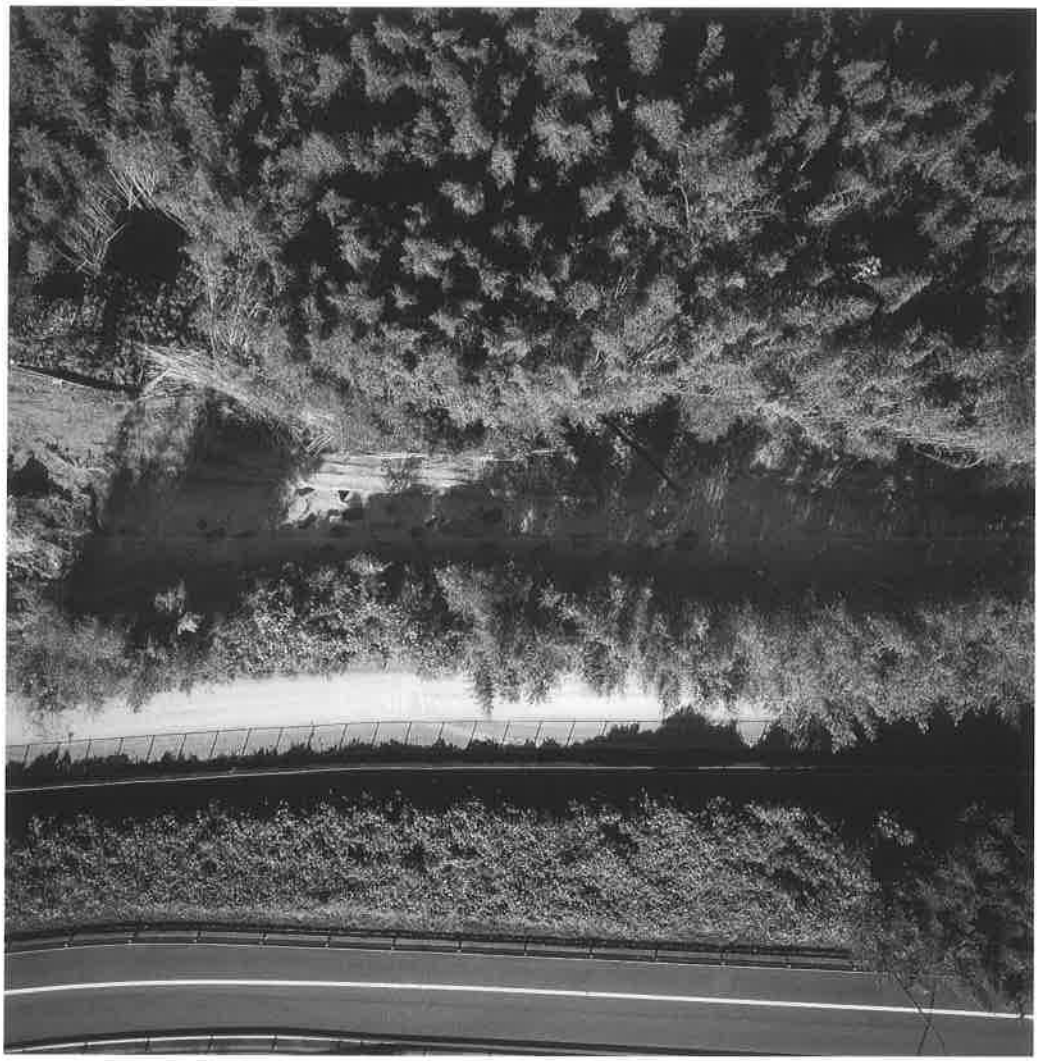
3－1　東真方古墳群Ｃ群第２次調査区　丘陵東側斜面（東から）

3－2　東真方古墳群Ｃ群第２次調査区　２号溝土層（東から）

3－3　東真方古墳群Ｃ群第２次調査区　３号溝土層（左：東から）および土師器椀出土状況（右：北から）

3－4　東真方古墳群Ｃ群第２次調査区　出土遺物

図版 4



4－1　奈良尾遺跡第２次調査区　空中写真（南から）

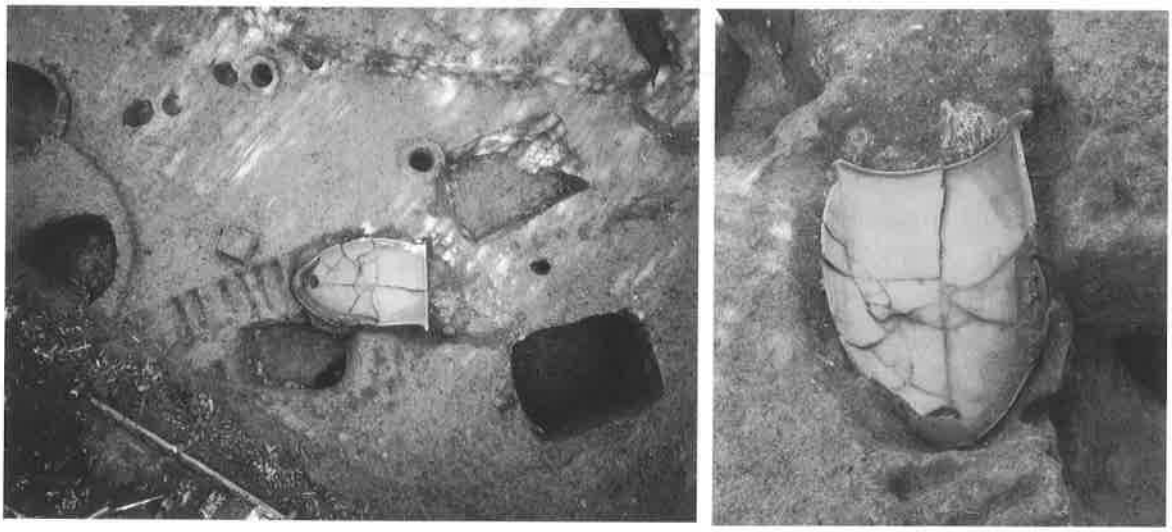
4－2　奈良尾遺跡第２次調査区から第１次調査Ⅰ区を望む（北から、車が走っている道路部分がⅠ区）

5－1　奈良尾遺跡第２次調査区　土坑墓出土状況（左：東から）（右：北から）

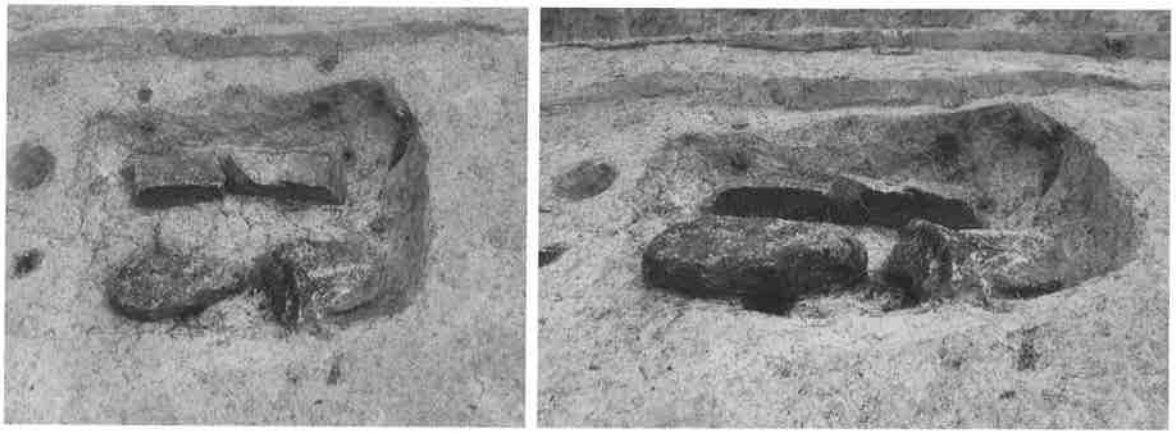
5－2　奈良尾遺跡第２次調査区　土坑墓出土状況（左：北から、25・26・27号土坑墓）（右：北から、24号土坑墓）

5－3　奈良尾遺跡第２次調査区　土坑墓出土状況（左：東から、１号土坑墓）（右：南から、12・13号土坑墓）

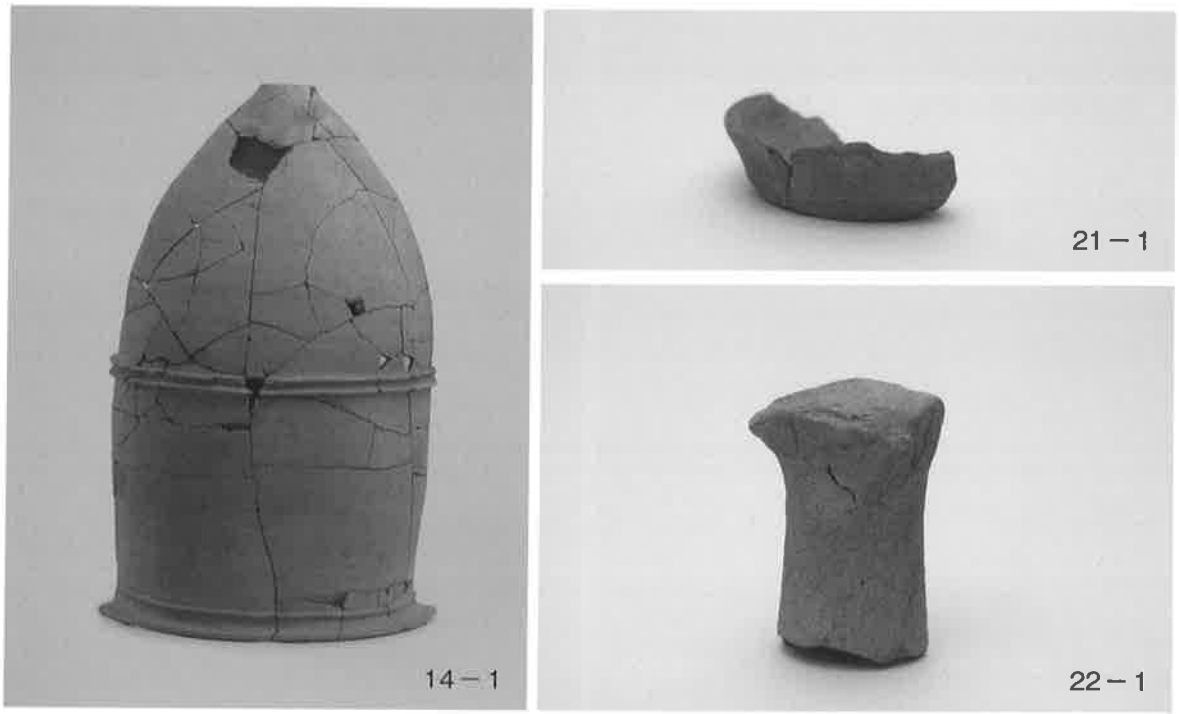
図版 6



6－1　奈良尾遺跡第２次調査区　甕棺墓および土坑墓出土状況（左：南から）、甕棺墓近景（右：西から）



6－2　奈良尾遺跡第２次調査区　火葬土坑（左・右：南から）



6－3　奈良尾遺跡第２次調査区　出土遺物

7－1　多久口木３号墳　空中写真（南東から、石室検出状況）

7－2　多久口木３号墳　石室攪乱状況
（西から）

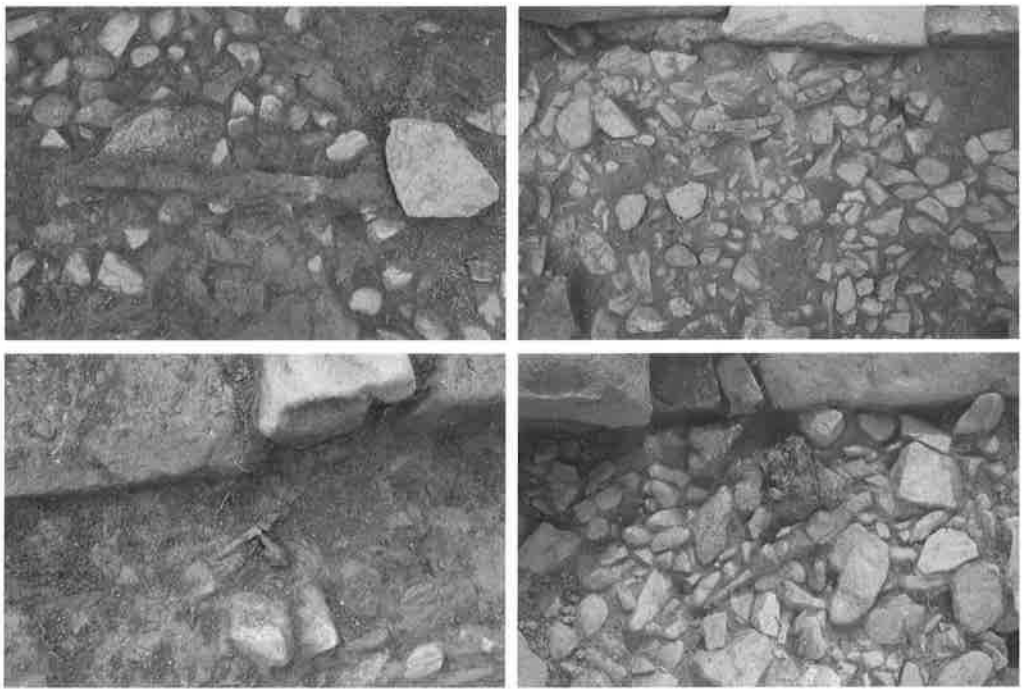
7－3　多久口木３号墳　石室検出状況
（東から、奥壁）

7－4　多久口木３号墳　石室検出状況
（左：南から右側壁、中：西から開口部、右：北から左側壁）

7－5　多久口木３号墳　腰石配置状況および腰石配置溝（左：南東から、中：南から、右：東から）

図版 8

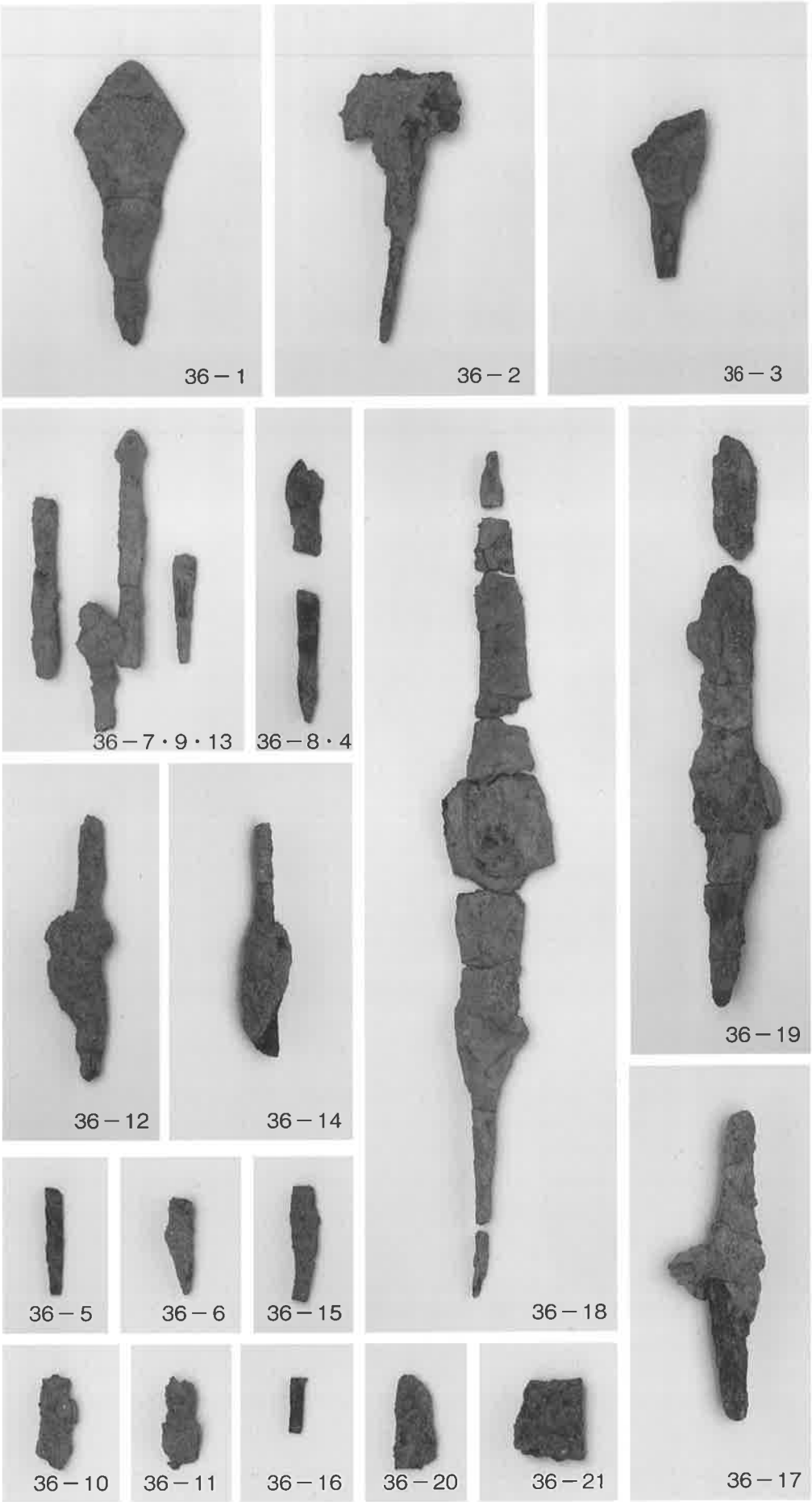
8－1　多久口木３号墳　石室床面遺物出土状況（東から）



8－2　多久口木３号墳　石室床面遺物出土状況
（左上：東から37－34、左下：北から36－3・37－22、右上：南から37－32・33他、右下：北から36－19）

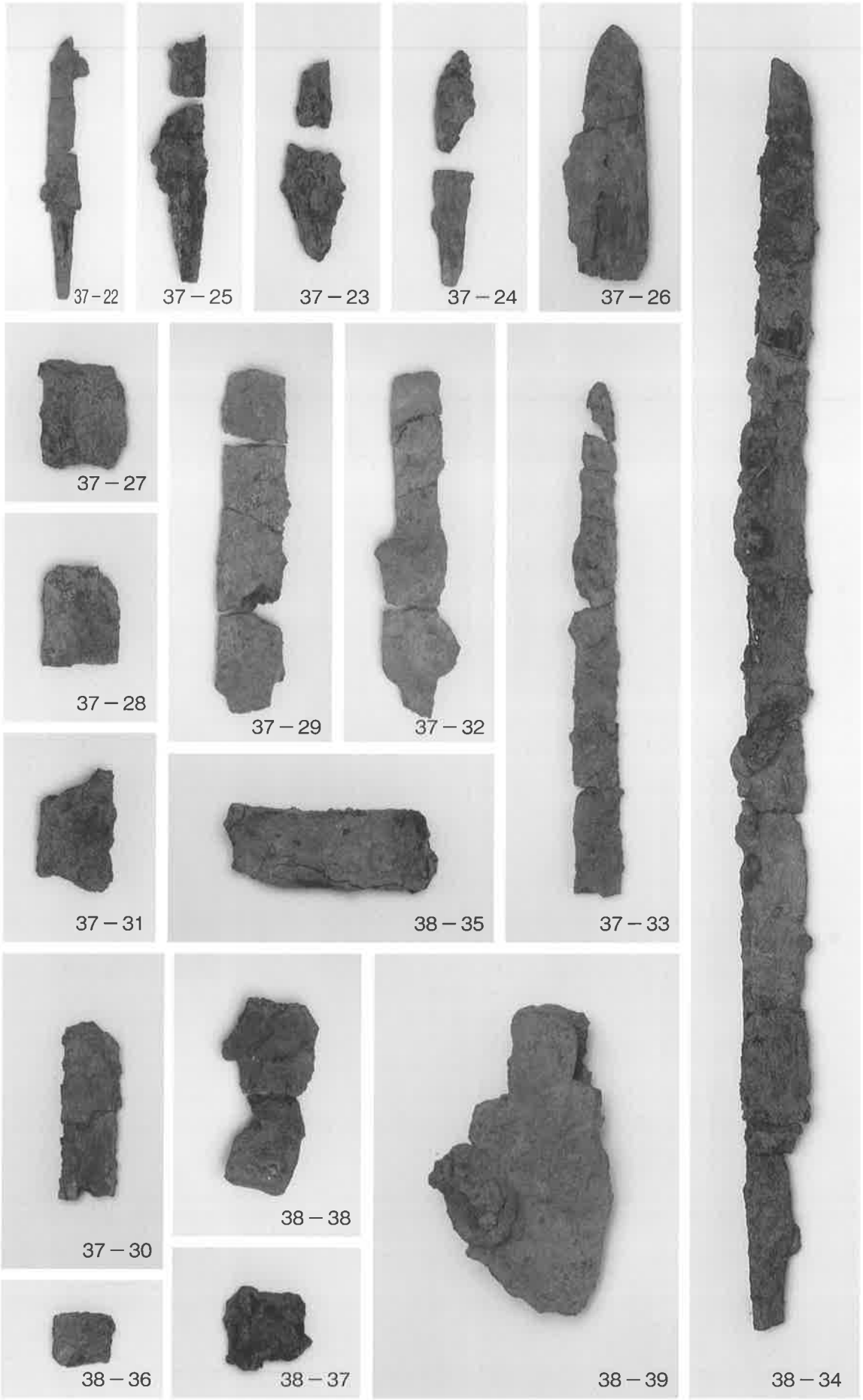
8－3　多久口木３号墳　石室床面第２面検出状況
（東から）

8－4　多久口木３号墳　墳丘土器出土状況
（南から41－5）

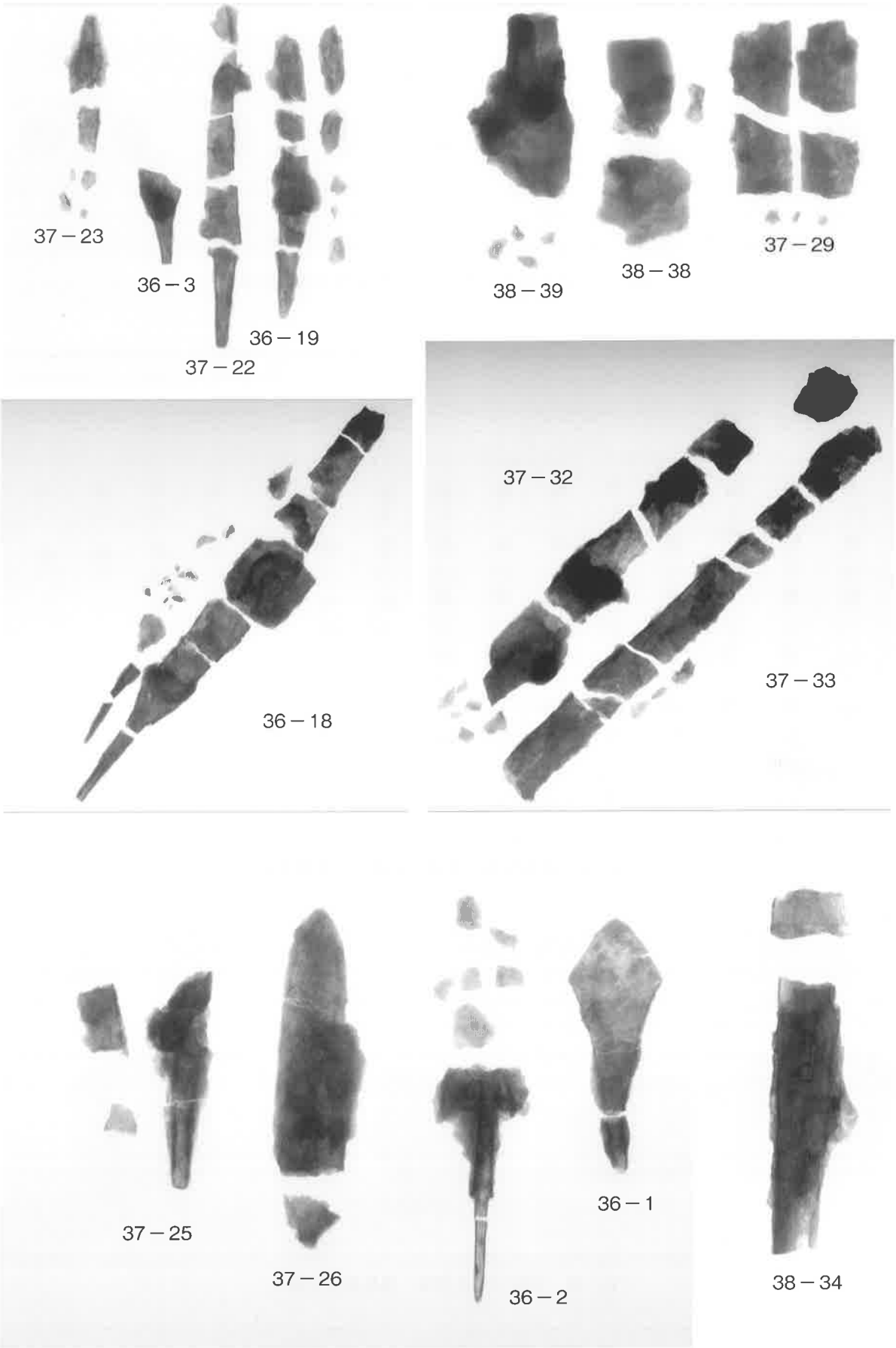


9－1　多久口木３号墳　出土鉄器１

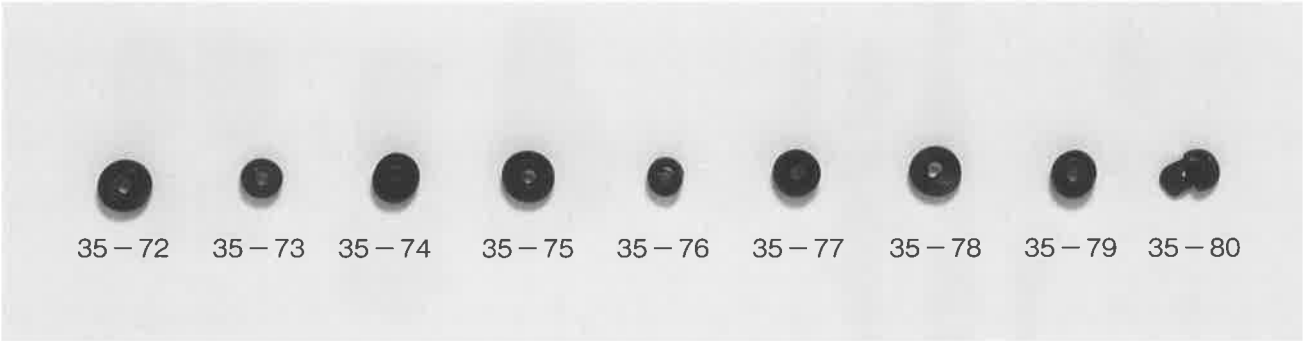
図版 10



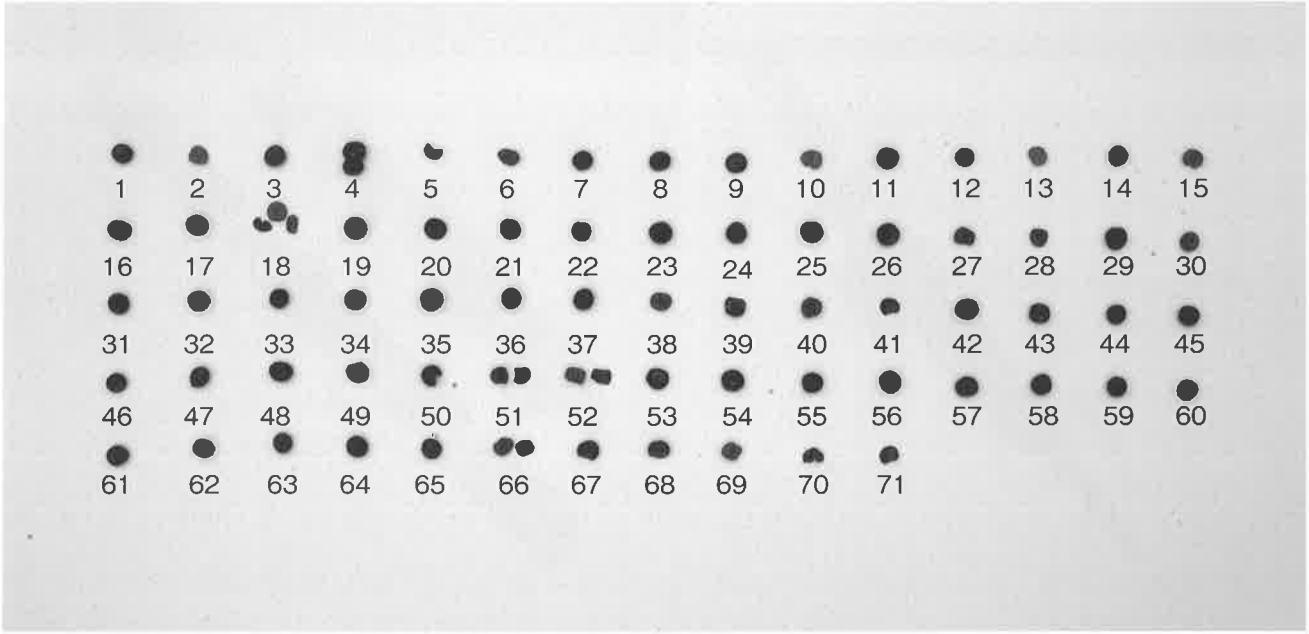
10－1　多久口木３号墳　出土鉄器２



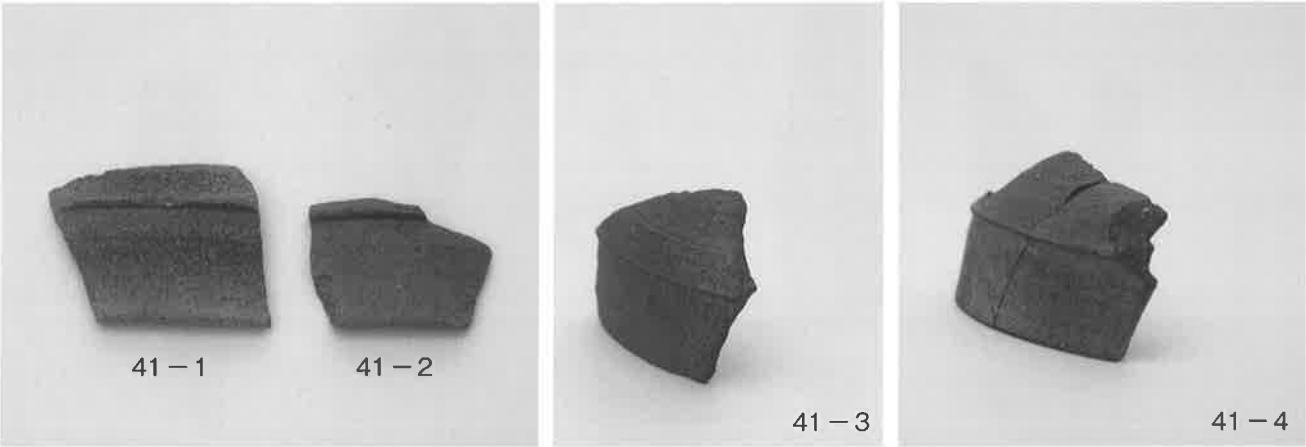
11－1　多久口木３号墳　出土鉄器Ｘ線写真



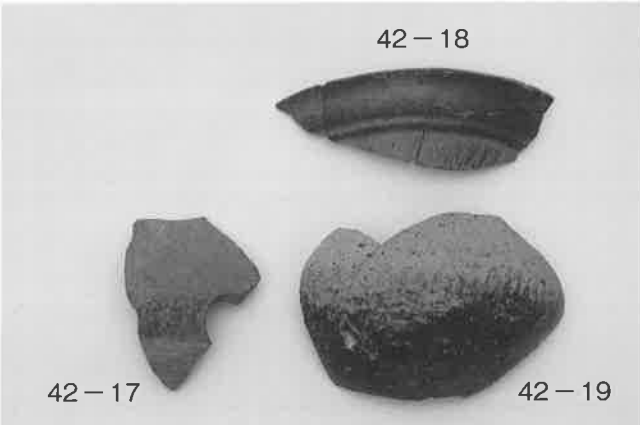
12－1　多久口木３号墳　石室出土ガラス製小玉



12－2　多久口木３号墳　石室出土土製丸玉　※1～42は第34図、43～71は第35図



12－3　多久口木３号墳　墳丘出土土器１



13－1　多久口木３号墳　墳丘出土土器２

14－1　多久口木３号墳　墳丘出土土器３

報　告　書　抄　録

ふりがな	こくどう202ごういまじゅくどうろかんけいまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょⅠ	
書名	国道202号今宿道路関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ	
副書名	東真方古墳群C群第2次調査・奈良尾遺跡第2次調査・多久口木古墳群第2次調査	
巻次		
シリーズ名	糸島市文化財調査報告書	
シリーズ番号	第20集	
著者名	江野道和、比佐陽一郎、松園菜穂	
編集機関	糸島市教育委員会	
所在地	〒819－1192　福岡県糸島市前原西一丁目1番1号	
発行年月日	西暦　2019年3月14日	
保管場所	〔写真〕〔図版〕〔遺物〕	糸島市教育委員会
保管場所所在地	〒819－1192　福岡県糸島市前原西一丁目1番1号	

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査総面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東真方古墳群C群・奈良尾遺跡・多久口木古墳群	福岡県糸島市東・多久	40230		33°53′66″ 33°54′13″ 33°54′42″	130°19′49″ 130°19′78″ 130°20′45″	2016.8 ～ 2018.3	1251.74㎡	道路

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東真方古墳群C群	古墳	古墳時代	円墳、前方後円墳、石棺	土師器	
奈良尾遺跡	墓	弥生時代、中～近世	甕棺墓、火葬土坑、土坑墓	甕棺、弥生土器、土師器	
多久口木古墳群	古墳	古墳時代	前方後円墳	須恵器、鉄器、装身具類、弥生土器	

国道202号今宿道路関係
埋蔵文化財調査報告書
Ⅰ

糸島市埋蔵文化財発掘調査報告書　第20集

2019年3月14日

発行　糸島市教育委員会
〒819－1192 福岡県糸島市前原西一丁目1番1号

印刷　株式会社 西日本新聞印刷
〒812－0041 福岡県福岡市博多区吉塚8－2－5